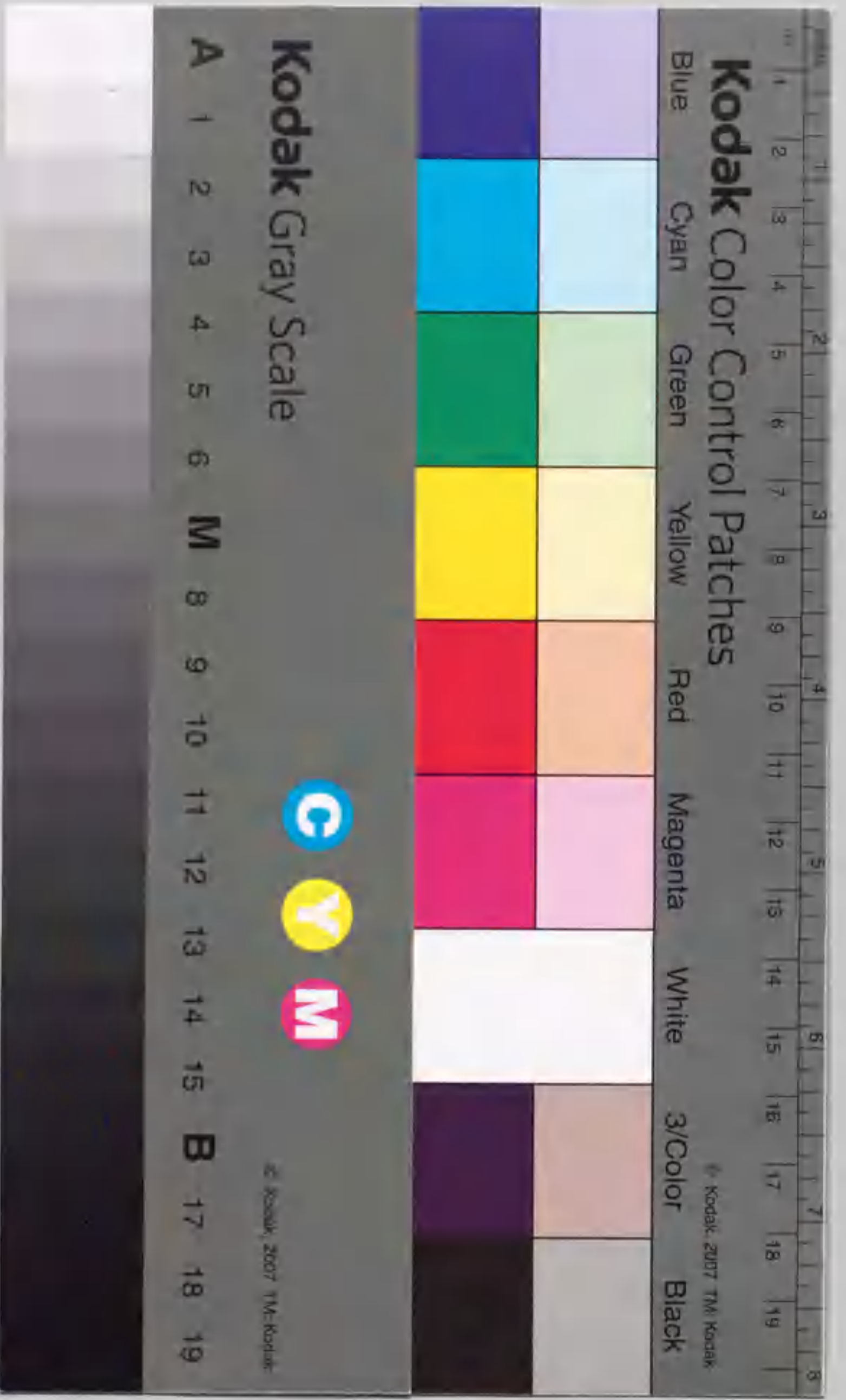


訳語彙の研究

— 明治末期から
昭和初期にかけて —

山本いずみ



報告番号 甲 3382 号

訳語彙の研究

— 明治末期から昭和初期にかけて —

山本いずみ

《目次》

序	P 1
第1章 時代と資料	
1. 明治末期から昭和初期の訳語語彙を概観するにあたって	P 2
2. 新聞資料	P 3
3. 辞書資料	P 5
第2章 原語から見た訳語	
1. 語釈中に見る外来語の進出	P 12
2. 原語と外来語のずれ	P 17
3. 棲み分ける意識見出し	P 21
第3章 外来語への意味構造分析的アプローチ	
1. 増加する外来語	P 32
2. 意味構造分析の試み	P 34
3. 客体から主体へ	P 41
第4章 外来語使用の実際	
1. 昭和7年『東京朝日新聞』に見る外来語使用の実際	P 51
2. 外来語使用の変化と傾向	P 57
3. 外来語のその後	P 70
第5章 意識語と外来語	
1. 意識と音訳の数量的変化	P 78
2. 訳し方の違いと意味	P 85
3. 単純さと複雑さの相生	P103
結	P108
《資料編》	
資料1 東京朝日新聞(昭和7年)使用外来語一覧	P111
資料2 辞書の見出し語と原語の対応関係一覧	P122

序

日本語の中には多くの外来の要素が取り入れられて来た。古く、表記の手段として漢字が入り込み、最近では、カタカナで書かれた外来語が街に溢れている。異文化の香りがする言葉を気軽に用いる現在、こうした傾向に対する批判もしばしば耳にするが、日本語が、他の文化圏から完全に隔絶された世界で用いられている言語でない以上、外からもたらされる様々な刺激が日本語を変化させるという現象は、必然的な結果として日々進行している。

本論では、外（具体的には特に欧米諸国）との接触による日本語の変化について、外来の概念事物に対する訳語が、意味分野（分類された意味の世界）という観点から見た時、どのような配分で日本語の中に流入してきたか、つまり、既存の語だけでは社会状況等の変化に対応しきれなくなった部分を訳語はどのように補ってきたか、ということを中心に論じたいと思う。論を進めるにあたっては、意識・音訳という訳し方の違いに着目し、この違いは意味分野という観点から見た場合、どのような特色を持つのかを明かにする。なお、本論は、訳語を語彙（集合）で扱い、全体的な流れの把握に主眼をおいたが、必要に応じて、構成する個々の語の変化にも注目し、その意味について考えた。

考察の対象とする期間としては、明治末期から昭和初期を設定した。文明開化に始まった急激な西洋化は、日本語の上にも大きな影響を及ぼし、語彙が大きく更新され、標準語や言文一致体の成立を見るに至った。本論で取り上げた明治末期は、こうした混乱が一段落した時期であると同時に、まがりなりにも我が身とした新しい日本語の上に次なる発展の方向性が現れ始める時期でもある。ここを起点とし、昭和初期、政治的な圧力が権力として上から言葉のあり方を規定し始める前夜までの訳語語彙の変遷を概観する。

第1章 時代と資料

1. 明治末期から昭和初期の訳語語彙を概観するにあたって

ことばの変化は、社会の動きと無関係ではいられない。常に何等かの影響を受けている。その中でも、特に語彙は、非常に強く影響され、変化していく部分である。

文明開化による西洋諸国からの新しい概念事物の流入は、日本語の語彙に大きな影響を与え、著しく変化させた。特に漢語の増加には目をみはるものがある。その経緯について池上禎造氏は、

日本人の好みというか語感というか、こういったものが近代化した内容を盛るには歯切れのよく簡潔な漢語をふさわしいとして択んだわけであろう。こうして漢字は、明治以来の新しい生活の内容を盛る語を構成する要素となった(注1)

と述べている。が一方で、明治前期には、「漢語がじっくりと話言葉の中に根を下さないうで、文字言語的性格をもとどめて動揺する不安定な姿(注2)」を示していることを指摘している。

本論では、漢語を中心に、意識による新しい概念事物に対する訳がほぼ安定しつつあったと思われる明治末期を出発点とし、そこへ、音訳という新しい訳し方としての外来語が入り込む様子を、概観する。意識・音訳という訳し方の違いは、外来の概念事物を受け入れる際、どのような違いとして機能していくのだろうか。それぞれの訳の内部では、どのような変化が起こっていたか。そして、これらは、訳語語彙の変遷という大きな枠で見ると、どのように流れていくのか。明治末期から昭和初期、政治権力がことば自体に大きな影響を与え始める時代の前夜までの期間を対象とし、訳語語彙全体を視野に入れながら考えてみた。

なお、本論で用いた主な資料は次のとおりである。詳細については、本章の「2」および「3」で述べる。

- I. 東京朝日新聞縮刷版・昭和7年(1932)分
- II. 明治44年(1911)改訂初版発行『辞林44年版』
- III. 大正14年(1925)初版発行『広辞林』
- IV. 昭和9年(1934)新訂初版発行『広辞林新訂版』

これらのうち、資料Iは、主に外来語の実態を把握するための資料として用い、実際にどのような外来語が新聞で使用されたかを調査した。資料II~IVは、それ自体、ある時期の語彙を示す一つの目録と考え、訳語語彙研究の対象とすると同時に、資料Iで用いられた外来語が、どの時点で日本語の中に入り込んできたか、おおよその見当をつけるために利用した。無論、新聞が言語生活の全てを反映しているわけではなく、辞書に登録されたことが日本語としての市民権の獲得を必ずしも保証するものでもない。が、この点は十分に配慮しながら、訳語受容の実態の一部をかいまみようと思う。

2. 新聞資料

大正末期から昭和初期にかけては、借用方法の中心が、漢語訳(意識)から音訳へと移り、カタカナ書きされた外来語が急激に増加した時期であり(注3)、その供給源は、当時急速に発達しつつあったマスコミであった(注4)。よって、これらの語は「新聞語(注5)」とも言われ、その中心は英語を原語とするものによって占められていた(注6)。

現在の言語生活で多用されている外来語、それは、どのようにして日本語の中に入り込み、それぞれの位置を占めるに至ったのか。それを考えるにあたり、辞書という目録に登録された語について考える一方で、生の言語資料中における外来語使用の実態調査、具体的には新聞の紙面に使用された外来語の抽出調査を試みた。どのような語がどれだけ使用されていたか、そして、それらはどのようなレベルで使用されていたのか、辞書に登録されている語と比較しながら

ら探ることにより、外来語の使用状況を概観しようと考えた。

2-1. 調査対象の選択

中心となる資料としては、『東京朝日新聞』の昭和7年分(注7)を選択した。新聞を選択した理由は以下のとおりである。まず第一に、新聞は当時最も普及していたマスメディアであり、多くの享受者を持った言語資料であること。第二に、政治経済からスポーツ・娯楽までかなり広い範囲をカバーできること。第三に、第二の理由に関連して、読者層も広がったのではないかと推測されること。以上三点から、ある時期を概観する資料としては適当ではないかと考えたのである(注8)。

調査期間として昭和7年を選んだのは、外来語に対する本格的な研究誌として『季刊外来語研究(注9)』が発刊され、外来語が研究の対象として広く認められるようになった年であることが第一の理由である。また、この時期には、深刻化する不況が従来の日本人の価値観を変化させる一方で、「感覚的満足を目的とする一種の消費経済(注10)」が出来上り、実利的なアメリカニズム(注11)が台頭していた。よって、昭和7年を、国粹主義への傾斜の中での、外来語使用における一つの転換点と見なしたのである。

2-2. 外来語の抽出

『東京朝日新聞』の昭和7年分全体より35日分を選び出し、広告及び株式市況一覧を除く全紙面を対象として、カタカナ書きされた外来語(漢字等に対する振り仮名も含む)を抽出した(注12)。閏年であるため、抽出率は9.56%となった。抽出するにあたっての、調査単位および同語判定の基準は以下のとおりである。

調査単位

- (1) 原語表記の際、わかち書きによってえられる一語を一単位とする。
- (2) ハイフンで結ばれているものはハイフン毎に区切り、各々一単位とする。

る。

- (3) ハイフンの有無でゆれているものに関しては、市川三喜・畔柳都太郎・飯島廣三郎共著の『大英和辞典』(昭和6年富山房刊)を参考にする。

同語判断

- (1) 表記のゆれや語形のゆれによる違いは一つにまとめて考える(注13)。
- (2) カタカナ表記が同一でも、原語の異なるものは別語として扱う。
- (3) カタカナ表記が同一で原語も同一のものは原則として同語として扱う。但し、意味用法に著しく差のあるもの、つまり、辞書(注14)で別の見出し語として扱われているものは、別語とする。

以上の基準に基づき調査した結果、対象範囲より異なりで1,778語、延べで11,859語のカタカナ書きされた外来語を抽出することができた。その大半は巻末に資料として付した。が、この他に、ローマ字による略語として、異なりで113語、延べで2,675語、固有名詞等として、異なりで2,250語、延べで9,094語(うち、人名は異なりで1,587語、延べで3,786語、地名は異なりで517語、延べで5,011語、その他商品名等は異なりで146語、延べで297語)を得たことを付け加えておく。

当時使用されていた外来語の一部を、具体的な形で把握し、その使用レベルについて考察することも本論を著した目的の一つである。よって、このことについては第4章で詳しく述べたいと思う。

3. 辞書資料

先述のとおり、直接の研究対象とし、また、実際に用いられた語の流入時期を推測するための基準としても用いた辞書は、出版時期を異にする同じ系統の辞書、三版である。具体的には、金沢庄三郎の手になり三省堂から出版された、明治44年発行の『辞林44年版』第26版(犬飼守薫氏所蔵)、大正14年初版発行の『広辞林』第115版(昭和8年発行)、昭和9年新訂第160版発行の『広辞林新訂版』第200版(同年発行)を用いた。『辞林』の初版は明治40年に発行

されており、版数は初版より継続して数えられているため、『辞林44年版』第26版は改訂初版にあたる。『広辞林』についても、版の数え方は同様で、新訂第160版は実質的には初版である。また、当時の「版」は現在の「刷」に近く、版が変わったからと言って、内容が大幅に変更されるということはない。内容的には、改訂や新訂という作業の前後で大きく異なっていると見てよく、よって、いわゆる初版本にあたるものには特に拘らなかつた。なお、『辞林44年版』という名称は、緒言の中で編者自らが用いているのに基づいた。

以下本論では、明治44年改訂の『辞林44年版』を「明治版（略してM）」、大正14年初版発行の『広辞林』を「大正版（略してT）」、昭和9年新訂初版発行の『広辞林新訂版』を「昭和版（略してS）」、と便宜的に呼ぶことにする。それぞれの辞書の、子見出しも含めた見出し語の総数（辞書の規模）は、『辞林44年版（「明治版」）』84,355語、『広辞林（「大正版」）』125,917語、『広辞林新訂版（「昭和版」）』116,977語である。

3-1. 編集方針

明治29年、国語辞書（『帝国大事典』）の出版に進出するにあたり、三省堂の編集方針は、「雅言・俗語、すべてにわたって語彙を豊富にし、学術語を取り入れ、説明を平易明快に、挿図を多数掲げ、実用向きにする（注15）」というものであった。この編集方針はその後引き継がれ、明治40年に登場した『辞林』は、「時代に即応して語彙も多く収録し、語釈をよりすぐれたものとして実用性も大（注16）」であるという世評を得、「明治四十四年版で更に大幅な改訂を施（注17）」された。『辞林44年版（「明治版」）』を出版する際に金沢が著した緒言の中にも、

……ひそかに世運日新のさまを思へば、顧みて忸怩たらざるを得ざりき。されば、世に後れざらんの心切にして、更に改修の業を進め、今や全部に訂正を施し、不備の點を補ひ、新に難訓索引を加へ、茲に辭林四十四年版と稱してこれを公にするに至れり。（アンダーラインは引用者）

とあり、当時好評を得ていた大槻文彦の『言海』とは方針を異にしていること（注18）が知られる。

時代に合致したものをという方針は、具体的な見出し語の選択にも反映されている。例えば、昭和7年ごろから盛んに用いられ始めた「ギャング」という語は、昭和9年に新訂出版された『広辞林新訂版（「昭和版」）』に、新しく見出し語として採用されている（注19）。これから考えると、慣用レベル達した新しい語が、本書で資料とした辞書に見出し語として登録されるまでの時間は、かなり短いといえるであろう。

なお、『辞林（「明治版」）』から『広辞林（「大正版」）』への改訂作業の時期について、「緒言」の中で金沢は、

……本書改修のことは暫くも著者の念頭を離れたる時なく、特に大正五年小閑を得てより後は専ら身をこの事業に委ね、……

と述べている。その後、大正12年の関東大震災で原稿の大半を失ったことと、『広辞林新訂版（「昭和版」）』での実例を考えあわせると、『広辞林（「大正版」）』にも、新しく慣用レベルに達した語が入る可能性が多分にあったであろう。

以上より、本論で取り上げた一連の辞書には、時代の流れがかなり早い段階で反映させられていたと考えられ、語の変化を知るための資料としては適当であると思われる。

3-2. 享受者

編集方針からも推測できるように、その享受者として想定されていたのは、いわゆる知識階層や知識階層予備軍（学生）であった。当時の日本の外国に対する姿勢を反映し（注20）、国内外の勉学に励むものに広く利用されることを念頭において編纂された辞書は、実際に学生の間で比較的よく利用されていたようである。「緒言」にも、それぞれ、

今や帝國語の領土擴張せられ、善良なる辭書の需要急なる秋、著者は一層奮勵努力して、諸君の好意を空くせざるべし。(『辞林44年版』)

今や内國はいふもさらなり、新附の領土を始めとし、東亞大陸の諸國は勿論、遠く歐米の學界に持てはやさるゝに至れる……(『広辞林』)

今や全國至る處に其普及を見ざるはなく、滿洲國・中華民國の如き東亞同文の諸國は勿論、遠く歐米の學界にも愛用せられ、「ソビエツト、ロシア」に於て本書を底本として日本語辭書編纂の舉ありと聞くに至っては、本書の世界的進出を喜ぶ……(『広辞林新訂版』)

とある。

知識層を享受者として想定していたこと、あるいは結果的に知識層が享受者になっていたこと背景には、実用性ばかりではなく、学術性も重んじようとした出版社自体の姿勢がある。大正元年、三省堂は『日本百科大辞典』刊行の重圧で財政的に破綻するが、この裏には、和英辞書編修の際に術語訳出に苦勞したことが契機となり、すべての術語の見直しを決め、適訳・定訳を求めて、専門家に援助を依頼し、それが財政を圧迫したという経緯があった。こうした訳語に対するこだわりは、国語辞書を編纂する際にも、出版社の意図として当然存在したであろう。よって、百科辞典で採用された当時の適訳・定訳が、同一出版社の国語辞書にも載っている可能性が高いと考え、訳語を考える上での資料として取り上げたのである。

注

- (1) 池上禎造氏『漢語研究の構想』(岩波書店1984)
- (2) 注(1) 参照。
- (3) この時期、外来語の急増を反映して、それに関する辞典が数多く出版されている。中でも書名に、外来語を中心とする流行語という意味の「モダン語」あるいは「モダン」を冠したものは、昭和5年の4冊に始まり、6年10冊、

7年4冊、8年4冊、9年1冊、13年2冊の計25冊が数えられる。(『明治大正新語俗語辞典』より筆者算出)

(4) 社会変化に対する不安感と工業技術の進歩により、この時期、マスメディア・マスコミュニケーションは著しく発達した。昭和6年から7年にかけて諸新聞の発行部数は1000万部台に達し、ラジオの受信契約者数も同7年2月には100万を突破した。さらに、トーキー映画も上陸し、急速に普及していった。(平凡社『世界大百科辞典』等より要約)

(5) 荒川惣兵衛氏は、『外来語学序説』第九篇で以下のように述べている。

「モダン語」を輸入し、普及し、宣傳した最も大きな力は「ジャーナリズム」(journalism, 新聞業)である。それは、「モダン語」が時に同義語として「新聞語」といはれるのを見ても分る(ママ)。

(6) 荒川惣兵衛氏は、『日本語となった英語』の「自序」中で、次のように述べている。

片假名で書いた言葉は皆外来語だといふ譯ではないが、その九割九分は西洋から来たのである。さうして更にこの中の九割五分迄が英語である事を考えると、本書が英語以外の歐米諸國語から輸入した語をも取扱ひ乍ら、しかも Japanized English と銘打つて出た理由も、自ら首肯せらるるであらう。

これは、同時代の学者の見解として取り上げられるであろう。

(7) 当時の『東京朝日新聞』は、朝刊10面夕刊4面(うち全面広告が朝夕刊合わせて2~3面程度)で、時には号外や増面されたものが毎日(但し、月曜日は朝刊のみ)発行されていた。

(8) 新聞を資料とする場合、事件によって用いる語が左右されるという点を考慮する必要がある。その他にも、編集過程を経ることによる規範意識の形成や、発行部数を増やし企業としての利益を上げるための話題性の重視といったことも用語等に影響を及ぼすであろう。

(9) 昭和7年10月、京都の平野書店より発刊される。市川三喜・岡倉由三郎・新村出を顧問とし、荒川惣兵衛・榎垣実・重久篤太郎の三人が実務を引き受けた。通算12号11冊を刊行し、昭和13年1月発行の第4巻第2輯を最後に廃刊となる。「モダン語」の時代と同時代の研究者が、外来語をどのように捉

えようとしていたかを探る資料としても重要である。
(10)大宅壮一氏著『モダン層とモダン相』1930(『大宅壮一全集2』蒼洋社1981再録)。同氏はまた、以下のようにも述べている。

「モダン」とは時代の先端を意味する。しかもその先端たるや、本質的生産的先端ではなくて、末梢的消費的先端である。……消費生活においてトップを切るものはつねに没落した中産階級である。上流階級の享樂生活は回顧的であり、下層階級のそれは追隨的である。前者は歌舞伎と謡曲と待合を愛し、後者は剣劇と安来節と遊廓を喜ぶ。しかるに没落した中産階級であるところの有識無産階級は、西洋映画とスポーツとカフェーのなかに生の喜びを見いだすのである。

(11)『昭和の歴史2 昭和の恐慌』(小学館1982)で中村政則氏は、次のように指摘している。

明治いらい知識人の憧れの的であったイギリス文化・フランス文化にかわって、昭和初頭の日本にはアメリカ文化が流入した。アメリカニズムとは、機械文明、大量生産であり、自動車、飛行機、映画、ラジオなどの文明の利器であり、カフェー、ジャズ、ダンスなどの消費文化である。

(12)今回の調査では2・4・5・8・9・11月分を用い、曜日等の偏りが出ないよう配慮しながら35日を選び出した。なお、普通外来語と言うときには固有名詞は含まないが、本調査全体では、人名地名等の固有名詞やローマ字略語も抽出する対象として含めた。但し、これらの調査結果等については本論では言及しない。

(13)昭和7年の『東京朝日新聞』では、同一記事内において、同一語に対して異なる表記を用いることがある。例えば、最初「マクニール」と書かれた人名が、次には「マツクニール」となっていたりする。このようなことは、人名・地名などの固有名詞においてばかりでなく、「オブザーバー」といったような普通名詞においてもしばしば見られる。モーラに関するものを例に挙げると、調査範囲内では、促音の有無によるゆれ6例、撥音の有無によるゆれ2例、「ム」と「ン」でゆれているもの10例、長音符号の有無によるもの30例が見られた。この他にも、四つ仮名に関するもの、「バ」行と「ヴァ」行など、ゆれているものは多数に及ぶ。また、同新聞の記事内においては、

促音や撥音を小書きにすることが行われていないため、例えば「フェルト」と書かれた語は「フエルト」と「フェルト」という二つの可能性を持ってしまう。当時、ローマ字の綴り方が、「標準式(ヘボン式)」と「日本式」で大きく二つに分かれていたことなどを考え合わせると、本論の目的から言って、表記や語形に関するゆれは、別問題として取り扱った方がよいであろうと考えた。

(14)基準としては、荒川惣兵衛著『角川第二版外来語辞典』を用いた。

(15)『三省堂の百年』(株式会社三省堂1982)より抜粋。

(16)注(15)参照。

(17)注(15)参照。

(18)明治29年『帝国大辞典』の刊行に際し、三省堂は、山田美妙編の『日本大辞書』の版権を買取して材料に当てている。『日本大辞書』は、山田美妙が『言海』への明かな対抗意識に基づいて著したものである。

(19)「ギャング」について外来語研究会編の『季刊外来語研究』昭和8年3月発行第一巻第二輯の中に次のような記述(榎垣実氏の言)がある。

「ギャング」[E.gang]といふ言葉は、アメリカから映画と一緒に輸入された言葉で、以前から探偵趣味の雑誌や映画関係の書物などに見えてきた。……「ギャング」が一躍してpopularityを得たのは昨年(引用者注:昭和7年)10月6日、東京大森の川崎第百銀行を襲って、参萬圓を強奪した三人組の「赤色ギャング」事件以来である。

「ギャング」の他にも昭和9年発行の『広辞林新訂版』で新しく見出し語として登録された語、「オン・パレード」「バス(車)」「オーライ」「ストップ」「ママ」などについて、昭和7年前後から一般に普及したとする記述が同誌の他の部分に見られる。

(20)鈴木広光氏「日本語系統論・方言圏論・オリエンタリズム」(『現代思潮』7月号1993)参照。

第2章 原語から見た訳語

日本語の中には、多くの外来の概念事物を表すことばが含まれている。それらのうち、音訳という形をとって日本語の中に入り込んでくる語は一般的に外来語と呼ばれており、一方には、意識（主に漢語、時には和語をもって訳される）という形で日本語の中に取り込まれる語の一群がある。音訳・意識ともに、新しい概念事物を取り入れるための手段である。

ある概念事物に対応する意味を担った原語が、音訳あるいは意識という過程を経て借用語という日本語に形を変える時、そこではどのような現象が起こるのか。これについて考えていくためのきっかけとして、まず、明治44年(1911)改訂初版発行の『辞林44年版』（「明治版」）、大正14年(1925)初版発行の『広辞林』（「大正版」）、昭和9年(1934)初版発行の『広辞林新訂版』（「昭和版」）、それぞれから、次のような見出し語を抜き出し、それらと他、特に原語との関わりを考え、その関係を記述した。

1. 和語または漢語の見出し語で、原語が付されているもの。
2. 和語と漢語から成る混種語の見出し語で、原語が付されているもの。
3. 語釈として外来語が用いられているもの。

なお、上記のうち、「1.」および「2.」をあわせて、以下では意識見出しと呼ぶことにする。

1. 語釈中に見る外来語の進出

1-1. 意識見出しおよび外来語による語釈を有する見出し語数の増加

先述のように、ここで抽出した語の中心は、原語が付されている見出し語で外来語ではないもの、つまり意識見出しである。原語が示されていない見出し

表2-A: 意識見出しおよび語釈として外来語を用いている見出し語の数量的変化

	意識見出数	*1	外来語説明	計	全見出語数	外来見出数
「明治版」	180	4	103	279	84355	1140
	0.21%	0%	0.12%	0.33%	100%	1.35%
「大正版」	4117	37	368	4448	125917	2477
	3.27%	0%	0.29%	3.53%	100%	1.97%
「昭和版」	4098	9	454	4543	116977	5054
	3.50%	0%	0.39%	3.88%	100%	4.32%

*1: 原語と外来語による説明の両方をもつもの。この欄に示した数値は、「意識見出数」と「外来語説明」それぞれの欄に重複して含まれている。よって計は「意識見出数」の数値に「外来語説明」の数値を足したもとのから「*1」の数値を引いたものとなる。
※各欄の下段は、「全見出語数」に占める各々の割合をパーセンテージで示したものの。

語の中にも、外国語からの訳として入り込んできた語は多々あろう。しかし、そのいちいちを洗い出すのは困難を極める作業である。よって、ここでは、原語が併記されており、訳語であるという意識がはっきり示されている語を中心に扱う。また、語釈の文中に外来語が使われているもの、つまり、漢語見出しや和語見出しを説明するために外来語を用いているものも同時に抜き出した。各版ごとの数量的な推移は〔表2-A〕に示すとおりである。

〔表2-A〕を見て明らかのように、意識見出しの数は、「大正版」になって急激に増加し、「昭和版」ではあまり増えていない。これは、外来語自体を見出し語とするもの数（表2-A: 外来見出数）が「昭和版」になって急増するのとは対照的である。外来語見出しの登録の中心が「昭和版」にあるのに対し、意識見出しの登録の中心は「大正版」にあったと言える（注1）。一方、語釈として外来語が用いられている見出し語の数（表2-A: 外来語説明）も、「大正版」で増えている。そして、その勢いは、「昭和版」になっても、意識見出しのように衰えない。「昭和版」で外来語見出しを急増させる力と同じ

ものが、ここにも働いていると言えるであろう。

以上のような数量的な変化を前提にした上で、以下では、それぞれの訳語について、原語との関係をやや詳しく見ていく。

1-2. 原語と語釈に用いられた外来語の関係

今回取り上げた資料において、外来語が、見出し語の語釈に用いられるようになる過程を整理すると、形の上からは、次のような段階に分けられる。

《第Ⅰ段階》 原語が示されているだけで、外来語が用いられていない段階
ex. きょむ・しゅぎ [虚無主義=Nihilism] (名) 現在の政治・宗教・社会上の一切の制度を否認し、これを打破して共産主義により更に之を組織すべしことの主義。 「明治版」

《第Ⅱ段階》 見出し語の語釈の最後に外来語が付されている段階

Ⅱ-1: 対応する原語と比較的長い語釈用の説明文を伴うもの

ex. こうでい [膠泥=Mortar] (名) 石灰若しくは「セメント」と砂とを混じ、清水を加へて練りたるもの、石灰を加へたるを石灰膠泥といひ、「セメント」を加へたるを「セメント」膠泥といふ、土木工事にて石工・煉瓦工等の膠接材料として用途甚だ廣し。モルター。 「大正版」

Ⅱ-2: 対応する原語を伴わず、語釈用の説明文も比較的短いもの

ex. ぎうらく [牛酪] (名) 牛乳などの脂肪質を製しかためたるもの。バター。 「明治版」

せつぶん [接吻] (名) 他人の唇・手などに自己の唇をあて吸ひて、親愛の意を表すること。キス。 「大正版」

ぎんまく [銀幕] (名) 活動写真の映写幕。スクリーン。 「昭和版」

《第Ⅲ段階》 語釈として外来語が用いられ、文による説明がない段階

ex. たうにう [糖乳] (名) 「ミルク」の一名。 「明治版」

そくとう [唧筒] (名) ポンプ。 「大正版」
とうるい [盜塁] (名) スチール。 「昭和版」

こうした語釈の形式上の差は、辞書の編集方針によって左右される点も大きい。が、少なくとも、段階が上がるごとに、そこで用いられている外来語の定着の度合いも進んでいくとは言えるであろう。

以上のような段階分類に基づいて、各版の見出し語数の出入りを示したのが [表2-B] である。

[表2-B] を見ると、「明治版」では、第Ⅲ段階に属するもの、つまり、外来語を語釈として用い他に説明を加えない形式のものが目につく。これは、時代が下がるにつれて、外来語の定着の度合いが進み、第Ⅲ段階に属するものが増加するであろうという大方の予想に反する。しかし、そこで用いられている

表2-B: 版別・段階別の見出し語数の出入り

	「明治版」		「大正版」		「昭和版」
I 原語のみ	176	+1 3907↓ -1 3↓	4080	+1 42↓ -5 29↓	4089
Ⅱ-1 原語+外来語	4	+5 28↓	37	+4 2↓ -33 1↓	9
Ⅱ-2 解説+外来語	35	+2 63↓ -7 4↓	89	+27 45↓ 2↓	159
Ⅲ 外来語のみ	64	+2 181↓ -2 3↓	242	+6 50↓ 12↓	286

※「+」は他の段階から移ってきた語の数、「-」は他の段階へ移っていった語の数、線上の↓は新たに登録された語の数、線下の↓は末梢された語の数を、それぞれ示す。

外来語の内容をよく見ると、「カボチャ」「コロップ抜き」「タバコ」「パン」「けきらずビロード」といった比較的早い時期にポルトガル語やオランダ語から日本語の中に入り込んで来ていたもの(注 2)が多くなっている。つまり、「明治版」では、早い時期に入り込んだ語を中心に、音訳が日本語としての意味を担って機能しているといつてよいであろう。

「明治版」から「大正版」へ移る過程では、第Ⅰ段階のもの、原語は伴うが語釈としての外来語は用いていない見出し語が多数追加登録されている。そして、その大部分には、[Neutrality(中性)] [Conscience(良心)]など、英語の原語が付されている。

「大正版」から「昭和版」への過程では、第Ⅱ-1段階の語が、他の段階、第Ⅱ-2段階および第Ⅲ段階へ、それぞれ原語が外された形で、33語も移行している。この過程で、音訳は、外国語のカタカナ表記から、日本語として独自の意味を担った語へと変化していくのである。そして、「2-2」で述べるような外国語(ここでは原語をこれにあてる)と、外来語の意味的ずれが生じるのも、まさにこの過程においてである。

「昭和版」の見出し語、特に「昭和版」で新たに登録された見出し語について見ると、第Ⅱ-2段階と第Ⅲ段階の語の数は、第Ⅰ段階や第Ⅱ-1段階のものほど減少していない。これは、語釈に果たす外来語の役割が広がったことを意味している。短い説明文とともに用いられている外来語の例としては、

さんぎょう・しゅぎ [産業主義] (名) 【社】産業を経済の中心として其盛大を期待する主義。インダストリアリズム。 「昭和版」
ようびょう・き [揚錨器] (名) 錨を捲き上ぐるに用ふる車地。キャプスタン。 「昭和版」

の「インダストリアリズム」「キャプスタン」などが挙げられ、見出し語を単独で言い換える語として使用されているものには、

だしゃ [打者] (名) バッター。
むごん・げき [無言劇] (名) パントマイム。

の「バッター」「パントマイム」などがある。ここでも、英語系の外来語が力をふるい始めており、日本語としての意味を担って機能を始めている。なお、「昭和版」になる過程で登録を末梢された第Ⅲ段階の語は、

くんたいにく [熏腿肉] (名) ハム。 「大正版」
ふうしつ [風湿] (名) レウマチス。痛風。 「大正版」

など12語あり、これらは、語釈に用いられている外来語の関係というよりは、見出し語自体の古さ・不便さのため登録から外されたものと言えよう。

全体的に見ると、意識見出しの数は「大正版」で急増しており、一方、語釈で用いられる外来語、特に英語系の外来語の力は「昭和版」で強化されていると言える。このため、「昭和版」では、見出し語を英語系の外来語一語で説明するという、いわば逆転のような現象さえ起きるようになるのである。これは、外来語、特に英語系の外来語が日本語の中に入り込み、役割を強化し始めたことを示している。こうして、より大きな役割を果たし始めた外来語は、一方で、原語とのずれという問題をはらんでいくのである。

2. 原語と外来語のずれ

原語と外来語による語釈の両方を持つ見出し語(第Ⅱ-1段階の語)を調べて行くと、原語として付されている語と、語釈中に用いられている外来語が異なる場合がままあることに気づく。その原因を深く追求するのであれば、各語ごとに実際の資料にあたりながら、その語史を詳しく調べる必要がある。が、ここではまず、今回の資料から分析される主なずれの方向を示して行こうと思う。

2-1. 出自の違いによるずれ

まず、入って来る経路と時期の相違から生じるずれがある。それぞれ異なっ

た時に異なった出自で入ってきたために、より早い時期に入ってきたものが新しいものを説明する語として使用されるようになるのである。これには有名な「シャボン」と「石鹸」の例がある(注3)。今回の資料中でも

せっけん【石鹸=Soap】(名)脂肪を水酸化「ナトリウム」の溶液と共に熱した後、其液中に食塩の溶液を加へ塩類を分離せしめて固めたる物料、…(中略)… シャボン。 「大正版」

という一項があり、「シャボン」が「石鹸」の語釈の一部として用いられている。現在割合よく使用される「ソープ」という英語系の語は、原語として挙げられているだけであり(注4)、まだ、あまり一般化していなかったことが推測される。

一方、既に優勢になりつつあった英語系の語がそれより古くから用いられている外来語を追いやっていくということも起こっていた。原語付きの見出しではないが、

ほうり【鳳梨】(名)【植】「アナナス」に同じ。 「明治版」
ほうり【鳳梨】(名)【植】アナナス。パイナップル。 「大正版」

という組み合わせにその傾向が見られる。現在、「パイナップル」という呼び方が一般的であることを考えると、これは、「アナナス」というオランダ語系の語が存在しているところに「パイナップル」という英語系の語が入り込み、やがて、オランダ語系の呼び方を追いやっていったことを示すものとしてとらえることができよう。

2-2. 訳される過程でのずれ

まず、複数の、かなり意味的に近い関係にある原語が存在しており、そのうちのひとつが外来語として入り込んだために、原語として付されている語と、外来語による語釈との間に、ずれが生じたと考えられる例を挙げる。

ひこう・らせんき【飛行螺旋機=Air-screw】(名)発動機の回転力を變じて飛行機・飛行船の推進力・牽引力となす機械、一般に木製にして、我国の木材にては胡桃を最も適当とすといふ。プロペラー。「大正版」

「プロペラー」の原語である[Propeller]は、本来は、「推進するもの」といったような意味の語である。が、外来語「プロペラー」が、回転する羽根自体と直接結び付いて使用されてしまったために、やがて「プロペラー=飛行機の回転する羽根」という結び付きが日本語の中で出来、「Air-screw=回転する羽根=プロペラー」、つまり「Air-screw=プロペラー」という関係が出来上がったのであろう。

次に、省略という方法から起こるずれを挙げる。外国語、特に欧米系の語をカタカナに置き換える場合は、日本語の音韻的な特徴として、どうしても一語の長さが長くならざるをえない。それを解消するために、省略は有効な手段となるが、短く縮められた形で使用されている外来語は、当然ながら、原語をそのまま音訳した形ではない。

きりん【Screw jack】(名)重き物体を上下又は左右に動かす機械、鋳鉄製の雌螺旋と鋼鉄製の雄螺旋との互いに噛みあふ装置にして、螺旋の或は進み或は退くによりて、物体の共に所定の方向に動くもの。ジャッキ。 「昭和版」

ここでは、[Screw jack]を示す「きりん」という意識見出しの語釈の一部として、[Screw jack]から省略された「ジャッキ」という外来語が使用されている。省略という方法は、道具類の他にも「デパート」「アパート」などといった日常的なことを表す語でもよく取られる。が、逆に、学術・思想関係の語など、多少長くてもどことなく難しそうな威厳がある方が好まれるものでは起りにくく、この関係の語で起こった場合、例えば「プロ(プロレタリア)」や「アナ(アナキズム)」などは、それだけその語が時代の流行語としての側面を強めた結果として受け取ってよいのではないだろうか。

原語の一部を省略するということが起こっている一方で、原語の一部に漢語をあてるといふことも起きている。例えば、

こうでい・き [膠泥機=Mortar-mill] (名) 膠泥を製造する機械、普通に鉄製の皿の中に於て、水平軸の両端に鉄製の「ローラー」を取付けたるもの、…(中略)… 「モルター」こんわき。 「大正版」

という例が挙げられる。こうした語の場合、漢語に置き換えられる部分は、主にそれらの語が属する分野、意味範疇を示す場合が多い。そして、出来上がった語においては、カタカナ部分の意味を十分に把握していない場合でも、漢語に置き換えられた部分からそれがどういう種類のものであるかを判断することが可能となる。この方法は、流行語的にセンセーショナルな使われ方をされることはまずないであろう。が、しかし、漢字の持つ意味に支えられて、地味ながら確実な造語力を持つと推測される。

一方、本来持っていた意味から離れ、日本語として独自の意味を担っていることが明らかな場合がある。例えば、ある会社(または人物)が作った商品が有名となったため、その会社名(または個人名)を、同類のもの全てを指す一般名詞のように使用する場合がそうである。例えば、

とちこみ・き [綴込器=Paper-fastener] (名) 紙を綴ち合はするに用ふる器具、書類整理上の必要物として欧米に広く使用せらる。ホチキス。 「昭和版」

といった例が「昭和版」にある。「ホチキス」はそのまま定着し、現在なお一般名詞のように使用されている(注5)。

以上、今回の資料に見られた大体の傾向を示した。こうした原語と外来語のずれを引き起こし助長していく過程では、やはり、語の使用、どの形をどの意味でどれだけ使うかということが大きく影響してこよう。漢語のようにそれを構成する一字一字がある意味を担うものとは異なり、外来語は単なる音の並びとして表される。その音の並びが、どのような意味と結び付き、どれだけ使用

されるかによって、日本語としての意味が固定していくのである。また、そうして意味が固定していく過程において、外国語のカタカナ表記は、日本語として独自の意味を担った語へと質的に変化していくのである。

3. 棲み分ける意識見出し

3-1. 原語と漢語見出しの関係

3-1-1. 複数の原語が示されている漢語見出し

原語を併記する場合、一つの見出し語に対して一つの前語が示されるのが普通である。しかし、中には、一つの見出し語に対して二つの前語が示される場合がある(注6)。

む・いしき [無意識] (名) 1.【心】[Unconsciousness] 自我の觀念が活動なき状態…(中略)…例へば睡眠中に於ける意識の状態の如し。2. [Non-voluntary] 意思の選択を離れたる行動の状態、…

「明治版」(注7)

きかん [機関] (名) 1. [Engine] 或勢力を機械力に変ずべき装置ある器械。2. [Organ] 行動の目的を達するために使用又は設置せられたるもの。

「大正版」

こうした見出し語は「明治版」で2例、「大正版」では19例が追加登録されているだけで、「昭和版」で新たに加わったものはない。合計でも21例と極めて少ない。新しい概念事物を受け入れる場合、日本語として、あえて複数の原語を一つの言い方に統合していこうとする力は、まず働かないと見てよいであろう。逆に、必要に応じて言い分けるといふことはされており、一つの前語に複数の見出し語が対応することはよく起こることである。

3-1-2. 複数の漢語見出しが対応する原語

三版を総合して見る時、一つの原語に複数の意識見出し（漢語見出しに、少数の和語見出しを含めたもの）が対応する例は、全部で 179例ある。その中でも、一つの原語に二つの見出しが対応する場合は最も多く 158例あり、他に、三つ18例、四つ2例、五つ1例となっている。それ以上の訳が一つの原語に対応する例はない。

一つの原語に複数の訳が対応する場合、その違いを生み出す要因は一つではないであろう。どのような理由から複数の訳がつくのか、一つの原語に二つの見出しが対応しているものから、特徴的な例を拾い出してその要因を探ることにする。

まず、使用される分野の違い(注 8)が訳を左右する一つの要因として考えられる。

こうこう・さ【光行差=Aberration】【天】天体の真位置と視位置との差異、地球の運動すると共に亦速度を有するより起こる。 「大正版」
しゅうさ【収差=Aberration】【理】光学器機にて、映像の鮮明とならざること。 「大正版」

じか・きてい【自家規定=Self-determination】【哲】自己の自由意志によりてなす規定。 「大正版」

じこ・けってい【自己決定=Self-determination】【心】人の行動の自己以外の力に動かされることなく、自らこれを決定すること。「大正版」

それぞれ、[Aberration][Self-determination]の訳であるが、使用される分野により、訳語も、その意味も少しずつことになっている。こうした例は全部で18例あり、このうち2例は最初に登録された時期も異なっている。

次に、登録された時期（訳語を与えられた時期と多少ずれながら対応する）の違いが訳語に反映していると考えられる場合がある。この例は、分野も異なる2例を含めて、全部で23例あり、その代表的なものは次のとおりである。

しやうこ・しゆぎ【尚古主義=Classicism】（名）古代の文物を模範基準とする主義。 「明治版」

ぎこ・しゆぎ【擬古主義=Classicism】（名）内容よりも形式を尚び、古典の典型を模範とする主義。 「大正版」

たいせい【体制】（名）1.かたちづくり、かたち。2.[Organization] 個体の各部分が、おのおの其官能を営みて、統一を保ち一体をなす状態。 「大正版」

きこう【機構=Organization】（名）くみたて。かまへ。つくり。 「昭和版」

一方、専門性の有無も訳語を左右する要因として考えられる。つまり、ひとつの原語から、より一般的な言い方と、いわゆる術語とが生まれ、それぞれに異なった意味と形を担って使い分けられていく場合である。

わりびき【割引=Discount】（名）1.一定の価格の中より若干の価格を減ずること。2.手形割引。3.さしひき。 「大正版」

ぎゃくうち【逆打=Discount】（名）【商】片為替の度甚しく、銀行の為替支払い資金に欠乏を感じるとき、為替手形を売るに、打歩を取らざるのみならず、却て割引をなすこと。

「昭和版」（「大正版」にも類似した記述がある）

はいすい・りょう【排水量=Displacement】（名）船体のおしひらく水の量、即ち船体の総重量、流体中に浮ぶ物体の重量は、其の排除せし流体の総重量に等しといふ「アルキメデス」の原理より来る。 「大正版」

へんい【変位=Displacement】（名）【理】動体の位置をかふること、動体が甲点より乙点に至るときは、甲乙二点の距離を其変位といふ。 「大正版」

この他にも、[Cassiterite]に対する「錫石」と「すずいし」のような漢

語と和語の対立、[Planet]をある系統の天文学では「惑星」と呼び、他では「遊星」と呼ぶといった同じ分野内部での対立(注9)と、いろいろな要因が考えられよう。が、こうしてつくられた複数の訳語の多くは、うまく棲み分けて意味を確定していく場合が多い。

このように、訳語が定まる際に方向性が見られる語がある反面、あまり方向性のない、偏りの見られない語というのがある。その中でも特徴的なのは、[General]と[Universal]である。この二語に、研究社の『新英和中辞典』で類義語(注10)とされている[Common]を加えて示すと、その訳語(注11)の内訳は、

General (全11例/=-General)

普通公理[- axiom] 普通概念[- concept] 普通名辞[- term]
一般感覚[- sensation] 一般概念[- concept] 一般名辞[- term]
公審判[- judgement] 公衆善[- good] 公項[- term]
総会[- meeting] 総勘定元帳[- ledger]

Universal (全9例/=-Universal)

宇宙[-] 宇宙引力[- attraction] 宇宙重力[- gravitation]
全称[-] 全称命題[- proposition]
世界経済[- economy] 世界語[- language]
普通選挙[- suffrage] 万有引力[- gravitation]

Common (全10例(注12)/=-Common)

公因数[- factor] 公約数[- measure] 公倍数[- multiple]
公比[- ratio] 公切線[- tangent] 公共善[- good]
等比[- ratio] 普通感覚[- sensations]
常用対数[- logarithm] 常識[- sense]

となる。これらの訳語には分野による偏りもほとんど見られない(注13)。こうしたことがなぜ起こるのか。そこに思い浮かぶのが、原語と日本語との間にあ

る発想の違いである。特に、ここで挙げた例に関しては、自己と他に対する捉え方の違いが考えられる(注14)。英語と日本語、あるいは西洋と東洋の発想の違い(注15)ということを前提とすれば、この三語は日本語にとって、いや日本人にとって捉えにくい語である。微妙な差を表し得ると言われる漢字の組み合わせを持ってさえ、満足のいく訳語を得られなかった語といえるであろう(注16)。そして、こうした語の訳語として使用された漢語は、それ自身、原語の意味にひきずられる形で、意味を変化させていく傾向が強い(注17)。

3-2. 原語と和語見出しの関係

原語または外来語による語釈を持つ和語見出しの数は少ない。「明治版」で30語が登録されており、「大正版」で106語、「昭和版」で2語が追加登録されているだけである。

「明治版」で登録された30語のうち、原語が示されている和語見出しは次の1語のみである。

おぼえ・がき【覚書】(名)1.記憶のために書き付けておくこと。又、其書き付け。2. [Memorandum]一種の外交文書、一國政府又は其使臣が、對手國政府又は其使臣に対して…(中略)…即ち、一種の協定書なり。
「明治版」

これを見ると、原語の持つ意味範囲が狭められ、現在普通に使う「メモ」の意味より限定的な専門用語としてまず入ってきたことが分かる。これを除いた残りの29語には外来語による語釈があり、それぞれ

うまのたま【馬玉】(名)馬の腹中に生ずる石塊の如きもの、鼠色又は茶色にして、これを断ち截れば渦の模様あり。「ヘイサラバサラ」「ドウサラバサラ」 せきふん。(馬墨)。 「明治版」
けぶりぐさ【煙草】(名)「タバコ」の一名。 「明治版」

のようになっている。非英語系の、早い時期に流入した外来語が語釈として用いられているケースが、他の二版よりも目立つ。なお、原語と外来語による語釈の両方をもつものはない。

「大正版」で新たに登録された 106語のうち、原語が示されている和語見出しは76語、外来語による語釈があるものは30語である。ここでもやはり、原語と外来語による語釈の両方をもつものはない(注18)。外来語による語釈がある和語見出しの中には、以下に示す「かたかけ」と「ショール」のように、現在でも和語と外来語の両方の呼び方が共存しているものがある。

かたかけ〔肩掛〕(名)おもに婦人の外出のとき肩にかけおほふもの、毛糸又は羅紗若しくは絹布などにて製ず、形状・模様・染色など種類多し。ショール。 「大正版」

ショール〔Shawl〕(名)かたかけ。 「大正版(注19)」

一方、

ふなすべり〔船上〕(名)ウォーターシュート。 「大正版」

ウォーター・シュート〔Water-shoot〕(名)高き傾斜台の上より、船に乗りて水上へすべり落つる遊戯。 「大正版」

のように、外来語の方が生き残り、意訳の一種である説明的な和語の方が消えていった例もみられる。また、原語が付されている和語見出しの中で、特に目につくのは、相場関係の語であり、

さきもの〔先物=Future〕(名)1.将来一定の時期に於て受渡すべき条件にて、売買契約をなしたる商品。2.取引所にて、定期取引に於ける最長期の受渡品。 「大正版」

なかがい〔仲買=Broker〕(名)【法】物品又は権利の売買の媒介、即ち需用者と供給者との間に立ち、物品又は権利を彼より買ひて此に売りにて営利を図ること。又、其人。さいとり。(牙保)。 「大正版」

など8語が含まれている(注20)。これらの語は、既存の和語と、類似した意味を担って流入してきた原語が、重なり合って出来あがった組み合わせが多い。そして、和語による訳は漢語によるものより、具体的にイメージしやすいものであり、これは和語による訳の特徴である。

「昭和版」では、

まどかけ〔窓掛〕(名)窓にかけて光線をさへぎるたれぎぬ。カーテン。 「昭和版」

わすれなぐさ〔勿忘草=Forget-me-not〕(名)【植】るりさう。

「昭和版」

の2語が新たに登録されていた。やはり、和語は、漢語ほどの簡潔さも権威性もなく、外来語のような新鮮さもないため、新しい概念事物を表す語を新たに作る材料としての適性はあまりなかったと言ってよいであろう。

外来の概念事物を取り入れる過程を、原語という視点から見ると、そこには、日本語に入り込む際に、意味や形がどのように変わったかという、その様相が浮かび上がってくる。

日本語としての意味を担って機能するに従って、原語とのつながりを弱めていく外来語、その様は、外国語のカタカナ表記から日本語としての意味を担った語へと変化していく過程と言えよう。そして、その出自の中心は、オランダ語・ポルトガル語から英語へと移っていた。また、ひとつの原語が複数の漢語と対応する場合は、移入時期や分野の違い、専門性の有無によって、それぞれに棲み分けている場合が多かった。が、一方には、少数ではあるが、訳語が定まる際の方向性があまり見られない語も存在していた。また、原語と対応する和語は語数が少なく、用いられる分野も限られる傾向にあった。

注

(1) 外来語が作る複合語を語種という観点から分析した結果からも、同様のことが言える。外来語と漢語との組み合わせによる複合語は「大正版」に登録の中心があり、外来語同士の組み合わせによる複合語は「昭和版」に登録の中心がある。

(2) 『角川第二版外来語辞典』（あらかわそおべえ氏著1977）に挙げられている各語の初出を見ると、

「カボチャ」新井白石『采覧異言』1713

「コロップ」平賀鳩溪『物類品隣IV』1763

「タバコ」『慶寛私記』1605

「パン」『サン フランシスコの御作業』1591

「ビロード」『当代記IV』1608.3.1.

となっている。

(3) 佐藤亨氏「「シャボン」から「セッケン」（石鹸）へ」（『近代語彙の歴史的研究』桜楓社）1980

(4) こうした英語系の語を他の語に優先させて原語として表記する傾向は、今回取り上げた資料全体に見られ、この一連の辞書の編集方針と言えよう。そして、この編集方針には、当然ながら当時の英語をもてはやすという風潮が反映されている。

(5) 他にも「昭和版」には「手提暗箱」の語訳が「コダック」となっている例がある。「コダック」は、商標としては健在であるが、小さなカメラが氾濫している現在、もはや持ち運びの出来るカメラ一般を指す名詞としての機能は持っていない。

(6) 一つの意見出しが持つ原語の数は二つが最高である。三つ以上持つものはない。

(7) 「大正版」では、「2. [Non-voluntary]」は【法律学】の語とされている。

(8) ここで示した分野の区別は、資料とした辞書の記述を元に行っている。そのため、厳密さという点ではやや疑わしく、また、現在の感覚からずれる部分もある。が、一応の目安にはなるであろう。

(9) 今回の資料中でも

浸食作用[Erosion]【地】 水蝕[Erosion]【地】

浸食谷[Erosion valley]【地】 水蝕谷[Erosion valley]【地】

浸食山[Erosion mountain]【地】 水蝕山[Erosion mountain]【地】

という同じ分野内における対立が見られた。

(10) 同辞書の解説では、類義語の相互の違いを次のように説明していた。

[common] (ほとんど) すべてのものに共通した、よく見受ける、普通の、ありふれた。

[general] その種類の(ほとんど) 全部に関連した、広く行きわたった。

[universal] 例外なしにすべての場合や個々のものにあてはまる。

(11) ここでは、各原語を語ごとに分けてそれらと対応する漢語訳を見た。従って、単位としては本稿全体を通じて扱っている見出し語よりも一段階小さな単位ということになる。

(12) 他に、

最大公約数[Greatest - measure] 最小公倍数[Least - multiple]

の二語が、原語中に[Common]を含む見出し語として存在した。しかし、この二語は、それぞれ「公約数」「公倍数」と同じ訳し方であるため、用例からは外した。

(13) [Universal] の「全称」2例だけは共に【論理学】に属する。

(14) この点に関して大津栄一郎氏はその著書『英語の感覚(上)』（岩波新書 278 1993）の中で

……われわれ日本人の自己は自分以外に自分とまったく対等な存在を持つことができない……(PP13)

英語圏人の自己は一切を自分と対等の存在と、あるいは同一の平面上の存在と見るのである……(PP14)

と述べている。

(15) 「コモンセンス」につて、山田勝氏は『イギリス人の表と裏』（NHKブックス1993）の中で次のように述べている。

日本で定着した言葉に「常識」というものがあるが、これは周知のように英語の“common sense”を訳したものである。コモンセンスはアリストテレスの昔にさかのぼり、イギリスにもたらされたのは、ルネサンスの頃、

すなわち十六世紀のことであった。コモンセンスとは「人間の五感が調和した状態で、物事を共通認識して受け入れる内的感覚」を意味した。それが次第に今日的意味として使用されるようになった。……コモンセンスは全ヨーロッパ的な語であるはずだが、イギリス人の特質を語るに際して、この語はきりはなせないものとなっている。……日本人がイギリスのコモンセンスを美徳と考えてきたことは間違っていないが、明治以降の西洋崇拜が強すぎたようだ。イギリス知識人の意見を「文字」を通じて受けいれすぎたのであろう。そのため、西洋の裏面が見えなかったのだ。「自由と規律」が完全なものであれば、それほどすばらしいことはないが、イギリスの誇る自由と規律の精神は、多くの矛盾をかかえたまま、今日に至ったことになる。

(16) こうした語がすべて、微妙な部分の意味をまるごと包み込んだ形で音訳の方向へ進んでいくものでは必ずしもない。

(17) 惣郷正明・飛田良文氏編『明治のことば辞典』東京堂出版1986から、ここで用いられた訳語についての意味説明の一部を抜粋すると次のようになる。

一般：伝統的な「同一であること、…と同様」の意味と、general, universalの訳語として明治時代に普及した「普通、全体」という意味とがある。……（後略）

宇宙：明治時代までは宇宙の範囲が天地四方、古往今来の地球上であって、今日よく使われる「宇宙旅行」「宇宙科学」のような英語のspaceにあたる「大気圏外」の意味はない。

世界：本来は、人間社会の意味であったが、英語worldの訳語として使用されて、明治時代には概念の全体像や、宇宙を指すようになった。

(18) 「昭和版」では、原語付きの和語見出しに外来語が語釈の一部として付されるということが起こっている。例えば、

なかがい【仲買=Broker】（名）【商】物品又は権利の売買の媒介、即ち需用者と供給者の間に立ち、……ブローカー。さいとり。（牙保）。

「昭和版」

における「ブローカー」はその例である。

(19) 「ショール」という外来語見出しは、「明治版」中にも

ショール [Shawl] (名) 「かたかけ」に同じ。

「明治版」

という形で登録されている。

(20) 榎垣実氏編『隠語辞典』（東京堂出版1956）の解説には、相場および相場関係の語について

相場は、江戸時代以前から米相場に関係ある人達の間で行われていただろうが、米・砂糖・証券などに範囲が広まり、用語も発達したのは、やはり取引所の組織が確立された明治時代からだろう。多少は術語的性質をも持ってはいるが、隠語としては、語数なども多い方で、他の隠語とはほとんど関係なく、独特の組織体系を持つものであるが、一般語や他の隠語へは多くの影響を与えている点が認められる。

とある。

第3章 外来語への意味構造分析的アプローチ

モダン語流入の時代、即ち大正から昭和にかけて、モダン語の大部分を占めた外来語(注1)は、日本語の中に入り込む過程で、どのような意味分野(注2)を構成し、それはどのように変化していくのだろうか。本章では、この点について考えてみようと思う。

ある時代の語彙(語の総体)を完璧に捉えることは不可能である。多くの語をまとめ上げた辞書も、ある時点の日本語の語彙を見る上では、一つの、多分かなり偏ったフィルターとしてしか機能しない。しかし、そこに登録された語を、十分注意を払った上で、資料として利用することは、その時代の語彙を見る上でかなり効率のよい方法であろう。なお、検討の方法としては、まず、数量的な変化を記述した上で、日本語の意味の世界における外来語の位置的变化を見るために、意味構造分析(注3)を試みた。

1. 増加する外来語

1-1. 外来語見出しの増加

各版に登録された外来語(注4)の総数、およびその内訳は表Iに示すとおりである。これを見て分かるように、「明治版」のみ、「大正版」のみ、および「明治版」と「大正版」の登録に終わった語は全部合わせても60語と極めて少なく(注5)、一旦登録された外来語はそのまま継続して登録される傾向が強い。かつ、新たに登録される外来語の数は時代が下るにつれて増加し、「明治版」では1140語の登録であったものが、「大正版」では2477語、「昭和版」では5054語とほぼ2倍強の勢いで増加している。

この増加の原因は、辞書自体の規模の拡大によるものとはいいたい。むしろ、日本語の中における外来語の役割が拡大したためであると考えた方がよい。各版の見出し語総数に対して、外来語の占める割合を[表3-A]で見ると、

「明治版」では1.35%であったものが、「大正版」では1.97%、「昭和版」では4.32%と着実に増大している。特に「大正版」から「昭和版」にかけては、

本書は名は新訂版なれども、其實全篇盡く検覈を新たにしたるものにして、収むるところの語数無慮十萬を超ゆるに至り、語釋の修整、新語の増加、語源の添加いづれも面目を一新せるものあり(後略)

(「昭和版」緒言)

という大増補を思わせる編者のことばとは裏腹に、見出し語総数は8940語も減少している(注6)。にもかかわらず、外来語の数は増え、その占める割合は1.97%から4.32%へと急増する。4.32%という数字は、辞書全体から見ればわずかなものであるが、外来語の側からすればこの躍進は画期的なものと言える。

1-2. 子見出しの増加

辞書の編集方法に関する変化としては、時代を追うごとに子見出しの数が増加することが挙げられる。「明治版」から「大正版」、「昭和版」へと時代が下るにつれ、子見出しの占める割合は、外来語では、15%→22.4%→24.8%と

表3-A: 外来語見出しと全見出し語数

		明治版	大正版	昭和版
M		23		
T			23	
M→T		14		
M→T→S		1103		
T→S			1338	
S				2613
外 来 語	計*1	1140	2477	5054
	見	969	1921	3801
	子見	171	556	1253
全 語	計*2	84355	125917	116977
	見	72774	89832	76341
	子見	11581	36085	40636
*1/*2 (%)		1.35	1.97	4.32

M=明治版 T=大正版 S=昭和版

増加し、全体では、13.7%→28%→34.7%と急増する。これは各々見出し語として独立していた語を親見出しを立ててまとめ、徐々に体系化するという作業が行われたためである(注7)。

外来語で、見出し語から子見出しへと位置を代えているのは、全部で147語ある(注8)。逆に、子見出しから独立して普通の見出し語になった語は特殊な2例(注9)を除いてない。「昭和版」に関して見ると、

ニュース(親見出し)：～カメラ／～シート／～センス／～ソース／
～バリュー／～ペーパー／～ライター／
～ルーム (以上子見出し)

といったように、親見出しとそれに関する子見出しが、新たにまとめて登録されるということが、しばしば行われている。これは、「昭和版」およびそこから予想される昭和初期の外来語の特徴と言える。辞書全体が「親見出し-子見出し」という関係で整理されていく速度に較べれば、外来語のそれはやや遅い。しかし、語の相互関係に対する認識、複数の語から共通する要素を取り出しそこにある意味を認めるという作業は、外来語においても着実に進められていたであろうと推測される(注10)。

以上のような点を踏まえて、ここでは、辞書に登録された外来語の数の変化から見ても、大正・昭和期から外来語が急増したという従来の見解(注11)を支持する結果が出たことを再確認しておく。『辞林』・『広辞林』といった比較的大きな辞書に登録されるということが、必ずしも、ある語の社会的認知を保證するものではない。しかし、辞書というフィルターの間目、多くの外来語が引っかけたということは、そこを通過した語彙に占める外来語語彙の割合も高かったということになる。この点を確認した上で、論を進める。

2. 意味構造分析の試み

どのような意味分野に属する語が外来語として入り込んで来たか、そして、それは時間的な経過とともにどのように変化したか、を見るために意味構造分

析を行う。

田島誠堂氏は、意味構造分析について「語彙を形成する各単語に『分類語彙表』(国立国語研究所1963)または、その前身の国立国語研究所報告にある語彙表の、対応するとみられる語の意味番号を与へ、語彙を意味分野別に分けてみる方法である。つまり、意味分野別の構成がどうなつてゐるかをみる分析法である。(注12)」と述べている。つまり、意味構造分析とは、一つ一つの語の持つ意味やその変化を細かく分析するというのではなく、ある語彙に属する一語一語を「臨時的・個人的な差異を取り除いて得られる(注13)」意義素の本来の特徴によって代表し(注14)、それを分類された意味の枠の中に一つ一つ落としていき、全体のバランスを見る作業である、と言えよう。この分析方法を試みるに当たっては、子見出しを特に区別せず、登録されているか否かに重点を置き、全部見出し語ということばで一括することにする。また、表記のゆれによって重複している語はひとつにまとめて考える(注15)。よって、総数(注16)は5114語から4960語へ、154語の減少ということになる。

『分類語彙表(注17)』の意味については、そのまがきに、「ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられているかを一覧できるように、単語が表し得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。すなわち、その分類の各項には、同義の単語が集められることになるので、これを同義語類語集または同義語類語目録とよぶこともできよう。(P1)」と書かれている。そして、その分類の大枠は、以下のようになっている。

	体の類	用の類	相の類	その他
抽象的關係	(1.1)	(2.1)	(3.1)	(4.)
人間活動の主体	(1.2)	—	—	
人間活動-精神および行為	(1.3)	(2.3)	(3.3)	
人間活動の生産物-結果および用具	(1.4)	—	—	
自然-自然物および自然現象	(1.5)	(2.5)	(3.5)	

まず、大分類として、ほぼ品詞別に近い4類(体・用・相・その他)があり(注18)、さらに各々が人間との関係から5部門に細分されている。5部門のうち、<抽象的關係>は「人間や自然のあり方のわく組みに関するもの」であり、他の4部門は「人間活動に関するもの」である。各部門はさらに細かく分けられ、「(1.)の類 545項、(2.)の類 145項、(3.)の類85項、(4.)の類23項」となっており、各項ごとに該当する語が配当されている。また、「それぞれの仲間、特に(1.)(2.)(3.)のそれぞれの細分にあたっては、なるべく平行するようにし、細分の番号をある程度一致させるように努め(注19)」られている。但し、(4.)に関しては、この限りではない。

大略以上のような『分類語彙表』に基づき、先述の4960語に対してそれぞれ意味コードを与え(注20)、適当な項の中に配当していった。

2-1. <体の類>に見る特徴的变化

意味分野というフィールドにおいて、外来語の守備範囲がどのように変化し広がっていったか、全体を見渡すに先立ち、まず、「2-1」および「2-2」では、各々毎の分析結果をやや細かく検討していく(〔表3-B〕参照)。

(1.1)<抽象的關係>(注21)に属する語は、数が少ない。「大正版」・「昭和版」では最少である。「明治版」だけは(1.2)<人間活動の主体>より多く、(1.3)<人間活動>とはほぼ同じくらいとなっている。この理由は、(1.1960~3)<単位>に属する語(注22)が、「明治版」で集中的に登録されていたことにある。「明治版」では、<抽象的關係>の語全体の70%以上(100語中73語)が<単位>に属する語で占められており、これは「明治版」の大きな特徴となっている。新しい度量衡とともに入って来た語は、「匴(キログラム)」や「糎(センチメートル)」といった漢字でも表された。しかし、馴染みのないこれらの漢字はあまり用いられることはなく、使用の中心は音訳された語であったようだ(注23)。<単位>に属する語を除外して考えれば、(1.1)の語は「昭和版」で急増している。「昭和版」では、「コンストラクション」「コンストラクション」など(1.132)<内容・組織>、「チェンジ」「フェードアウト」など(1.1500~7)<作用>、「エポック」「ゼネレーション」など(1.

1623)<時代>に属する語を中心に新しく登録されており、これらは、元来「構成」「構造」や「変化」「溶暗」、「時代」「世代」などと漢語訳されることが多かったであろう。しかし、大量に流れ込んでくる「一つ一つのことばについて迷い、立ち止まっている余裕が乏しくなって」来る一方で、「長い間の私たちの伝統で、むずかしそうな漢字には、よくは分からないが、何か重要な意味があるのだ、と読者の側でもまた受け取(注24)」るという感覚も薄れたため、漢語訳することをやめてしまった例と言えよう。いや、それ以上に、漢語よりも外来語の方に高級感や新鮮さを感じ、積極的に受け入れていった、あるいは、音訳し直した例と考える方が妥当であるかも知れない。

(1.2)<人間活動の主体>に属する語は、「明治版」では42語と極めて少ないが、時代が下るにつれて加速度的に増加している。特に、(1.234)<人物>は、「大正版」から登場し、「昭和版」では「スポーツマン」「ニヒリスト」「フラッパー」など、実に92語が増えている。また、「昭和版」では「アナウンサー」「ジャーナリスト」「ピエロ」など(1.241)<専門的技術的職業>の語を中心に(1.240~5)<成員・職>に属する語が131語も追加登録され、急速に勢力を伸ばしている。単に、生活の場や道具だけでなく、そこで生活する人々自体が変化しつつあったことの現れであろう。一方、(1.21)<家族>および(1.22)<相手・仲間>に属する語は、「明治版」にはなく、「大正版」より現れ始め、「昭和版」で増えたものである。「フレンド」「メート」「ラバー」(以上「大正版」より登録)や、「ファミリー」「ファーザー」「マザー」「パートナー」「ライバル」(以上「昭和版」で登録)といったこれらの語は、

表3-B:意味分野別分布状況(版別)

	(1.1)	(1.2)	(1.3)	(1.4)	(1.5)	(2.)	(3.)	(4.)	計
明治版	100	42	107	539	271	0	5	5	1069
大正版	165	193	409	1053	522	7	13	8	2370
昭和版	447	639	1281	1657	710	17	154	20	4960

いずれも既存の語で置き換え可能なものであり、こうした語が増え始めたところに「昭和版」の特徴があると言えよう。つまり、語種による語感の違いが意識され、意味のずれを包含しながら既存の語と使い分けられていたのである。

(1.3) <人間活動-精神および行為>に属する語に関しても、(1.2)同様、「明治版」よりも「大正版」、それ以上に「昭和版」の語数が多い。つまり、時間とともに、語数の増加は加速していくという顕著な傾向が見られる。最も勢力が強いのは、(1.300~9) <心・知識>に属する語である。どの版においても、最多の登録語数を誇っている。中でも、(1.3080) <原理・規則・主義>に属する語が多く、特に、「明治版」では、(1.3047) <宗教>に属する語を加えると、<心・知識>に属する語の80%近くを両方で占めている。「プラグマチズム」や「ユニテリアン」といったネーミングされた思想から、まず流入したことを示している。これに対し、「昭和版」で追加登録された<心・知識>に属する語は、各項目に散らばっており、「エスプリ」「デザイア」「イグノランス」といった精神自体やその動き・状態を表す語への広がりを見せている。他には、(1.310~6) <言動>と(1.330~9) <文化・歴史・風俗>も、「昭和版」で多くの語が追加登録された。特に、(1.3374) <スポーツ>は、「サッカー」「バレー・ボール」等の競技名に加えて、「サーブ」「スクラム」「スライジング」等の技術名も含めて、110語もの語が「昭和版」で新たに登録され、競技スポーツの隆盛という世相を反映する結果となっていた(注25)。<言動>に属する語の中に「コール・サイン」「ニュース」「ジャーナル」といったいわゆるマスコミ関係の語が目だつのも、時代的な変化が影響を及ぼした顕著な例と言えよう。

(1.4) <生産物および用具>に属する語は、各版を通じて最も多い。しかし、増加の速度は約2倍づつと一定しており、1-1.で見た外来語全体の増加速度にほぼ平行する。(1.2) <人間活動の主体>や(1.3) <人間活動>のような勢いはない。(1.4)の中で特に大きな割合を占めている(1.436) <薬剤・薬品>に属する語(注26)は、「明治版」と「大正版」で全体の90%以上(147語中134語)が登録し終わっており、早い時期からの流入を推測させる。また、科学技術の発達にともなう「もの」の流入が、外来語の流入に直接反映した例としては、もう一つ、乗り物関係の語が挙げられる。「明治版」では、海上・陸上合

わせてわずか9語(注27)の登録であったものが、「大正版」では、「シップ」「ランチ」「モーター・ボート」等(1.466) <乗物(海上)>に属する語を中心に29語追加登録され、その後、「昭和版」では、「タクシー」「エクスプレス・トレイン」「モーター・カー」等(1.465) <乗物(陸上)>の語を中心に58語が加わった。また、「昭和版」では新たに「グライダー」「ヘリコプター」「ロケット」等(1.467) <乗物(空中・宇宙)>に属する語が15語も登録されており、海上という交易の際の基本的な交通手段から、より日常的な陸上交通へ、さらには、空へという新しい交通技術の流入が見てとれる。(1.4)に属する語は、ものに伴って流入する語の典型と言える。具体的な指示物の流入と同時に語が入ってくるというのは、外来語流入の第一であり、また、新技術等に関係して入ってくる語は後を絶たない。しかし、ものの流入には自ずから限度があろう。この限度が、(1.4)全体の量的な変化をコンスタントに保っていると言えよう。

(1.5) <自然物および自然現象>に属する語は、増加の幅が最も小さい。特に、(1.5)中40%近くを占める(1.5110) <化学成分>と(1.5111) <鉱物>に属する語は、「明治版」を中心に登録され、ほぼ「大正版」まででその受け入れは終わっている。「昭和版」で初めて登録された語は、228語中24語だけである。また、それらに次ぐ(1.552) <植物名>・(1.561) <獣(ほにゅう類)>・(1.586) <四百四病>に属する語は、「大正版」に登録の中心があり、「昭和版」で新たに登録された語は少数である。そして、こうしたことが(1.5)全体の伸びの悪さの原因となっている。<生産物および用具>と比べ、新しい指示物が誕生する可能性の小さい<自然物および自然現象>にあっては、初期の段階で一通りの語が流入し終わってしまったのである。逆に、数量的には少ないが、「昭和版」を中心に登録された語としては、「ホワイト」「スカーレット」といった(1.502) <色>や「エコー」「サイレント」といった(1.503) <音>に関する語が挙げられる。また、「昭和版」では、「明治版」および「大正版」で全く登録されていなかった「ウェイスト」「プレスト」「ハンド」「フィンガー」「ツース」といった(1.572) <胴・胸・背・腹>・(1.573) <手足・指>・(1.576) <骨・歯・つめ・甲>の語が、わずかながら初めて登録されている。既にその事物を表す語がある状態へ外来語が入り込んできた例と

言えよう。こうした語の中には、

サイレント [Silent] 【名】1. 静かなること。無言なること。2. 《Silent picture の略》無声映画。 「昭和版」

ブレスト [Breast] 【名】1. 胸。2. 「ブレスト・ストローク」。 「昭和版」

のように、「無声映画」「ブレスト・ストローク」といった特別な意味が付加されている場合があり、ここに、「サイレント」と「静かなること」、「ブレスト」と「胸」の、語種の違いに留まらない意味的な相違が見出せる。また、これらは、専門的な語として入ったものが、より一般的な本来の意味を担って使用され始めたことを暗示している(注28)。

2-2. <用の類><相の類>の増加

『辞林』・『広辞林』において、外来語は原則として名詞として登録されており、「る」を付けて動詞化したものだけが動詞として登録されている。サ変動詞は名詞と区別されていない。よって、<用の類>に属する語の中心は、こうした五段活用化された語である(注29)。時間的な流れに沿って見ると、「明治版」では、動詞として登録されているものは1語もなかったが、「大正版」では「コスめる」「サボる」「ジゴまる」「ハイかる」の4語が見出せ、「昭和版」では「アジる」「ジャズる」「タクる」「タグる」「テロる」「ニヒる」「バンブる」「ヒスる」「モダる」「ノラる」の10語が新たに登録されている。そのほとんどが、(.3)<人間活動>に属する。合計しても14語と、僅かな数ではあるが、時代が下るにつれて、五段動詞化して使用される外来語の数は増えている。現在でも、「最も一般的な動詞化の操作は「する」を付加することである(注30)」点を考慮すると、実際にはさらに多くの外来語が動詞化して用いられていたものと推測される。名詞として取り入れられるのが外来語の基本であるとすれば、動詞として用いられる語の増加は、外来語の市民権が強化されたことを示すものとして捉えられよう。

<相の類>には、「ロマンチック(「明治版」以降)」「デリケート(「大正版」以降)」「インボッシブル(「昭和版」)」等の語が含まれる(注31)。<相の類>は「昭和版」で急増しているが、特に多いのは、「エレガント」「スマート」など(3.33)<風俗>に属する語である。次いで、「ニュー」「モダン」など(3.1661)<新しい・古い>に属する語、「アレグレット」「スロー」など(3.194)<速い・遅い>に属する語が多くなっており、全体としては、<抽象的關係>に属する語が最も多い。<相の類>の増加は、物や事物を表す語としてだけでなく、ある状態を表現する語として外来語が機能しはじめた結果と受け取れるであろう。

なお、<その他>に属する語は全部で20例あった。その全てが、(4.32)<呼びかけ応答>か、(4.33)<あいさつその他>に属しており、(4.1)<接続>や(4.31)<間投および表現態度>に属するものはなかった。

以上、各類型毎の特徴をやや詳しく見てきた。こうした特徴が現れる原因としては、主に、時代的社会的な背景と借用語としての外来語自身の問題とが考えられよう。ここでの考察を踏まえ、次に、意味分野を大きくまとめ、部門別の変化を見ることにする。

3. 客体から主体へ

部門別の変化を見るにあたっては、まず、品詞に基づく分類の枠を取り外すという作業をした(注32)後、語の消長(いつ登録されたか)別にどの部門に何語含まれているかを集計した。[表3-C]である。つまり、どの時点で、どの意味分野に属する語が、どれだけ入り込んできたかを示している。

[表3-C]のうち、「M→T→S(「明治版」から「昭和版」まで継続して登録されている語)」では、(.4)<人間活動の生産物>に属する語が50.6%と半数以上を占め、次ぐ(.5)<自然>の語を合わせると、全体の4分の3が<人間活動の生産物>と<自然>で占められていることになる。かなり偏った分布である。それに次いで(.1)<抽象的關係>と(.3)<人間活動>が10%前後を占めている。(.1)のほとんどは<単位>に属する語である(注33)。また、(.2)<人間活動の主体>に属する語が「M→T→S」に占める割合は極めて少ない。

「T→S（「大正版」で初めて登録され「昭和版」で継続して登録されている語）」でも、(.4)＜人間活動の生産物＞に属する語が一番多い。しかし、全体に占める割合は減少している。(.5)＜自然＞も(.4)と同様に減少し、逆に、(.3)＜人間活動＞と(.2)＜人間活動の主体＞が勢力をのびしている。(.1)＜抽象的關係＞は減少しているが、これには＜単位＞の語の影響がある。それらを除いて考えると、(.1)＜抽象的關係＞の語は増加傾向にあると言える。全体として見ると、「M→T→S」に較べると、「T→S」では、部門による偏りは平均化されて来ている。

「S（「昭和版」で初めて登録された語）」では、部門による偏りはさらに小さくなる。「S」全体に占める割合が最も高いのは、(.3)＜人間活動＞の36.8%、最も低いのは(.5)＜自然＞の7.9%である。(.3)＜人間活動＞と(.2)＜人間活動の主体＞は勢力を伸ばし続けており、(.1)＜抽象的關係＞も全体数は少ないが急成長していると言える。部門別に見ると、それぞれの版で新たに登録された語の数は、時代が下るにつれて平均化されて来ていると言える。

一度でも見出し語として登録された語全部の合計数（〔表3-C〕の「

表3-C：意味分野別分布状況（消長別）

	(.1)	(.2)	(.3)	(.4)	(.5)	計
M	2	0	1	8	9	20
T	0	1	1	5	1	8
M→T	0	2	0	4	1	7
M→T→S	98	40	116	527	261	1042
	9.4	3.8	11.1	50.6	25.1	100%
T→S	73	150	313	517	260	1313
	5.6	11.4	23.8	39.4	19.8	100%
S	360	449	946	613	202	2570
	14.0	17.5	36.8	23.8	7.9	100%
計	533	642	1377	1674	734	4960
	10.7	12.9	27.8	33.8	14.8	100%

M→T→S、M→S、S、計の下段はパーセンテージ。各々、横方向に合計すると100%になる。

計」)を見ると、やはり、(.4)＜人間活動の生産物＞が33.8%と最も多く、次いで(.3)＜人間活動＞、(.5)＜自然＞、(.2)＜人間活動の主体＞、(.1)＜抽象的關係＞となっている。順位という点では、「T→S」と一致する。これが対象とした時期全体を通じての外来語流入の平均的様相と言えるかも知れない。

登録の中心を部門別に見ると、(.1)＜抽象的關係＞・(.2)＜人間活動の主体＞・(.3)＜人間活動＞は、「昭和版」で全体の3分の2以上が初めて登録されており、「昭和版」で急速に勢力を伸ばしている。(.4)＜人間活動の生産物＞は、ほぼ均等した数が登録されて続けており、(.5)＜自然＞は減少傾向にある。

なお、「M（「明治版」のみで登録されている語）」・「M→T（「明治版」、「大正版」と登録され「昭和版」では抹消されている語）」・「T（「大正版」のみで登録されている語）」それぞれに関しては、合計数が小さすぎるため、ここではあまりふれられない。三者とも、(.4)＜人間活動の生産物＞と(.5)＜自然＞を中心に分布していることだけを付け加えておく。

以上の変化を見やすくするために、「M→T→S」・「T→S」・「S」における各部門の占める割合を大きき順に並べた。以下のとおりである。

	「M→T→S」	「T→S」	「S」
1 割合{大}	(.4)	(.4)	(.3)
2 ↓	(.5)	(.3)	(.4)
3 ↓	(.3)	(.5)	(.2)
4 ↓	(.1)	(.2)	(.1)
5 割合{小}	(.2)	(.1)	(.5)

(.3)＜人間活動＞と(.2)＜人間活動の主体＞は、時代が下るとともに一つずつ順位を上げている。つまり、増加の勢いが増している。逆に、(.5)＜自然＞は、徐々に順位を落としている。つまり、増加の勢いが鈍っている。また、常に一番登録の割合が高かった(.4)＜人間活動の生産物＞も、「S」では、(.3)＜人間活動＞に抜かれ第2位に転落している。(.1)＜抽象的關係＞は、しばしば触れたように単位に関する語の関係で、「T→S」で一旦順位を落としているが、「S」では再び上昇している。順位としては上下した形だが、語数では「S」

は「M→S→T」の3.5倍となっており、かなり増えている。

以上、大きくまとめると、《人間》と《人間の活動》は勢力を伸ばし、《自然》と《生産物》の勢いは鈍っている、そして、それらの線は交差しており、その関係を規定する《わく組》も基本的に勢力を伸ばしている、ということが言える。

外来語が日本語の中での位置を確立していく過程を見る観点として、数量そのものや用法・品詞等いろいろなことが考えられる。ここで取り上げた意味構造分析も、意味分野の構造という一つの観点に基づく方法である。その基準とした『分類語彙表』中で、執筆担当者自らが「独創ではあるが独断的であり、またいまだに完全なものではない(注34)」と述べているように、「単語が表し得る意味の世界を分類する(注35)」ということ自体が厄介な問題であるために起こってくる矛盾や、その他批判は多々あろう。しかし、それらを差し引いても、意味構造分析には、ことばに対するアプローチの方法としての価値を見出すことができる。

ここで扱った資料から見る限り、大正・昭和期、特に昭和初期は「モダン語の時代」と言われ、中でも特に外来語が急増した時期である。増え始めた外来語はどのように勢力を拡大していったのか、意味構造分析というフィルターにかけると、そこにひとつの外来語増加の様相が浮かび上がって来る。それは、《客体から主体へ》の進出である。量的に膨れ上がるとともに、外来語は、人間の働きかけるべき客体としての〈自然〉から、働きかけの主体〈人間活動の主体〉へ、人間によって造りだされる〈人間活動の生産物〉から、造り出すという行動そのもの〈人間活動〉へと、その守備範囲を急速に拡大していった。人間を取り巻いているものに関する語彙から、人間自身に関する語彙へ、まさに、《客体から主体へ》と浸み込むように膨らんでいったのである。

注

(1) 荒川惣兵衛氏『外来語学序説』(自家版1932名著普及会の復刻版による)には以下のようにある。

現代特に最近代は、実に外来語氾濫時代とも申すべきであつて、新たに生まれる新日本語、即ち所謂「モダン語」の数は殆ど圧倒的であり、日々の新聞、月々の雑誌には、日に月に新「モダン語」を發見する。

(2) 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版1980)によれば、

ある同一の意味関係に基づいてまとめられる一群の語の集合は「意味分野」を構成するという。意味分野の構造には幾つかの型が見られる。(国広哲弥氏担当)

となっているが、ここでは、それぞれの意味分野別にその構造の変化を見るのではなく、意味の世界を構成している分野(具体的には『分類語彙表(注19参照)』の部門や細分項目に当たる)の構造が、どのように変化していくか、その相互関係を見ることを主たる目的とする。

(3) 田島毓堂氏「語彙指標—語彙の数量的側面と語彙研究への視点—」(『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会1992)に、次のようにある。

阪倉篤義氏「万葉語彙の構造—(その一)名詞について—」(『万葉』34 1965)によつて始められ、浅見徹氏「古代の語彙Ⅱ」(『講座国語史3 語彙史』1971)によつて継承された語彙分析法を「意味構造分析」と称しておく。

これに従い、本稿でも「意味構造分析」という名称を用いることにする。

(4) 調査上の都合から、資料中カタカナ書きされたもので主に西洋語起源のもの、および、そうした部分を含むものを外来語見出しとして取り上げることにする。

(5) 「明治版」のみ登録の語は「亜硝酸ナトリウム」「アセト・アミード」「アルキル基」など23語、「大正版」のみ登録の語は「インド肩掛け」「エビスコバル・チャーチ」「シルケット綿布」など23語、「明治版」および「大正版」登録の語は「アメリカ後家」「空気ポンプ」「半マルテル」など14語である。「明治版」のみの登録に終わった語には、化学関係の語が多い。薬品名等のほとんどは継続して登録されていくので一概には言えないが、高

度の専門性や、出自の異なる言い方が主流となったため抹消された語と考えられる。

(6) 減少の主な原因は既登録語、特に雅語や仏教用語の整理にあると思われる。例えば、「明治版」では「梵語・アイヌ語・琉球語・朝鮮語及漢字の唐宋音に属するものは片假名を以て記」(凡例)されており、こうした語は全部で1265語あるが、これらについてだけ見ても、「昭和版」では仏教関係の語を中心に45語が抹消されている。

(7) 具体例としては、「明治版」で各々独立していた「瓦窯」「瓦師」「瓦煎餅」「瓦櫃」「瓦葺」「瓦松」「瓦屋」「瓦屋根」が、「大正版」では「瓦」の元に集められたり、「大正版」で独立していた「狛犬」「狛剣」が、「昭和版」では「狛」の子見出しになったり、というのが挙げられる。

(8) 内訳は、「明治版」・「大正版」で見出しとして登録され「昭和版」で子見出しになった語35語、「明治版」で見出しとして登録され「大正版」以降子見出しになった語60語、「大正版」で見出しとして登録され「昭和版」で子見出しになった語52語である。

(9) この2例とは、「菓子パン」と「消火用蒸気ポンプ」である。これらは「大正版」のみで普通の見出しとして登録されており、「明治版」「昭和版」では子見出しである。また、「明治版」では見出しとして登録されていたが、「大正版」では抹消され、「昭和版」で再び子見出しとして登録された語に「アウト・カーブ」がある。これは、編纂意図によるものというよりは、何等かの手違いによるものとして考えた方がよいであろう。

(10) この時期、英語教育の普及との関係もあって、外来語の意味と形の関係は、簡単には論じられない。例えば、「ニュース・ライター」という語が、全体で一語として使用され始めた後、他の語との類推から「ニュース」と「ライター」それぞれが独立して意味を担っていたのか、あるいは、その逆であったのかは難しい問題である。が、いずれにせよ、複数の語の形から意味を類推し、ある部分を独立させて使用するという事は、多かれ少なかれ起こっていたであろう。

(11) 石綿敏雄氏「近代語としての外来語」(『日本語学』6-4 1987)には次のような指摘がある。

……外来語は近世初期から日本語にはいりはじめたものの、江戸時代にはそれほどびびり、明治中期以後やや力を得、大正・昭和期から急増した…他にも同様の見解が諸氏によって出されている。

(12) 注(3) 参照。

(13) 注(2) 参照。

(14) 意味構造分析の際、一語一義にすべきかについては、意見の分かれるところである。

(15) どの程度のもを表記のゆれと見なすかについては、基本的に、

1. 特殊拍に関するもの
2. r (または l) に関するもの
3. 母音 (例えば a と o) に関するもの
4. 単数形と複数形に関するもの

に限って表記のゆれと見なした。具体例としては、

「テップ」と「テープ」 → 「テープ」としてまとめる。

「ドル」と「ガラ」「ドルラル」 → 「ドルラル」としてまとめる。

などが挙げられる。同じ原語から来ているものでも

ダイアグラム [Diagram] (名) 図表。図式。図解。 「昭和版」

ダイヤグラム [Diagram] (名) 予定表。 「昭和版」

などのように、解説にずれの見られるものは別語として扱う。

(16) 表 I の上半分参照。

$$23(M) + 23(T) + 14(M \rightarrow T) + 1103(M \rightarrow T \rightarrow S) + 1338(T \rightarrow S) + 2613(S) = 5114$$

(17) 国立国語研究所『国立国語研究所資料集 6 分類語彙表』(林大氏担当 1964)

(18) この4類を第一に立てたことについては、『分類語彙表』の「まえがき」で以下のように述べている。

品詞論的分類をまず第一に行なうことをしないで、《美》と《美しい》、《動き》と《動く》をそれぞれ一つの項目の中に合わせるやりかたも、十分考えられることではあるが、実際上は困難であった。

(19) 以上「」内の引用文は、注(17)参照。

(20)田島航堂氏「語彙論的語の単位試論—意味単位と分類単位—」(『日本語論究2 古典 日本語と辞書』和泉書院1992)では次のように述べている。

本稿では、独立単位として<分類単位>を設定し、意味構造分析の単位として<意味単位>を下位の単位として設定しようとするものである。<分類単位>が一般にいふ広義の複合語をも含めた単語に相当する。…(中略)…そして、その<分類単位>のなかを、いはゆる形態素にはばあたるやうな語構成要素に分割して、それをそれぞれ<意味単位>として、意味コードを与へようとするものである。

意味構造分析の際の単位として氏は<意味単位>を設定しているが、本稿では、辞書の見出し語をそれぞれ一単位とした。意味コードを付ける際の基準は以下のとおりである。

1. 複数の版に共通している見出し語の語釈は、より古い版に従う。
2. 原則として、解説で用いられた和語・漢語等に基づいて意味コードを決定する。適当な語がない場合はその都度検討し、適宜意味コードを決定する。
3. 複数の語釈がある場合は番号の若いものから、また、番号のない場合は前のものから順次取り上げる。場合によっては、多少の調整を行う。
4. 同じ外来語が『分類語彙表』の中に見いだせる場合でも、辞書の語釈と『分類語彙表』中の意味が異なると判断される場合は、辞書の語釈に基づく。

(21)以下、<>内には、便宜上、各項目中の代表的な項目、もしくは最初の項目を挙げる。

(22)語彙調査の際、必ずと言ってよいほど上位に現れるのが単位に関係する語である。数字や固有名詞とともに、語彙について考える場合に注意を要するもののひとつとして挙げられよう。

(23)昭和7年の東京朝日新聞の記事について調査したところ、よく用いられていたのは、「米(メートル)」や「屯(トン。元々は噸。)」といった簡単な漢字で表せるものであった。

(24)以上「」内は柳父章氏『翻訳語成立事情』(岩波新書189 1982)による。

(25)米川明彦氏は「近代における外来語とスポーツ—その定着過程—」(『論

集日本語研究(二) 歴史編』明治書院1986)でスポーツ用語に関して述べている。そこでも触れられていることだが、ラジオ・新聞等のマスコミを通じて大量に流されるこれらのスポーツ用語は、やがて、それを使った慣用的表現(「スクラムを組む」「スタートを切る」等)を生み出していくようになる。

(26)(1.436)<薬剤・薬品>と、後で述べる(1.5110)<化学成分>・(1.5111)<鉱物>は、区別しにくく、どこに分類すべきか判断に迷う語も多かった。が、3項目とも、「明治版」を中心に「大正版」までに、ほぼ語の登録が終わっている点は共通していた。

(27)内訳は、<乗物(陸上)>が「アプト式鉄道」「トラック」など4語、<乗物(海上)>が「ボート」「ヨット」など5語である。

(28)各版の語釈の変化から、このことが推測される。例えば、「大正版」で登録された「アウト」という語は、当初テニス・野球・クリケットの用語としての説明のみであったが、「昭和版」では「そと。外方。」という本来的な意味が語釈の第一番目に加えられている。また、やや観点は異なるが、佐藤幸氏は「「シャボン」から「セッケン」(石鹼)へ」(『近代語彙の歴史的研究』桜楓社1980)で、「セッケン」という学術用語が一般化する過程について述べている。

(29)動詞の他に、「大正版」から登録された慣用的表現の「メートルを掲げる」「モーションをかける」「ミイラ取りがミイラになる」の三つの見出し語もここに分類した。よって、[表3-B]の「大正版」の(2.)は、動詞4、慣用的表現3で合計7語となっている。

(30)国立国語研究所『日本語教育指導参考書16外来語の形成とその教育』(文部省印刷局1990)参照。

(31)名詞と区別が付きにくいのが、基本的に、解説に「～的。」あるいは「～な。」などとあるものを<相の類>に分類した。

(32)外来語はほぼ<体の類>に属するが、「2-2」で見たように<用・相の類>の語も若干ある。これらの語を切り捨てることも可能であるが、幸い『分類語彙表』の各細分項目はなるべく平行するように作られている。よって、<類>に関する部分を捨象することによって、<用の類>と<相の類>

の語を取り込むことにした。その際、多少のずれが見られるような箇所はその都度訂正した。また、〈その他〉の類は、細分項目の番号が平行していないが、それぞれの語の解説に基づき、適当と思われるところに当てはめた。

(33)注(22)参照。

(34)注(17)参照。

(35)注(17)参照。

第4章 外来語使用の実際

1. 昭和7年『東京朝日新聞』に見る外来語使用の実際

昭和7年『東京朝日新聞』に対して行った調査によって、当時使用されていた外来語の一部を、具体例として掘むことができた。では、それらの外来語はどのようなレベル(日本語の語彙に占める位置)で使用されていたのであろうか。このことについて探るために「明治版」「大正版」「昭和版」との比較を試みた。なぜなら、辞書に見出し語として登録されているということは、ある語の普及の程度を知る上で、一つの目安になると考えたからである(注1)。

「明治版」「大正版」「昭和版」のいずれに、見出し語(子見出しも含む)として初めて登録されたかによって抽出語を分類したところ、数値面での結果は[表4-A]のようになった(注2)。

[表4-A]の上三段は、辞書の見出し語と一致した新聞使用語の数を示す。どの版に初出する見出し語かによって三グループに分けた。具体的にどのよう

表4-A: 辞書への登録時期による新聞使用語の比較

	異なり	延べ	頻度1	スポーツ関係の語			
				異なり	対全異なり	延べ	対全延べ
M→T→S	255	3,492	52	7	2.75%	150	4.30%
T→S	290	2,681	96	22	7.59%	624	23.27%
S	489	3,075	167	62	12.68%	652	21.20%
登録なし	558	1,285	343	82	14.70%	364	28.33%
合計	1,592	10,553	668	173	10.87%	1,790	16.96%

な語が含まれるかは、巻末の《資料1》を参照されたい。

数値的に見ると、異なり数では、「明治版」から登録された語と「大正版」から登録された語の量、「昭和版」で登録された語と登録なしの語の量が、近い数値を示しており、新しい方のグループは、古い方のグループのほぼ2倍の量となっている。一方延べ語数では、登録なしの語の量が極端に少ない。これに付随して、頻度1の語も、登録なしのグループで多くなっている。全体的に見ると、早い時期に辞書に登録された語ほど、何度も繰り返し使用される傾向が強く、外来語の中では、日本語の語彙の中心に近い部分に位置している語であるということが推測できる。では、内容的にはそれぞれのグループはどのような特徴を持った語を含んでいるのだろうか。

1-1. 「明治版」から登録された語

まず、「明治版」から登録された語のグループについて考える。このグループの語は、明治末期までに、ある程度慣用レベルに達した語と考えてよいであろう。

「明治版」から登録された語を頻度順に並べたとき、その上位に顔を出すのは度量衡に関する語、つまり、単位を表す語である。「メートル」「ドル」「トン」「セント」などがその例として挙げられる。これらは、西洋の科学知識や経済的交流に伴ってもたらされた語であり、新聞という資料の性格上、特に多用される傾向にある。既存の語の中にも度量衡に関する語は当然存在するのであるが、単位の取り方が異なる以上簡単に言い替えるものではない。同様に、新事物・新概念に対応して入り込んできたと考えられるものとしては、「パン」「コーヒー」など食品名、「コレラ」「チフス」といった病名や、「ガス」「セメント」「ゴム」といった素材に関する語などがある。

こうした一般的な傾向に対して、「明治版」から登録された語と一致する新聞使用語の中にも、やや様相の異なる一群がある。それは、「ホテル」や「クラブ」といった語である。この一群は、和語・漢語・外来語いずれとも結合して、特に固有名詞をたくさん作り出し、その造語力という点で特徴をなす。昭和7年の『東京朝日新聞』での使用例を見ても、類概念を表す造語成分として

主に後項に位置し、「工業クラブ」「日本人クラブ」「シネマクラブ」など、多くの複合語を造り出している。また、これらの語は、全く新しい事物・概念を表しているというわけではないという点でも先述の語とは異なる。洋風和風の違いはあるものの、これらに類似した事物・概念を表す語は日本語の中にもある。にもかかわらず、「綿業組合」よりも「綿業クラブ」といったことばが、一種の高級感や西洋文化に対するあこがれから、好んで使用されるようになっていた。つまり、語種によるニュアンスの違いが意識され、使い分けられていたのである。日本語にない事物・概念を表すために音借用された語が多い中で、既存の類似した事物・概念についてあえて用いられたこれらの語は、日本語の語彙における外来語の位置（役割分担）を考える上で示唆的である。そして、後に普及していく語の中には、同様の現象が多数見られるようになるのである。

1-2. 「大正版」から登録された語

「大正版」から登録された語と一致する新聞使用語のうち、特徴的なのは、「プロレタリア」「ブルジョア」など思想に関する語である。いずれも、それまでの日本になかったものの考え方を表し、ことば自体もその意味するものも、新規のものとして、類似した概念を表す既存の語とぶつかり合うことなく日本語の中に入り込み、安定していった語であろう。また、「明治版」から登録された「ホテル」や「クラブ」と同様に、「大正版」から登録された「ファン」は、後項に位置して造語力を発揮している。時代の流れの中で、新聞の見出し語に、「戦争狂」ではなく「戦争ファン」という活字が踊っているのは、現代の私たちには少々奇異に映る。

一方、「ゴルフ」「スキー」「スケート」「ホッケー」「ラグビー」などのスポーツ名、あるいは「グラウンド」「トラック」といったスポーツのいわばハード面に関することば、また、「ゲーム」「リレー」なども、新聞紙上で多用されている。様々な競技が次々と流入し、その競技名が新聞紙上を賑わしたことが知られる。これは、また、オリンピック競技大会の復活に始まる世界的なスポーツ振興熱が、日本でも高まっていたことの証しでもある(注3)。

1-3. 「昭和版」で登録された語

次に、「昭和版」で登録された新聞使用語について考える。「昭和版」に登録された語、つまり、昭和初期の頃より一般に使われ始めたと思われる語は、時代変化の激しさを反映するとともに、外来語が日本語の語彙の中に浸透していく上でのひとつの段階を示している。

昭和7年の大衆文化のキー・ワードは、マスコミと競技スポーツであろう。ナショナルリズムとインターナショナルリズムの間でスポーツの組織化が進み、各種競技スポーツが隆盛し、学生を中心としたスポーツ大会が盛んに開催された。その興行的価値に裏打ちされて、マスコミは各種の試合を盛んに取り上げ、庶民はその娯楽に群がり、そこで用いられた外来語を吸収していった(注4)。

「昭和版」で登録された新聞使用語もその影響を受け、「ニュース」「トーカー」「アナウンス」といったマスコミ関係の語や、「チーム」「コース」「セット」などのスポーツ関係の語が高い頻度で現れている。

このスポーツ関係の語(注5)の割合は、辞書への登録時期が新しいものの方が古いものより、登録されていないものの方が登録されているものより、高くなっている。これから考えると、この時期、スポーツに関してどんどん外来語が持ち込まれ、さらにその勢いを増そうとしていたのではないかとということが推測される。そして、スポーツ関係の語の増加を支えていたのは、新聞やラジオといったマスコミではなかっただろうか。マスコミがスポーツ関係の報道をし、人々がそれに熱中することによって、そこで用いられた外来語が、人々の語彙の中に入り込んでいったのである。そこでは当然、スポーツ自体の名や道具名の他に、多くの技、つまり、動作や、試合の状況を表すことばが用いられたであろう。このことは、「昭和版」で登録された語が示す次の傾向を間接的に高める要因にもなっている。

このグループの語のもうひとつの特徴は、ある種の動作や状態を表す語が多いことである。「リード」「サービス」「バント」「ストレート」「ナンセンス」などがその例として挙げられる。こういった語は、「する」や「な」などを伴って、「用」や「相」の語(注6)として働く可能性が高い。実際に、そういう形で新聞紙上に現れた語は、「明治版」から登録された語では4語、「大

正版」から登録された語では18語、「昭和版」で登録された語では51語あった。このうち、スポーツ関係の語は、「明治版」1語、「大正版」3語、「昭和版」13語である(注7)。登録時期が新しくなるにつれ「用」「相」の語となりやすい語が増え、スポーツ関係の語も増えているのである。こうした語は、名詞に比べ、既に類似した概念を表す語が日本語の中にも存在している可能性が高い。が、外来語は、外国語が元来持っている意味的な広がり、日本語とより重なりやすい部分を捨て、まず、限定的な場面で用いられる専門語として入り込んでくる。そして、この限定的な用法が、マスコミを通じて一度に多数の人々に向かって多量に流されていく。こういう形で多用された語は、最初に広まった、限定された場面における意味が、日本語での意味として固定し、やがて、その安定感に基づいて、より一般的な場面でも使用されるようになり、用法の広がり生まれ、日本語の中における位置を獲得していくのである。こうして既存の語と新しい外来語との棲み分けがなされていく。「昭和版」から登録された語と一致する新聞使用語には、ちょうどその過程にある語が多く含まれている。

1-4. 辞書に登録されていない語

昭和初期の時点で、本稿で用いた辞書に登録されなかった語、つまり、「昭和版」に登録されていなかった語の中には、性格の異なるものが含まれており、複雑である。

まず、専門性の高い語、「ピクル(通貨単位)」や「ヒドラジン(薬品)」などが、その一角をなす。また、「モス(飛行機の型名)」や「エンプレス(船名に付く)」といった固有名詞に近い用法のもの、さらに、「ザッツ」や「オブ」といった句や文の一部を形成するものも、ここに含まれる。これらは、いずれも、語自体、辞書には載りにくい性質の語であるといっていよい。

このようなものを除外すると、辞書に登録されていない語のグループには、「アクセント」や「スカウティング」といった、あまりこなれていない感じの外来語が残る。外国語に近いものと言ってもよいであろう。これらの語は、「昭和版」にも登録されていないという点や、全体に対する頻度1の語(調査範囲において1度しか使用されなかった語)の割合が、異なり語全体の

61.4%を占める（〔表4-A〕より算出）という点を考えると、当時、まだ、外来語として一般に通用していなかった語と言える。訳語を考える暇もなく、あるいは適当な訳語が決定されないまま、どんどん流れ込んでくることばを、そのまま音だけを頼りに日本語に置き換えたような語である。それは、例えば、「ボブスレー」や「フェンシング」のように新しいスポーツの名であったり、「ナックル」や「スマッシュ」など細かい技術名であったりする（注8）。また、国際的な感覚や臨場感を出すためか、訳そうという努力があまり払われなかった語もあるだろう。オリンピックの号外記事に見られる「ディスクォリファイする」や「ミスジャッジ」などは、その例と思われる。さらに、個人的文体的な嗜好に関係したものもある。こうした語はいずれも外来語というよりも、外国語のカタカナ表記という感じが強い。しかし、これらのうちのあるものは、やがて一般に使用されるようになって安定していく。そして、他のものは、専門性の高い語として一部の人々の間で細々と使用され続けたり、または、そのまま消えていくことになるのである。それを決めるのは、マスコミなど供給者側の意図と、受けて側の持つ必要性、既存の語との関係や各語の背負うイメージなどであろう。

1-5. 昭和7年における外来語受容の背景

新しい概念や事物に関する外国語を、音借用して日本語の中に取り入れるというのが、外来語のそもそもの始まりであろう。しかし、取り入れた外来語に対して、類似した概念を表す語が既に存在する場合、あるいは、類似した概念を表す語があるにも拘らず敢えて外来語を用いる場合、そのメカニズムはやや異なったものとなる。そこには、必然的に、語種に対する価値観や意味の限定性による既存の語との棲み分けというものが存在してくる。

昭和7年は、やがて弾圧へと変化していく力とさらに自由を拡充しようとする力が競り合っていた。その中で、外来語は、単なる流行から無視できない現象へ、一部専門家のものから一般的な知識人のものへ、と、その位置を移し、次第に大衆の中にも広まっていく。そして、そこには、ある概念を表す語が存在しないという一種物理的な必要性に加えて、語種に対する価値観に基づく選

択や、限定的な場面に対応する語を用いようとする動きがあった。昭和7年の外来語の使用状況は、そんな流れの中にあっただと思う。

2. 外来語使用の変化と傾向

2-1. 全体的傾向

「1」では、新聞紙上において実際に使用された語と、辞書という目録に取められた語を比較し、スポーツ関係の語を中心に増加していることを指摘した。以下では、この資料に意味構造分析を用いて、さらに一步踏み込んだ考察を加える。意味構造分析については、第3章を参照されたい（注9）。

なお、ここで、確認事項として、第3章の内容と重なる部分が多いが、辞書に登録された外来語について行った意味構造分析の結果を示す。ほぼ品詞分類にあたる「類」の枠を取り外し、いつ（どの版で）、どの部門に属する語が何語登録されたかを示すと、次のようになる（注10）。

〔表4-B：外来語の辞書への登録状況／部門および登録時期別〕

	M→T→S	T→S	S
(.1)	100	73	360
(.2)	42	151	449
(.3)	117	314	946
(.4)	539	522	613
(.5)	271	261	202
計	1069	1321	2570

※但し、「M（「明治版」のみの登録に終わった語）」と「M→T（「明治版」と「大正版」で登録され「昭和版」で登録されなかった語）」は「M→T→S」に、「T（「大正版」のみで登録されていた語）」は「T→S」に含めた。

これを、各版ごとに、登録語数の多い順に部門を整理して並べかえると以下のようになる。

[表4-C: 辞書に登録された外来語の登録時期別、部門順位]

	M→T→S	T→S	S
多	(.4)	(.4)	(.3)
↓	(.5)	(.3)	(.4)
↓	(.3)	(.5)	(.2)
↓	(.1)	(.2)	(.1)
少	(.2)	(.1)	(.5)

これから分かるように、(.3)〈人間活動〉と(.2)〈人間活動の主体〉は、増加の勢いが加速し、(.5)〈自然〉は増加の勢いが鈍っている。一般的に外来語としての受け入れが最も盛んであると言われている(.4)〈人間活動の生産物〉も減速に転じている。(.1)〈抽象的關係〉は、「明治版」で度量衡に関する語が大量に登録されたため、やや複雑な動きを示しているが、ほぼ増加傾向にあると見てよい。つまり、第3章で述べたように、人間にとっての客体に関する語彙から、主体に関する語彙へと増加の中心が移行していることを確認しておく。

2-2. 新聞使用語と辞書登録語との比較I (異なり)

2-2-1. 辞書への登録時期から見た全体的な傾向

新聞資料中で使用された外来語の異なり語を、「1」同様、辞書の見出し語の登録時期と比較することにより、四つのグループに分け、意味分野という観点から比較する。結果の全体像は次のようになる。(「なし」の欄には辞書見出し語中に見いだせない語の数を、「その他」の欄には意味不明語および(5.)に分類された語の数を、それぞれ示す。)

[表4-D: 新聞使用語(異なり)の構成/部門および登録時期別]

	M→T→S	T→S	S	なし	計
(.1)	43	27	89	108	267
(.2)	14	49	92	68	223
(.3)	26	67	164	164	421
(.4)	125	107	107	106	445
(.5)	47	40	37	56	180
その他	0	0	0	56	56
計	255	290	489	558	1592

[表4-D]のうち、辞書に登録されている語(「M→T→S」「T→S」「S」)について一瞥して分かるのは、(.3)〈人間活動〉の語には新しい時期に流入してきたものが多く、(.5)〈自然〉の語には古いものが多い、ということである。(.1)〈抽象的關係〉の語ではちょうど中間のものが少ない。また、(.2)〈人間活動の主体〉の語は数量的には新しいものが多くなっており(注11)、(.4)〈人間活動の生産物〉の語は古いものがやや多いが、語数がほぼ一定している。

これを、辞書に登録されている語、つまり「M→T→S」「T→S」「S」の語に関して、辞書見出し語と同様、登録語数の多い順に部門を整理し並べかえると以下のようになる。

[表4-E: 新聞使用語(異なり)の登録時期別、部門順位]

	M→T→S	T→S	S
多	(.4)	(.4)	(.3)
↓	(.5)	(.3)	(.4)
↓	(.1)	(.2)	(.2)
↓	(.3)	(.5)	(.1)
少	(.2)	(.1)	(.5)

[表4-E]は、[表4-C]で見たものと、増減の傾向としてはほぼ一致す

る。異なり語で見ると、やはり、人間にとっての客体に関する語彙から主体に関する語彙へと増加の中心が移っていると言えるであろう。

では、昭和7年の新聞資料で使用された外来語が、辞書に登録された外来語見出しに対して占める割合はどの程度であろうか。〔表4-B〕および〔表4-D〕から算出した結果を以下に示す（単位は％）。

〔表4-F：新聞使用語（異なり）が辞書見出しに対して占める割合（％）〕

	M→T→S	T→S	S
(.1)	43.0	37.0	24.7
(.2)	33.3	32.5	20.5
(.3)	22.2	21.3	17.3
(.4)	23.2	20.5	17.5
(.5)	17.3	15.3	18.3
全体	23.9	22.0	19.0

これを見ると、古い版から登録されていた語ほど実際の使用例があり、語としての定着が推測できる。また、部門別では(.1)＜抽象的關係＞、特に「明治版」における(.1)の語の使用率が高くなっている。これは、たびたび繰り返すように度量衡に関する語がここに多数属しているためである。(.)2)＜人間活動の主体＞も、「明治版」と「大正版」において、高い割合を示している。逆に、実際の使用率が低いのは(.5)＜自然＞に属する語である。自然に関する語は、西洋科学とともにかなり早い時期に入り込んで来たが、専門的な語が多いためか、新聞には使用されにくかったのではないかと思われる(注12)。

2-2-2. 辞書への登録時期から見た部門別の特徴

それぞれの語の古さ（辞書への登録時期）別に、具体的な例を示しながら、その特徴を見る。

2-2-2-1. 「明治版」から登録されていた新聞使用語

まず、最も古く、「明治版」から登録された見出し語と一致するものの中では、度量衡関係の語が目につく。(.)1)＜抽象的關係＞では、「明治版」から登録された見出し語と一致する語43語中34語が度量衡の単位を表す語で占められている。「明治版」から登録された(.1)の見出し語自体100語中73語が単位を表す語で占められていることを考えると、これは、早い時期に流入した外来語の特徴の一つと言えよう。

(.)2)＜人間活動の主体＞に属する新聞使用語は14語と極めて少なく、(.2)内での偏りもあまり見られない。「明治版」から登録された(.2)に属する辞書見出し自体が42語と少ないことと考えあわせると、これは、より古い時点での(.2)に属する外来語の勢力の弱さを示していると考えられるであろう。(.)3)＜人間活動＞に属する辞書使用語は、数量的には(.2)より多いが、偏りのなさという点では(.2)と同様の傾向を示している。

逆に、新聞使用語としても、辞書見出しとしても、ともに「明治版」の中で大きな割合を占めているのは、(.4)＜人間活動の生産物＞である。その中でも目立つのは、「セルロイド (1.411)」「コンクリート (1.412)」「ゴム (1.414)」といった＜資材＞を表す語、あるいは、「メリヤス」「モスリン」「フランネル」など(1.420)＜布・布地＞の語、また、「アヘン」「グリセリン」「モルヒネ」など(1.436)＜薬剤・薬品＞に関する語である。これらはより早い時期に流入し、実際に使用されながら生き残ってきた語といえよう。

新聞に用いられた(.5)＜自然＞に属する語で、「明治版」から登録された語の約半数は、(1.5110)＜化学成分＞と(1.5111)＜鉱物＞に属する語で占められている。「アルミニウム」「ニッケル」「プラチナ」といったこれらの語は、化学元素の名というよりは、むしろ、素材の名として意識された。明治期に大量に流入した化学関係の専門語は、素材などを識別するためのことばとして、一般社会で使用され、定着していったのであろう。

2-2-2-2. 「大正版」から登録されていた新聞使用語

次に、「大正版」で初めて登録された見出し語と一致する新聞使用語につい

てその特徴を述べる。

(1) <抽象的關係>に属する辞書の見出し語と新聞使用語の一致は、「大正版」では27語しかなく、「明治版」の43語より少ない。つまり、「大正版」から登録された新聞使用語は、「明治版」から登録された新聞使用語の6割となる。辞書の見出し語自体、「大正版」で新たに登録された語は73語と、「明治版」の100語より少なくなっている。これは「明治版」で度量衡の単位を表す語が大量に登録され、新聞でもよく使用されたことの反動と言えよう。これら「大正版」で登録されていた新聞使用語のうち、やや目立つのは、「スタート」「バス」といった(1.152) <過程・経過>に属する語、あるいは「ナイト」「モーニング」など(1.163) <年>の語、「スピード」「リズム」など(1.194) <速度>の語である。なお、単位を表す語は「デニール」と「マルク」の2語が「大正版」で登録されていた新聞使用語として加わるのみで、大半は「明治版」で登録された語でまかなわれている。

(2) <人間活動の主体>は、「大正版」で新たに登録された見出し語の数も、実際に新聞で使用されていた語の数も急激に増加する。特徴的なのは、(1.23) <人種・民族>に属する「エスキモー」「ゲルマン」「スラブ」といった語で、世界進出を目論んでいた当時の日本を反映しているのであろう。他には、「アマチュア」と「プロフェッショナル」に代表される(1.234) <人物>、「スパイ」「タイピスト」「マネージャー」など(1.241) <専門的技術的職業>に関する語も多くなる。この<人物>と<専門的技術的職業>に属する語は、「昭和版」で登録された新聞使用語では、さらに増加する。

「大正版」から登録された(3) <人間活動>に属する見出し語 314語中、新聞で実際に使用されていた語は67語あり、この中には、「アナーキズム」「キャピタリズム」「リアリズム」といった名付けられた思想、(1.3080) <原理・規則・主義>に属する語がかなりある。また、「ゴルフ」「ホッケー」「ラグビー」など、競技名を中心に、(1.3374) <スポーツ>に関する語もたくさん使用されている。

「大正版」から登録されていた(4) <人間活動の生産物>に属する新聞使用語の中で特徴的なものは、「ハーモニカ」「バイオリン」など(1.456) <楽器>に属する語である。また、「エンジン」「モーター」など(1.465) <機械>

に属する語も「大正版」から登録され使用された語の特徴となっている。一方、(4)の語の中でも、「シャツ(M→T→S)」「スカート(T→S)」「ブラウス(S)」「(以上全て(1.423) <下着・羽織・ズボン・コートなど>)」といった服飾関係の語や、「サンドウィッチ(M→T→S)」「サラダ(T→S)」「スープ(S)」「(以上全て(1.431) <飯・そば・パン・汁など>)」など料理関係の語は、各版を通じて登録され、また、使用されている。

(5) <自然>に属する語で、「大正版」から登録されていた新聞使用語の中には、(1.5110) <化学成分>または(1.5111) <鉱物>に属する語は5語しかなく、「明治版」から登録された新聞使用語に比べると非常に少なくなっている。また、「大正版」から登録された(5)に属する新聞使用語の全体数自体も減少しており、これといった特徴も見あたらない。わずかに、「グリコーゲン」「ヘモグロビン」「ホルモン」といった(1.577) <血・孔・涙・汗・尿など>に属する語が目新しい。なお、(5)に属する新聞使用語の中では、「キャベツ(M→T→S)」「アスパラガス(T→S)」「セロリ(S)」「(以上全て(1.552) <植物名>)」など食材に関する語が、三版通じて登録され、使用されている。

2-2-2-3. 「昭和版」で登録された新聞使用語

最後に、新聞使用語のうち、「昭和版」で初めて登録された語について見る。

(1) <抽象的關係>の語で、「昭和版」で初めて登録された見出し語と一致する新聞使用語89語の中には、「ゴール」「コーナー」など(1.17) <空間・場所>や、「シャープ」「ウェーブ」など(1.18) <形・型・姿・構え>に属する語が登場する。度量衡の語から始まった<抽象的關係>に属する語の流入が、徐々に<抽象的關係>全般へと広がっていったことが、外来語使用の実際から裏付けられよう。

(2) <人間活動の主体>に属する新聞使用語では、(1.234) <人物>と(1.241) <専門的技術的職業>に属する語が、「昭和版」の見出し語として、非常に多く見いだせるようになる。これらは、「大正版」から登録されていた新聞使用語の中でも、すでにかなり多かつたものである。また、「昭和版」で登録

された新聞使用語では、細分項目の内部に特徴的なものが見られるようになり、(1.234) <人物>では、「スプリンター」「スキーヤー」といったスポーツ選手を表す語や、「ファシスト」「マルキスト」など思想的なものも目立ち、(1.241) <専門的技術的職業>では、「アナウンサー」「ジャーナリスト」などマスコミ関係の語や「ダンサー」「バーテンダー」など大衆文化の匂いのする語が増加する。「キャバレー」「シアター」「バーラー」といった(1.265) <店・旅館・病院・劇場など>に属する語も現れ、新しい娯楽の場の出現を感じさせる。

(.3) <人間活動>に属する見出し語は、「昭和版」で初めて登録されたものが多数ある。新聞に使用された語の数も、「昭和版」の見出し語として見いだせるものが多数存在しており、(.3)の意味分野全体をほぼカバーしている。その中でも特に多いのは、やはり、(1.3374) <スポーツ>に属する語である。

「大正版」から登録され、新聞に使用されていた競技名に加えて、「スクラム」「タックル」「ヒット」「バント」「ファンブル」といった細かい技術に関する語が、「昭和版」で登録された新聞使用語として多数現れる。また、「ショック(1.3001)」「ユーモア(1.3004)」といった<心>に関する語や、「コンチェルト」「セレナード」「ワルツ」といった(1.3230) <音楽(曲)>および(1.3231) <音楽(演奏)>に属する語も、「昭和版」で登録された新聞使用語である。「ファシズム」「マルキシズム」「シュールレアリズム」など、(1.308) <原理・規則・主義など>に属する語も「昭和版」で登録された新聞使用語であるが、(.3)全体に対する割合としては、「大正版」ほど大きくない。

(.4) <人間活動の生産物>に属する語は、数量的に見れば、見出し語としてコンスタントに登録され、新聞にもコンスタントに使用され、そして定着していった語であると言えよう。「昭和版」で初めて登録された見出し語からも、「大正版」と同数の語が新聞紙上に使用されている。特に、「グライダー」「オートジーロ」といった(1.467) <乗り物(空中・宇宙)>に属する語は、「昭和版」で初めて登録され使用された語である。

(.5) <自然>は、外来語の流入が徐々に減少していった分野と言える。「昭和版」で新たに登録された見出し語も、このうち新聞で使用された語も極めて少ない。食材としての<植物名>に属する語が、追加登録され、使用されてい

る以外は、「ピンク」「ブルー」といった(1.502) <色>に属する語が目につく程度である。これらは、既存の語と重なりながら、微妙なニュアンスの違いを表しているという点で特徴的である。また、音楽に関する「アルト」「テノール」など(1.503) <音>に属する新聞使用語も、「昭和版」の見出し語として初めて見いだせる語である。

以上、それぞれの具体的なリストから目立つものを抜き出して述べた。新聞使用語の散らばりを意味分野という点から見れば、極端に偏っている場合も、部門全体をカバーする場合もある。偏り方にはそれぞれ時代や外来語という語の性格自体を反映した理由がある。が、ある部門における外来語の流入を考えると、流入はまず必要性に迫られたある特定の項目から始まり、一部に偏って使用される傾向が強いと言える。それが、勢力を増すにしたがって全体へと広がり分散していく。分散していきながらも、その中には、時代の要請により流入の中心となる部分が現れる。ただ、一旦中心となっても、その分野の語の充実や時代変化とともに、中心としての役割を担わなくなる場合もあるし、また、中には、特に「もの」に伴う場合は、ある一定の数量が流入し続けることもある。そこには、時代とともに変化しながらも均衡を保とうとすることばのメカニズムが働いていると言えよう。

2-3. 新聞使用語と辞書登録語との比較Ⅱ(延べ語)

2-3-1. 全体的傾向

異なり語で示したのと同様に、どの版のどの部門の語が、調査した新聞紙上で何語使われていたかを、延べ語数で示すと以下ようになる。(〔表4-D〕同様、「なし」の欄には辞書見出し語中に見いだせない語の数を、「その他」の欄には意味不明語および(5.)に分類された語の数を、それぞれ示す。)

[表4-G:新聞使用語(延べ)の構成/部門および登録時期別]

	M→T→S	T→S	S	なし	計
(.1)	1393	493	569	270	2725
(.2)	368	582	558	168	1676
(.3)	279	557	1312	450	2598
(.4)	1111	926	526	224	2787
(.5)	341	123	110	86	660
その他	0	0	0	87	87
計	3492	2681	3075	1285	10533

これを[表4-D(異なり語)]と比較すると、辞書への登録時期が古い新聞使用語ほど繰り返して使用される傾向が強いことが分かる。「明治版」から登録されていた語(M→T→S)と「大正版」から登録された語(T→S)では、「明治版」の語の方が延べの合計が大きく、異なりの合計は「大正版」から登録された語の方が大きい。「昭和版」で登録された語(S)では、異なりの合計が他の二版の倍近くに増加しているのに対し、延べの合計は「明治版」から登録されていた語よりも少なくなっている。どの版にも登録されていない語(「なし」の語)では、この傾向がさらに強くなる。

部門別に見ると、(.1)〈抽象的関係〉では全般に繰り返して使用される傾向が強い。これに対し、繰り返して使用されにくいのは、(.5)〈自然〉である。(.4)〈人間活動の生産物〉もあまり繰り返されない傾向があるが、これは「もの」に伴う語であるだけに、一旦その「もの」が流行すると、集中的に用いられる可能性を秘めている。(.2)〈人間活動の主体〉は、辞書への登録時期の古い新聞使用語では繰り返して使用される傾向が強く、新しい語では弱くなっている。(.3)〈人間活動〉に属する新聞使用語は、登録時期別に見ると、「昭和版」で初めて登録された語(S)では、(.1)(.2)(.4)(.5)よりも(.3)の方が繰り返して使用される傾向が強い。が、逆に「明治版」から登録されていた語(M→T→S)では、(.3)の語はあまり繰り返されない方に属する。

なお、参考のため、頻度1、つまり調査した範囲で1回しか使用されていない語の数を挙げる。次のとおりである。

[表4-H:頻度1の新聞使用語の構成/部門および登録時期別]

	M→T→S	T→S	S	なし	計
(.1)	4	7	28	69	108
(.2)	0	14	32	37	83
(.3)	7	21	54	88	170
(.4)	29	34	39	70	172
(.5)	12	20	14	36	82
その他	0	0	0	43	43
計	52	96	167	343	658

2-3-2. 高頻度語

表Fで示した数値と表Cの数値を比較して、異なり語1語の平均使用度数を計算することも可能であるが、登録時期や部門に分けたため、サンプル数が少なくなってしまう、あまり意味がないと思われる。また、繰り返して使われる語とそうでない語の差も大きいので、ここでは、特に高い頻度で出現する語について述べることにする。

頻度50以上の語を、辞書への登録時期別に挙げると次のようになる。(数字は各語の頻度)

M→T→S

メートル	325	ドル	302	トン	183	クラブ	131
ホテル	114	セント	104	ピストル	99	ガス	81
レース	71	ピアノ	70	ボンド	68	セメント	63
ペンス	61	ガラス	58	ダンス	56	ポイント	51

T→S

ラジオ	206	リーグ	177	レコード	92
ファン	72	プロレタリア	61	スキー	56

S

ニュース	235	インフレーション	75	チーム	74
コース	66	セット	65	スポーツ	64
ナショナル	59	トーキー	55	パーセント	51

最も頻度の高い語は、「メートル」で325回使用されている。他にも、「ドル」「トン」「セント」など、度量衡関係の語にはその性質上高頻度語が多く、これらはほとんど「明治版」から登録されている見出し語である。西洋諸国から新しく入り込んで来た「ものさし」の単位は、既存の語で置きかえられる可能性が小さく、そのままの形で音訳（カタカナ書き）されて使用されたのだろう（注13）。

度量衡以外の語では、「ラジオ」「ニュース」などが目立つ。これは、新聞という資料の性質によるところが大きい。時代を反映した語でもある。「プロレタリア」「インフレーション」「トーキー」など、「大正版」「昭和版」で登録された語には、時代の流れの中で繰り返し使用された語が含まれている。この繰り返しにより、これらの語は時代が変わった後も日本語として生き残っていった。ただし、「トーキー」のように、「もの」に付随する語は、その「もの」自体の消長が語の生き残りに大きな影響を及ぼす。現在「トーキー」は百科事典的な知識として生き残っているにすぎない。

他には、「帝国ホテル」の「ホテル」や「日本チーム」の「チーム」のように、他の語に続いて全体の属する範疇を表すのに用いられる語も高い頻度を示す傾向にある。

2-4. 辞書未登録語の傾向

辞書が使用語彙よりも、理解語彙を基準として編纂されるとすれば、新聞紙上に現れながら、辞書に登録されなかった外来語には、二通りのケースが考えられる。まず、第一が、語が古すぎて死語となってしまうため知識として持つ必要さえない場合、第二が、新しすぎて登録されなかった場合である。

第二の場合は、さらに、時間的に間に合えば登録された語（注14）と、時間的に間に合っても登録されない語に分けられる。時間的に間に合っても登録されない語には、外国語のカタカナ表記、つまり日本語になりきっていない語（注15）や、一時的な限られた範囲での流行語など、辞書に載せるレベルに達していない語が含まれる。外来語では、その数量的な増加傾向から推測しても、第一の場合はあまり考えられない。古い時期に流入した外来語が、古すぎて登録されなくなることはまずなく、むしろ、外来の意識が薄れて出自がわからなくなり、元から日本にあった語のようにふるまう場合の方が多い。

以上から考えると、昭和7年の新聞紙上に現れ昭和9年までに発行された辞書に登録されていない語は、時間的に間に合えば登録された語（いずれ登録されるであろう語）と、外国語のカタカナ表記に分けられるであろう。これらの語は、具体的にどのような傾向を示しているのだろうか。

異なりおよび延べの数は、先に示したとおりである（〔表4-D〕・〔表4-G〕参照）。辞書未登録語の異なり（〔表4-D〕の「なし」の欄）では、(3)〈人間活動〉の属する語が最も多く、ついで(1)〈抽象的關係〉、(4)〈人間活動の生産物〉、(2)〈人間活動の主体〉となっており、最も少ないのが(5)〈自然〉である。これは、延べ（〔表4-G〕の「なし」の欄）でも同じ順位であり、ともに〈人間活動〉と〈抽象的關係〉に属する語の勢いが強く、〈自然〉が弱いことが見て取れる。

辞書に登録されていた語（本章「2-2」「2-3」で考察した語）では、登録された版別の異なりの語数と延べの語数で、増減の傾向は同じであっても、順位までぴったり一致することはまずない。異なりの語数は少ないが繰り返し使用されるため延べの語数は非常に多くなったり（〔表4-D〕と〔表4-G〕の「M→T→S」の(1)など）、また、その逆だったりする。辞書未登録語は、異なりが多ければ、全体としての使用回数（つまり延べ）も増えるという特徴を示しており、これは頻度1の語が異常に多いこと（〔表4-H〕の「なし」参照）に起因している。各部門の異なりの全体に対する頻度1の語の割合は、辞書登録語ではほぼ30%程度になっているのに対し、未登録語では(1)〈抽象的關係〉、(4)〈人間活動の生産物〉、(5)〈自然〉で60%を超えている。

逆に、100を超えるような超高頻度の語はなく、頻度24が最高である。頻度

10以上の辞書未登録語語を示すと以下のようになる。(意味の把握を容易にするため、適宜解説をつけた。各語の後の数字は頻度を示す)

コンディション	20	ビクル(=通貨単位)	19
モスキート/型飛行機	19	サロン(=腰巻)	14
トップ	12	シティ	11
ザット	10		
クルー	24	ボレー	19
フォア(=4人乗りボート)	18	ウエート(=級)	16
ブレイブス(=チーム名)	15	ウェルター/級	15
エイト(=8人乗りボート)	15	マッチ(=試合)	14
フルート	14	ライト/級	13
フェザー/級	13	バンタム/級	12
オリンピック	11	スマッシュ	11
フライ/級	10		

後半の「クルー」から「フライ」までは、すべてスポーツ関係の語である。特に拳闘と競漕に関する語が多い。対して、前半はスポーツと特に関係しない語であるが、「コンディション」「トップ」などは、スポーツ関係の記事でも盛んに用いられていた。外国語のカタカタ表記であろう「ザット」や、「もの」が無くなれば使われなくなりそうな「モスキート」、同様にチームが解散すればなくなりそうな「ブレイブス」などは別として、これらの語は、繰り返して使用されることにより、日本語として熟していく語である。そしてその成熟過程では、当時急速に普及したラジオのスポーツ中継の影響が大きく現れる(注16)。

3. 外来語のその後

ことばの未来を予測することは難しい。ほとんど不可能であろう。が、過去の資料をもとに推測し、それを検証することはできる。

本章で行った考察の結果は、大筋では今までの筆者の論を裏付けるものであったが、特に異なりと延べを比較することにより、次のような傾向を指摘することができると思う。

(.1) <抽象的關係>では、まず、既存の語で置きかえられない度量衡関係の語を中心に流入し、集中的に使用されている。度量衡関係以外の語の流入はやや遅れて始まり、急速に増加し、本稿で対象とした期間の後も増加しつづけような勢いを見せている。

(.2) <人間活動の主体>も増加している。が、辞書に未登録の語では、その勢いが衰えている。これは、「スター」「タイピスト」など一語で職業等を表す語の流入の勢いがある程度おさまり、「チーム」「ガール」など既存の語でも言い換え可能な語が増加したことと関係するかもしれない。「モダンガール」を代表とする「ガール」は、外来語の目新しさに時代性という付加価値が付き、「何番ガール(電話交換手)」や「わんさガール(その他大勢の女優・踊り子)」などという複合語を多数生み出している(注17)。これらは、核となる語を中心に、複合語の形で増加していくため、必ずしも外来語(異なり)の増加にはつながらない。

(.3) <人間活動>の語も増加し続けている。特に昭和になるとスポーツ関係の語が増加するが、こうしたスポーツ関係の語を除くと、全体的な伸びはその後ややにぶくなっていくようにも見える。

(.4) <人間活動の生産物>は、外来語として入り込む語の代表である。まず、「もの」に伴って入ってくるという原則どおり、特に早い段階で大きな割合を占めている。その後もほぼ一定の量で入ってくるが、「もの」の流入にはある程度限度があるため、爆発的な増加はしない。むしろ、概念として入ってくるものの勢いに比べると割合としては減少する。が、量的にはこのまま一定量流入し続けるであろう。

(.5) <自然>は、既存の語で言い換えられない化学関係の語を中心に早い時期に流入した。その後は、食材などの名を中心に追加されているが、全体的に流入の勢いはなく、先細りの観がある。

以上を大きくまとめると、(.2) <人間活動の主体>は減少傾向、(.3) <人間活動>も勢いが鈍る、(.4) <人間活動の生産物>は量的に一定して入り込み、

(.5) <自然>はこのまま勢いのない状態が続く、そして、増加するのは(.1) <抽象的關係>、つまり、(.2)~(.5)を規定する「枠組み」に関する語であろう。と推測される。が、この推測を検証するのに、これ以降の社会情勢は、やや特殊すぎると言わざるをえない。やがて敵性語として弾圧されるなかで、なおも生き残っていく外来語の実態と、本章での考察結果はどう関係していくのであろうか。

注

(1) 国語辞典における見出し語の登録ということについて、松井栄一は、「規範性と資料性」という観点から、以下のように述べている。

……確かに辞典には規範性というものが多少とも入ってくるし、また、それが求められもする。しかし、文献などの用例が示せない語で辞典が見出しに立てるのは、それが一時的、流行的、個人的な域を脱して一般に定着してきたと見られる場合であり、もう使ってもよいというような価値判断とは必ずしも結び付かない。編者としてはあまり使ってほしくないと思っても、その表現が広く使われるようになってくれば見出しに立てざるを得ない。」(『国語辞典にない言葉』南雲堂1983下線引用者)と述べている。

(2) この中には、辞書との比較の関係上、次のものは含んでいない。

1. 新聞使用形「X」に対し、「X+α」の形でのみ辞書に登録されている語。

ex. 新聞使用形 「オリンピック」

辞書見出し語「オリンピック競技」

(「オリンピック」という見出し語はない)

2. 新聞では短縮形だけが現れるのに対し、辞書への登録は原形でなされており、その短縮形が示されていない語。

ex. 新聞使用形 「オルグ」

辞書見出し語「オルガナイザー [Organizer] (名) 【社】社会運動にて、未だ何等の組織をも有せざる無産者の集団に加はりて、これに一定の組織を與ふる前衛分

子又は指導者。」

「昭和版」

(「オルグ」という見出し語はなく、「オルガナイザー」の語釈にも「オルグ」という短縮形が示されていない)

3. 見出し語として登録されてはいるが、原語は示されていない語。

ex. 新聞使用形 「ズボン」

辞書見出し語「ずばん(名) 洋服にて、腰部以下を蔽(オホ)ふもの、形股引様のもの。」

「昭和版」

これらは、数は少ないが様々な要素を含んでおり、一面的に傾向を捉えることは難しい。改めて考察する必要がある。

(3) 大正11年朝日新聞社発行の『運動年鑑』で、東口眞平氏は次のように述べている。

アスレチックは過去二三十年間に驚くべき普及をなしたのであつて、其あまりに急激であつたところから、或は途中に於て多少の動揺は免れなかつたにしても、少くとも現在に於て全世界を通じ、益健実に発達しつゝある事は確かである。……翻つて我国の現状を見るに、二十年のハンデキャップがあると称せられてゐる我が国の競技界も、国民の研究のしやう努力のしやう如何では、永い年月を待たないで優に世界の一流選手と比肩し得べき良選手を出す事が出来るに違いない。……我国の競技界に取つて刻下の急務と思はれる事は、全日本を完全にコントロールする団体の出現する事と、組織の完成とである。

これにより、世界に追いつこうと、組織化を急ぐ日本のスポーツ界の様子が知られる。「～連盟」のような全国組織が出来上がることにより、それぞれのスポーツ用語が規定され、全国に広まることを考えると、組織化と普及は、単にスポーツ界だけの問題だけではなく、ことばの問題としても重要な意味を持つ。また同様に、朝日新聞というマスコミがこうした刊行物を発行していたことも、スポーツとマスコミの関わり的一端を示し、興味深い。

(4) 昭和初期の競技スポーツの状況について、水野忠文・木下秀明・渡辺融・木村吉次共著『体育史概説—西洋・日本—』(体育の科学社1966)には、次の様な記述がある。

前期につづき、競技スポーツはますます活発化し、その最盛期を迎える。

すなわち、発足の遅れたいくつかのスポーツも1930年代に学生を主体とする競技組織を確立し、対校競技は応援を含めますます盛大となる。早大球場では野球・ラグビーの初ナイターがあり(引用者注:1933=昭和8)、ベビーゴルフなど手軽なスポーツが流行する。

また、スポーツとマスコミの関係について、米川明彦氏は、「近代における外来語とスポーツ—その定着過程—」(『論集日本語研究(二)』明治書院1986)で次のように述べている。

このようにスポーツが隆盛すればマスコミが注目するのは当然である。朝日新聞は大正五年五月に『野球年鑑』を発刊し、後にこれを『運動年鑑』と改称した。さらに新聞に運動欄を設け、大正一二年三月には『アサヒスポーツ』を発行した。NHKのラジオ放送は大正一四年に始まるが、昭和二年八月一三日に甲子園中等野球中継放送を開始した。

(5) スポーツ関係の語かどうかの判断基準としては、荒川惣兵衛著『角川第二版外来語辞典』の注記を参考にし、筆者自身で判断した。よって、厳密な判断とはいえないものもある。

(6) 語を品詞別に分類するにあたり、林大氏は『分類語彙表』(『国立国語研究所資料集6』1964)の中で、「体・用・相・その他」の4分類を用いている。「体」は事柄を、「用」は変化・存在を、「相」は様子・ありさまを、「その他」は文の接続等を示すものである。詳しくは、第3章を参照のこと。

(7) 内訳は次のとおり(アンダーラインはスポーツ関係の語)。

M→T→S(「明治版」から登録されていた新聞使用語)計4語

サ変: アウト キス フライ ボイコット

T→S(「大正版」から登録された新聞使用語)計18語

サ変: カット シーソー スケッチ スタート ダンピング チェック
デザイン ノック バス ラブ リレー

形動: シャン (超)スピード センチメンタル ダブル デリケート
ポピュラー ロマンチック

S(「昭和版」で初めて登録された語)計51語

サ変: アナウンス カバー カムフラージ キャッチ キャンピング
コントロール サービス スコア スチール ストップ

スパイク タックル タッチ デビュー トライ ドライブ
ドロップ ネット バント ヒット フェウル フェンブル
プレゼント ポーズ ポーチ マスター リード

形動: エキセントリック エキゾチック オリジナル

グロテスク/グロ コンスタント シック シャープ
スリット スマート スロー ダイナミック ダッシュ
ドメスティック ドラマチック ナーバス ナイーブ
ナンセンス ノーマル パー フラット フレッシュ
メランコリー モダン ユーモラス

以上が「用」「相」の語として使用されていたものである。なお、辞書に登録されていない語では次のようになっている。

辞書未登録語 計22語

サ変: アクセンチュエート アッコイ アピール インターフェース
キーズ コンボーズ シュート ジャスティファイ
スマッシュ セーブ ターン ディスクォリファイ プオール
ブッシュ ボン リリース ロブ

形動: アクチュアル シュア スムーズ ドラスティック
フレキシブル

なお、これらはいくまでも対象とした調査範囲で使用例があるかないかということであり、現在の語感とは一致しないものもある。

(8) こうした現象に対する批判は、スポーツ界内部でも行われていた。例えば、吉田章信氏の『スポーツの話』(『現代生活叢書第四編』帝国教育会出版部1929)には次のような記述がある。

スポーツにしても同様で、世界的交際を一の使命とするものであるから、スポーツの種目、その競技上の規則、その実行方法等、我侪勝手のことは出来ないわけで、必要なだけは国際的であらねばならぬことは言ふまでもないのである。

併しながら国際的であれと云ふことは、真似なくてもよいことまで、軽薄に外国の真似をし、碌に英文が読めないくせに、無暗に外国の英語をふりまはして先覚者ぶり、何等我が国の国情や伝統を考へないという様な浅

薄なハイカラをせよと云ふのではない。……スポーツ家が、深く国粹を考へてゐる人等から、不快に思はれたのは、かゝる事が余程禍してゐる。……文部省では、最近出来得るだけスポーツの術語を邦語で示すやうにしてゐるが、当然といはなければならぬ。

これはまた、国際化と国粹主義の関係、それに果たしたスポーツの役割を考える上でも示唆的な一文であると言えよう。

(9) 本章では、生の資料を扱った関係上、「ザ」などの冠詞や「オブ」といった前置詞を分類するために、(5.)を新たに設け、全部で5類としたことを付け加えておく。但し、(5.)に分類された新聞使用語は極めて少なく、異なり語で9語、延べ語でも30語しかなかった。よって、考察の際には外して考えることも多かった。

(10) この表には、「明治版」のみの登録に終わった語23語、「大正版」のみの登録であった語23語、「明治版」と「大正版」で登録され「昭和版」で抹消された語14語も含まれている。

(11) (2) <人間活動の主体>は単純な数量としては増加しているが、外来語全体の増加の勢いからすると弱く、割合としては「昭和版」では減少に転じている。

(12) 明治前期においては、外来の概念事物を漢語訳したり、漢字音で表したりする努力が払われていた。

(13) 「噸(トン)」「甁(ミリグラム)」などの漢字も時々用いられたが、かえって難しくなるためか、「米(メートル)」など簡単なものを除き、盛んに用いられることはなかった。

(14) 登録されるまでのタイム・スパンについては、第1章を参照のこと。

(15) 当時の新聞はいかに早く伝えるか、スピード競争の時代であった。外電からの訳文の中には時として「ディスクオリファイされた」のような言い回しがある。

(16) 米川明彦氏「近代における外来語とスポーツーその定着過程ー」(『論集 日本語研究(二) 歴史篇』明治書院) 1986

(17) 1930年12月の『中央公論』には次のようなエピソードが紹介されている。
東洋一を誇る某大印刷会社の職長の話すところによれば、鋳造しても鋳造

しても、すぐにまた不足をつける二つの活字がある。それは「女」と「階」の二字であるが、殊に前者に対する需要は最近急激に増大し、一万個のストックが大抵いつでも、すっかり出払ってしまつてゐるということである。中村政則氏によれば、「女」の活字は「女給」「女史」「モダン女性」などモダニズムとエロ=グロ=ナンセンスとに関係がある(第1章の注(11)参照)」ということである。

第5章 意識語と外来語

本章では、日本語の中に取り入れられた外来の概念事物（ここでは原語をほぼこれに宛てる）が、対応する訳の違いによって、日本語の中での機能にどのような差を生じていくのか、特に、訳し方（意識・音訳）の違いと意味との関係に注目しながら見ていく。なお、本章「1」で詳しく述べるように、ここで主として用いる単位は、原語の一語一語とそれに対応する訳とする。このため、辞書の見出し語の中には二つ以上に分割されるものもある。また、これまでの論では、原語の付された和語および漢語による見出し語を意識見出しと呼び、主に西洋起源の語でカタカナ書きされた見出し語およびカタカナ部分を含む見出し語を外来語見出しと呼んできたが、本章ではそれに準じて、原語の一語一語に対応する和語および漢語をまとめて意識と呼び、同様に原語の一語一語に対応する外来語を音訳と呼ぶことにする。和語による訳はそれ独自の興味深い問題を多々含んでいる（注 1）が、本章では、論を進める上で特に取り立てて扱うことはしなかった。

1. 意識と音訳の数量的変化

「明治版」「大正版」「昭和版」より、意識見出しおよび外来語見出し（注 2）を抽出し、複数の版にまたがって登録されているものを一つにまとめて、三版全体の異なり見出しを抽出した。結果、意識の異なり見出しは「大正版」の意識見出しとほぼ重なり、外来語の異なり見出しは「昭和版」の外来語見出しとほぼ重なった。

さらに、これらを、それぞれに付された原語を基準として、原語の語ごとに対応する単位に分けた。意識見出しと意識、外来語見出しと音訳の対応関係は、例えば、次のようになる。

《意識見出し》	《意識》の1単位
さんぎょう [産業=Industry]	→ 産業 [Industry]
かない・こうぎょう [家内工業=House industry]	→ 家内 [House]
	工業 [Industry]

《外来語見出し》	《音訳》の1単位
エアー [Air]	→ エアー [Air]
エアー・ポケット [Air-pocket]	→ エアー [Air]
	ポケット [Pocket]

もちろん、すべての原語が逐語訳されているわけではなく、

えんぴ・ふく [燕尾服=Evening coat] (名) 西洋服の礼服、黒羅紗にて製す、二重胸にして、上着の下腹のあたりより前をかきおとし、後は割れて燕の尾の如し、故に此名あり。 「大正版」

のような訳され方をしているものもあった。よって、単純にばらばらと切り離して扱うのではなく、一つ一つの見出し語全体を視野に入れながら、部分ごとの対応関係を考えるよう努めた。先に示したように、その結果得られた、原語に対する和語および漢語の一つ一つを意識と呼び、外来語の一つ一つを音訳と呼ぶことにする（注 3）。

これを、原語を基準にしてまとめ直し、原語に対応する意識・音訳が、それぞれに、どのような形式の見出し語をいくつ構成しているかを一覧にしたのが [表5-A-1] および [表5-A-2] である。

表の「独」「合」は、それぞれ、原語が一語だけで見出し語と対応しているか、二語以上で対応しているかの別を示す。例えば、原語 [Spirit] について考えてみる。原語 [Spirit] を含む意識見出しとしては、

ぐんしゅう・しんり [群衆心理=Mob spirit] (名) 多人数の集合せる場合に、各個人の反省力を喪ひて感情的となり、他に雷同し易き心理作用。

「大正版」

しりょう・しゅうはい [死霊崇拜= Spirit worship] (名) 人類の靈魂は
 肉体以外に独立して存在し、肉体の死後にはいはゆる死霊となりて自由
 に活動し、他人に対してよく禍福をなすと信じ、これを崇拜する宗教上
 の行事。 「大正版」

せいらい [聖霊= Holy spirit] (名) 「キリスト」教にて、神の第三人
 格たる神の靈にして、人に宿り神意の啓示を感じ、精神的活動の鼓吹力
 となるもの。 「大正版」

の三つが存在している。この場合、[Spirit] が単独で対応する見出し語はないので、「独」は0の欄となり、二語以上の形、つまり他の原語とくっついた [Mob spirit] [Spirit worship] [Holy spirit] という形で、三つの意識見出し「群衆心理」「死霊崇拜」「聖霊」と対応しているので「合」は3の欄となる。よって、[表5-A-1(意識に対応する原語)] では、[Spirit] は、「独」の0と「合」の3がぶつかるところに配当される。つまり、その箇所に示された数値 117、117語のうちの1語が [Spirit] である。一方、[Spirit] の外来語見出しは、

スピリット [Spirit] (名) 精神、靈魂。 「大正版」

スポーツマン・スピリット [Sportsman spirit] (名) スポーツマンシ
 ップ。 「昭和版」

タイム・スピリット [Time spirit] (名) 時代精神。 「昭和版」

の三つである。[Spirit] という単独の形で、「スピリット」という見出し語と対応しているため、「独」は1の欄となり、他の原語とくっついた [Sportsman spirit] [Time spirit] という形で、「スポーツマン・スピリット」「タイム・スピリット」という二つの見出し語と対応しているため、「合」は2の欄となる。つまり、[表5-A-2(音訳に対応する原語)] の、「独」の1と「合」の2がぶつかるところ、160語のうちの1語として、音訳に対応する原語 [Spirit] が分類されることになる。以下、意識・音訳それぞれについて

表5-A-1: 意識に対応する原語
 -対応する意識見出しの数別-

	0	1	2	3	4	5	計
0		1141	79	11			1231
1	1064	169	16	2	1	1	1273
2	277	82	9				368
3	117	42	5				164
4	58	35	5	3			101
5	36	21	3				60
6	21	18	5	1			45
7	14	9	2	1			26
8	10	6	1				17
9	4	5	3				12
10	4	2					6
11	4	4	1				9
12	1	4					5
13	4	2					6
14	1	2					3
15	1	2			1		4
16	2						2
17	3	1					4
18	2						2
19		1					1
20	2						2
21	1						1
22							0
23							0
24							0
25							0
26							0
27	1						1
28	1						1
29		1					1
30							0
31		1					1
32							0
33							0
34							0
35							0
36							0
37							0
38							0
39		1					1
計	1648	1549	129	18	2	1	3347

表5-A-2: 音訳に対応する原語
 -対応する外来語見出しの数別-

	0	1	計
0		2208	2208
1	511	341	852
2	92	160	252
3	29	87	116
4	9	37	46
5	5	31	36
6	4	14	18
7	4	12	16
8	1	11	12
9		7	7
10		4	4
11		8	8
12	2	3	5
13		2	2
14			0
15		3	3
16		1	1
17		1	1
18		3	3
19		1	1
20			0
21		1	1
22		1	1
23			0
24			0
25			0
26			0
27			0
28		1	1
29		1	1
30		1	1
56		1	1
計	657	2937	3597

※独: 原語が一語だけで対応している見出し語。 ex. [化学=Chemistry]
 合: 原語が二語以上で対応している見出し語。 ex. [化学符号=Chemical symbols]

て原語ごとに同様の作業を繰り返し、それぞれの欄に何語の原語が属するかを示したのが [表5-A-1] および [表5-A-2] である。

[表5-A-1] の「独」の欄が、0から5までであることから分かるように、意識では、一つの原語が複数の訳に対応するということがままある。例えば、原語 [Contact] を含む意識見出しは、

こんせん [混線=Contact] (名) 電信・電話等の架線と互に相接着して彼我の電流相混じ、一回線に於ける信号又は通話の他の回線にあらはるること。 「大正版」

しょくはつ・すいらい [触発水雷=Contact mine] (名) 防御水雷の一、防御又は封鎖せんとする港湾・河口等の水中に、鍾量と繫維索とを以て一定の位置に布設せられ、艦船の接触によりて爆発するもの、…… 「大正版」

せつしょく・へんしつ [接触変質=Contact metamorphism] (名) 【地】火成岩と接触して生じたる岩質の変化、一般に火成岩に接したる水成岩は外見上硬度・色澤等を変化すること多く、…… 「大正版」

となっており、原語 [Contact] は、三つの意識見出しを構成し、同時に「混線」「触発」「接触」という三つの意識と対応している。これは、意味を担う文字を用いて訳されることにより、初めて可能となることである。

また、意識見出しの原語は二つ以上に分けられる場合が多い。言い換えれば、意識(一つ一つの原語に対応する和語・漢語)は二つ以上で見出し語と対応する傾向が強い。例えば、原語 [Power(s)] は、単独で、

けんげん [権限=Powers] (名) 【法】或人が他人のために法律上の行為をなし得る権能の範囲、…… 「大正版」

こうりつ [工率=Power] (名) 【理】器械が毎単位時間になす仕事。 「明治版」

べき [冪] (名) ……4. [Power] 【数】等しき数の相乗積、等しき数m個の相乗積を其数の第m冪といふ…… 「大正版」

べきすう [冪数=Power] (名) 【数】等しき数の相乗積即ち冪。

「大正版」

という四つの意識見出しと対応し、さらに、他の語といっしょになった形で、

かいじょう・けん [海上権=Sea Power] (名) 海上を制御する権力。軍事・通商・航海等に関して海上に有する実力。 「大正版」

かくだい・りつ [拡大率=Magnifying power] (名) 【理】「レンズ」其他光線の研究用器械の物体の見ゆる大きさを拡大する割合、…… 「大正版」

けんいん・りょく [牽引力=Hauling power] (名) 車両を運転する原動力の車両を牽引し得る力。 「大正版」

げんどう・りょく [原動力=Prime motive power] (名) 1. 【理】物体又は器械をして運動を起こさしむる「エネルギー」、…… 「大正版」

こうべき [降冪=Descending power] (名) 【数】種々の冪を有する同一なる文字の多くの項より成る式に於て、其最大冪の項より順次に低き冪の項を下方より列ねたる数式。…… 「大正版」

さんけん・ぶんりつ [三権分立=Separation of the three powers] (名) 立法・司法・行政の三権を各分立の機関に分属せしめて権力の濫用を防ぎ、人民の自由を保護せんとする説、…… 「大正版」

じっこう・ばりき [実効馬力=Effective horse-power] (名) 外部の仕事に使用し得べき正味の馬力。 「大正版」

しょうべき [昇冪=Ascending power] (名) 【数】同一文字の種々の冪を有する多くは項より成る式に於て、其最も低き冪の項を右方に列ねたるもの、…… 「大正版」

せいこう・けん [制空権=Air power] (名) 一区画の空中を一國の航空機によりて支配すること。 「大正版」

せいりょく・きんこう [勢力均衡=Balance of power] (名) 外交上に於て、各國間に適当に勢力均衡を維持し、いづれの國にも他國を強制的に其意志に従はしむるが如き勢力を取撓するを許さざること、……

「大正版」
 せんこう・せい【旋光性=Rotatory power】(名)【理】物質により偏光
 を通過するとき其偏平面を回転せしむる性質、…… 「大正版」
 どうりよく【動力=Motive power】(名)【理】機械的仕事をなし得る能、
 馬力を単位としてこれを測る、…… 「大正版」
 はつでん・しょ【発電所=Electrical power plant】(名)原動機及発電
 機等を設備し電気を発生して電流を他に発送する所、…… 「大正版」
 ばりき【馬力=Horse power】(名)【理】(一匹の馬にてなす力の義)
 工率の単位、…… 「大正版」
 りき・しょつき【力織機=Power loom】(名)水力・汽力乃至電力を用ひ
 て製織の動力となす装置の織機。手織機の対。 「大正版」

という15の意識見出しに対応している(注4)。他の語といっしょになった形で
 見出し語と対応する傾向が強いということは、[表5-A-1]の「独0(原語
 一語だけで対応する見出し語がない)」の欄の合計数が1,648語と、全体3,3
 47語のほぼ半分を占めていることにも表れている。「独0」であるということ
 は、原語一語だけで意識見出しと対応することはないが、他の語といっしょに
 なった形ならば対応するということである。こうした一語で見出し語と対応す
 ることのない、独立性の弱いものが、意識された原語全体の約半分を占めてい
 るのである。

これに対して、音訳は、音を写すという方法を取るため、当然ながら、一つ
 の原語が複数の外来語見出しに対応するということはずまない(注5)。「Pump」
 は「ポンプ」という見出し語だけに対応し、「League」は「リーグ」だけに対
 応する。よって、[表5-A-2]では、「独(原語一語だけで対応する見出し
 語の数)」は0か1ということになる。

意識の場合と異なり、音訳の場合は、原語二語以上で一つの外来語見出しに
 対応することは少ない。原語一語で一つの外来語見出しと対応し(「独1」)、
 しかも、他の語といっしょになり、原語二語以上で対応する外来語見出しはな
 い(「合0」)という独立性の強いものが圧倒的に多く、2,208語となっている。
 一方、他の語といっしょになった形でだけ外来語見出しに対応する原語の

数(「独0」)は合計でも657語と、音訳された原語全体3,597語の20%にも
 満たない。

以上より、意識された原語は、二語以上で意識見出しと対応することが多い
 のに対し、音訳された原語は、一語で外来語見出しと対応する傾向が強いとい
 うことが言えよう。こうした傾向は、原語が意識・音訳される過程で生じる意
 味のずれとどのように関係しているのであろうか。以下、訳し方の違いと意味
 の関係について探ってみることにする。

2. 訳し方の違いと意味

ここでは、意識・音訳の違いや、その登録時期の違いにより、意味の面でど
 のような特徴が見られるかを中心に論を進める。このため、いろいろな偏りが
 見られる最低数を3と考え、対応する見出し語が3語以上ある原語を分析の対
 象とした。結果、対象となったのは、原語の数で1,000語、訳の延べの語数に
 して、意識6,569語(うち和語訳は218語)、音訳4,150語、計10,719語、で
 ある(注6)。対象となったものの中には、

ちゅうしょう【抽象=Abstract】
 ふ・めいすう【不名数=Abstract number】
 アブストラクト【Abstract】

の【Abstract】のように、対応する訳として、意識と音訳が混在しているもの
 や、

いど【緯度=Latitude】
 いど・へんか【緯度変化=Latitude variation】
 ちしん・いど【地心緯度=Geocentric latitude】

の【Latitude】のように、訳が固定しているものも含んでいる。訳の種類が異
 なるが、全く一つの語に固定していようが、ともかく、3語以上の見出し語

と対応する原語は全て分析の対象とした。なお、以下の論で、単に「原語」と述べた場合は、3語以上の見出し語と対応する原語を意味するものとする。

2-1. 意識に限られる原語

対応する見出し語が3語以上あり、その全てが意識見出しである原語を抽出した結果、292語が得られた。その内訳は《資料2-1》として巻末に付したとおりである。この292語の原語を、その訳がいつ、どのような意味分野の語として登録されたかによって分類したのが、[表5-B-1]である。

[表5-B-1]の作成にあたり、二版以上にまたがって同じ原語に対応する見出し訳が追加登録されているような場合は、次のように分類した。例えば、原語[Lime]に対応する見出し語は次の三つで、

せっかい【石灰=Lime】(名)水酸化「カルシウム」。いしばひ。

「大正版」

ソーダ・せきくわい【ソーダ石灰=Soda-lime】(名)【化】苛性曹達と生石灰との融合物。

「明治版」

ふうか・せっかい【風化石灰=Airslaked lime】(名)生石灰を永く空气中に曝しておくとき、空气中の水分と炭酸瓦斯とを吸収して、自然に崩壊して成りたる粉末。ふけばひ。

「大正版」

となっている。「ソーダ石灰」が「明治版」で登録され、「石灰」と「風化石灰」が「大正版」で追加登録されているが、この場合、新たに登録された数が多い方(この例では「大正版」の方)に登録の中心があると見なし、「mT」に入れた。「mT」は、「明治版=m」と「大正版=T」で訳が登録され、大文字で示された「大正版=T」の方でより多くの新しい訳が登録されたということの意味する。他のアルファベットも、同様にして読む。なお、二版以上にまたがって見出し語が追加登録されている場合、「明治版」で2語登録され、「大正版」でも2語追加登録されたような場合は、優先順位を、辞書自体の大きさを考慮して、規模の小さい順に、「明治版」「昭和版」「大正版」とした。

こうして各版に原語を分けた後、さらにそれらを『分類語彙表(注7)』に基づき意味分野の大きな枠の中に分類した(注8)。なお、訳は、基本的に名詞の形で機能するため、ここでは、品詞論的分類にあたる「体の類」「用の類」「相の類」の枠は取り外し、以下便宜的に、(.1)＜抽象的關係＞・(.2)＜主体＞・(.3)＜人間活動＞・(.4)＜生産物＞・(.5)＜自然＞と呼ぶことにする。また、この他に『分類語彙表』では(.4)＜その他＞が設けられており、いわゆる接続詞や感動詞、ある種の副詞が含まれている。が、ここに属するのはごく少数であったため、本章では、取りあえず、適宜(.1)～(.5)にあてはめて考えておくことにする。

[表5-B-1]を見て明らかのように、意識は「大正版」を中心に登録され、「大正版」ではほぼ登録が終了している。「Mts(「明治版」で多数登録され「大正版」「昭和版」でも少数追加登録されたもの)」や「mTs(「明治版」で少数登録された後「大正版」で多数追加登録され、「昭和版」でも少数追加登録されたもの)」「Ts(「大正版」で多数登録され、「昭和版」で少数追加登録されたもの)」のように、「昭和版」で訳が少数追加登録されたものはあるが、「昭和版」を登録の中心とする原語はない。「明治版」を登録の中心とする原語(「M」「Mt」「Mts」にあてはまる原語)も極めて少ない。意識は「大正版」において急増しており、特に「T(「大正版」で登録され、その後追加登録されなかったもの)」は233語ある。これは、「大正版」を登録の中心とする原語全体282語の80%以上、意識に限られる原語全体292語の約80%を占めており、全体の趨勢を決定付けている。

表5-B-1: 意識に限られる原語の数
—登録時期と意味分野別—

版 意		.1	.2	.3	.4	.5	計
明治版	M	0	0	0	0	2	2
	Mt	3	0	1	0	3	7
	Mts	0	0	0	0	1	1
	小計	3	0	1	0	6	10
大正版	mT	12	1	9	2	14	38
	T	93	3	46	19	72	233
	mTs	1	0	0	0	1	2
	Ts	3	0	4	0	2	9
小計	109	4	59	21	89	282	
計	112	4	60	21	95	292	

ex. Mt : 「M=明治版」でより多く登録されており、「t=大正版」で少数追加登録されているもの。(詳しくは《資料2》の凡例を参照のこと。)

意味分野別の構成を見ると、「明治版」を登録の中心とする原語は10語とわずかであるが、そのうち6語は(.5)＜自然＞に属する語、しかも化学関係の語で占められている。これらは、比較的早い段階で化学に関する知識として入り込み、意識として定着したものであろう(注9)。

「大正版」を登録の中心とする原語(「mT」「T」「mTs」「Ts」)の中では、圧倒的に(.1)＜抽象的關係＞に属する語が多くなっている。抽象的關係、つまり、あり方のわく組みに関する語は、他の語といっしょに使用され、その語のあり方を規定すると考えられる。これは、後に詳しく述べる音訳の場合と異なる点である。次に多いのが、(.5)＜自然＞に関する語である。これには、「明治版」を登録の中心とする原語同様、化学関係の語が多い。加えて、「大正版」を登録の中心とする原語の特徴として、[Flower(s) (花)] [Soil (土)] [Wind (風)] といった既存の語と重なる、極めて基本的な語が増加している。翻訳が新しい概念事物を日本語の中に取り入れるための手段であるとすれば、「花」「土」「風」といった語が、訳として単独で日本語の中に入り込む可能性は低い。これらは、他の語といっしょになり、「りょうせい・か [両性花=Bisexual flower]」「しょくど [埴土=Clay soil]」「ふうあつ [風圧=Wind pressure]」など、科学に関する語として入って来るのが一般的である。以上のように、あり方を規定する(.1)＜抽象的關係＞に属する語や、(.5)＜自然＞に属する基本的な語が多いという特徴は、本章「1」で指摘した、意識は二語以上いっしょになった形で意識見出しを構成することが多いという現象と相通じるものである。

意識に限られる原語全体では、(.1)＜抽象的關係＞と(.5)＜自然＞に属する語が多いのに対して、(.4)＜生産物＞に属する語は少なく、(.2)＜主体＞は極端に少ない。なお、「大正版」で(.2)＜主体＞に分類された4語は、[Alliance (同盟)] [Colony(s) (植民地)] [Public (公)] [State (国家)] であり、これらは全て、個々の人間自身ではなく集団を指す語であった。

2-2. 音訳に限られる原語

音訳に限られる原語に関しても、意識に限られるものと同じような手続きを

踏んで分類した。[表5-B-2]である。その内訳は、巻末の《資料2-2》を参照されたい。[表5-B-2]において、それぞれの版に登録の中心を持つ語が何語あったか、各版「小計」に基づいて比較すると、「昭和版」を登録の中心とする原語が102語と最も多く、「大正版」が最少となっている。これは、ちょうど意識に限られる原語の逆である。あたかも、意識の勢力と音訳の勢力は押しつ押しされつ陣取りをしているようにも見えるが、その内容はどうか。版ごとに、どのような特徴があるかを見る。

「明治版」に登録の中心をもつ原語(「M」「Mt」「Ms」「Mts」)には、(.4)＜生産物＞に属するものが34語、(.5)＜自然＞に属するものが23語と多くなっている。この二つの意味分野には、ともに化学関係の語が多数含まれている(注10)(注11)。また、(.2)＜主体＞に属する語が7語あるが、これらはすべて国や地域の名である(注12)。その一つ[America(n)]は、「アメリカ後家(ごけ)」「アメリカ松」「アメリカ撫子(なでしこ)」「アメリカ萩」という見出し語を作り出している(注13)。このうち、「アメリカ撫子」の場合、その語釈は、

アメリカ・なでしこ【亞米利加撫子】(名)【植】石竹(セキチク)科の多年生草木、「ヨーロッパ」の原産にして、近來我國に移植す、莖の高さ一尺許、葉は卵状披針形にして尖頭、葉脈五條あり、花頗る美麗なり。

となっている。「アメリカ」は、個別の国名というよりは、広く西洋一般を指す語として用いられているようである。西洋を表す語としてどの国の名が用いられるかは、時代とともに変化しているが、ここで「アメリカ」が用いられているということは、英語教育の普及の仕方を考える上で、おもしろい現象と言えよう。

「大正版」の外来語見出しの登録数自体は、「明治版」の1,140語から2,477語へと増加しており(注14)、1,000語以上が追加登録されている。辞書の見出し語全体に占める外来語見出しの割合も、1.35%から1.97%へと伸びている(注15)。にもかかわらず、登録の中心がどこにあるかに基準をおいて分類すると、音訳に限られる原語の場合、「大正版」に登録の中心を持つもの(「mT」

「T」「mTs」「Ts」)は、「明治版」に登録の中心を持つもの(「M」「Mt」「Ms」「Mts」)よりも少なくなる。つまり、「大正版」において音訳は、追加して登録され続けているが、登録の中心となることは少ないということになる。これは、意識が「大正版」で、多数の新しい見出し語を生み出す機能を果たしていることと裏返しの関係になっている。意味分野別に見た割合は、相変わらず(.4) <生産物>と(.5) <自然>が、16語と10語で、多くなっているが、意味分野間の数の差は小さくなってきている。

「昭和版」は音訳が急速に勢力を伸ばした版である。意味分野別の割合にも変化が起き、(.3) <人間活動>に関する語が急増する一方、(.5) <自然>に関する語の勢いは伸びず、「昭和版」

」に登録の中心とする原語全体に占める割合としては最下位に落ちてしまう。意味分野別の力関係を、全体に対する割合という点から見ると、多い順に、(.3) <人間活動>・(.4) <生産物>・(.2) <主体>・(.1) <抽象的關係>・(.5) <自然>となり、第3章で述べた結果と一致している(注16)。

「昭和版」を中心に登録された(.3) <人間活動>に属する原語の中には、[Comic (コミック)] [Concert (コンサート)] [kinema (キネマ)] (以上「tS」、つまり「大正版」初出)といった娯楽に関する語が含まれており、特に「昭和版」で初めて、しかも多数の訳が登録された原語(「S」)の中には、[Batting (バッティング)] [Play (プレー)] [Stroke (ストローク)] などスポーツに関係するものがたくさん含まれている。また、[Agitation (アジテーション)] [Terrorism (テロリズム)] などその中にあ

表5-B-2: 音訳に限られる原語の数
—登録時期と意味分野別—

版 意		.1	.2	.3	.4	.5	計
明治版	M	1	3	0	5	5	14
	Mt	2	4	1	17	14	38
	Ms	1	0	0	2	0	3
	Mts	2	0	0	10	4	16
小計		6	7	1	34	23	71
大正版	mT	1	3	0	11	5	20
	T	0	0	0	2	3	5
	mTs	0	1	3	1	1	6
	Ts	0	0	1	2	1	4
小計		1	4	4	16	10	35
昭和版	mS	1	1	2	4	1	9
	mtS	0	0	1	4	0	5
	tS	2	4	13	8	4	31
	S	9	10	28	4	6	57
小計		12	15	44	20	11	102
計		19	26	49	70	44	208

り、当時の社会を反映した内容になっている(注17)。一方、「明治版」「大正版」では、意識・音訳ともにされることが少なかった(.2) <主体>に関する原語は、「昭和版」に登録の中心とする音訳に限られる語(表5-B-2)の「mS」「mtS」「tS」「S」として、やや勢力を伸ばしている。この中には[Girl (ガール)] [Baby (ベビー)] [Batter (バッター)]といった個々の人間を表す語がかなりあり、これは先に述べたように、意識で(.2) <主体>に属する原語が集団を指す語ばかりであったのとは対照的である。

音訳に限られる原語全体を通して、意味分野別の構成変化を見ると、やはり人間にとっての客体に関する語彙から主体に関する語彙へと増加の中心が移っていることが分かる。

2-3. 意識と音訳の両方を持つ原語

対応する訳が意識または音訳に限られる語がある一方で、意識と音訳の両方を持つ原語というのが多数存在する。多くは、意識が既にあるところに、音訳が入り込んでくるという形をとるが、逆に音訳が存在しているところに意識が後から入り込

むという場合や、意識・音訳が同時に登録される、という場合もある。原語に対する意識と音訳の関係を見るために、音訳が付けられた時期と意味分野を基準にして、意識と

表5-C: 意識と音訳の両方を持つ原語
—外来語見出しの登録時期と意味分野別—

版 意		.1	.2	.3	.4	.5	計
明治版	M	0	0	2	5	3	10
	Mt / mT	2	1	1	6	3	13
	M(t)s / mTs / m(t)S	8	4	7	27	6	52
	小 計	10	5	10	38	12	75
大正版	T	8	4	18	5	9	44
	Ts / tS	15	7	19	26	17	84
小 計		23	11	37	31	26	128
昭和版	S	100	18	107	36	36	297
計		133	34	154	105	74	500

音訳の両方を持つ原語を分類した(注18)。「表5-C」に示すとおりである。
なお、内訳については、巻末《資料2-3》を参照されたい。

2-3-1. 「明治版」から音訳を持つ原語

「明治版」から音訳を持つ原語は、その後音訳が追加されなかった語(「M」)
、「大正版」で追加された語(「Mt」「mT」)、「大正版」と「昭和版」
の両方で追加されたかあるいは「昭和版」のみで追加された語(「M(t)s」
「mTs」「m(t)S」)、あわせて75語と少ない。意味分野別に見ると、やはり、
(.4) <生産物>に属する語が多くなっており、まず、新しい物の名が入っ
てきたことは、従来の指摘どおりであろう。

やや詳しく見ると、音訳の登録と追加登録が「大正版」までで終わった原語
(「M」と「Mt」「mT」)には、[Lemon (枸橼/レモン)] [Shawl
(肩掛/ショール)] など、明治維新前後に初出するとされるものが多い(注1
9)。そして、多少例外はあるものの、訳の種類の違いが意味の違いにあまり影
響せず、[Bacteria (細菌/バクテリア)] などのように、現在でも意識と音
訳が共存している。

これに対して、「昭和版」まで引き続いて音訳が追加登録され続けている原
語(「M(t)s」「mTs」「m(t)S」)の中には、訳の種類が意味に影響して
いるものが多い。特に、「大正版」で意識が初めて登録されたものにこの傾向
が強いようだ。音訳の意味変化に着目しながら若干の例を挙げて、意識が音訳
の意味に影響を与えていく様子を見ることにする。

まず、訳の種類が意味の違いに結び付き、きれいに棲み分ける場合がある。
[Concrete] を例にとり、その見出し語および若干の語釈を挙げると、

- ぐそう・がいねん [具象概念=Concrete concept]
- ぐそう・めいじ [具象名辞=Concrete term]
- ぐたい・てき・いちげんろん [具体的一元論=Concrete monism]
- めいすう [名数] ……③ [Concrete number]

コンクリート [Concrete=混凝土] 「セメント」と砂・砂利又は碎石とに
水を加へ煉り合はせて製したる人造石、……

コンクリート・ぐい [混凝土杭]

コンクリート・こんわき [混凝土混和機=Concrete mixer]

コンクリート・せん [混凝土船]

セメント・コンクリート [Cement concrete]

となる。このうち意識は四つとも「大正版」で新しく登録されている。音訳
「コンクリート」は「明治版」で建築資材として登録され、「大正版」で「コ
ンクリート混和機」など3語が追加登録され、さらに「昭和版」で「セメント
・コンクリート」が1語追加されている。音訳「コンクリート」はどれも(.4)
<生産物>としての意味を担っているのに対し、「大正版」で登録された意識
の方は(.3) <人間活動>に関する語として分類される。原語から見ると、両者
は同じ元から出た異なる語種の訳語と言えが、日本語としては、重なること
なく別語として機能していると言えよう。

これに対し、意識の影響により、音訳の意味が変化していくように見える場
合がある。「明治版」で登録された「スポンジ」の語釈は、

スポンジ [Sponge] 【動】うみへちま。海綿。

となっており、水棲動物(.5)としての意味しか担っていなかった。が、「大正
版」で意識「海綿」が、

かいめん [海綿=Sponge] 海綿動物の弾力性ある繊維状の骨格、数種あり、
洗濯用・化粧用乃至医療用に供せらる。

という形で、水棲動物から採れる素材としての語釈を持って登録されると同時
に、音訳「スポンジ」の語釈は、

スポンジ [Sponge] ①【動】かいめん(海綿)。②海綿状をなす「ゴム」

製のあかすり。③表面に疣(イボ)状の突起ある「ゴム」まり。

となり、海綿状の素材を用いた(.4)〈生産物〉としての語釈が加わって、そちらの方に力点が移っていく。「大正版」で登録された素材としての「海綿」に呼応するかのように、「スポンジ」の語釈は(.4)〈生産物〉の方へ、しかも「ゴム」を用いた(.4)〈生産物〉の方へと、大きく膨らんでいくように見える。実際に意識が音訳に影響を与えたのか、それとも、音訳自体が原語本来の意味を含み込む形で変化していったのかは微妙なところであるが、表面的に見ると、音訳が意識の意味に影響されて変化していった例として捉えられよう(注20)。

さらに、[Second]の場合は、音訳の中心的な意味が「秒(.1)」から「第二(.1)」へと徐々にずれていく。「明治版」での音訳「セコンド」の語釈は、

セコンド [Second] ①一分時の六十分の一、即ち秒。②懐中時計。

であり、これは「大正版」でも変わらない。が、「大正版」では、「びょう [秒=Second]」という意識見出しが登録されるようになる一方で、

セコンド・ハンド [Second hand] (二度人手に渡りし意)ふるて。古物。中ぶる。

という小見出しが「セコンド」に加わるようになる。「昭和版」では、「セコンド」自体の語釈も、

セコンド [Second] セカンド。

セカンド [Second] ①一分時の六十分の一。②第二。③再度。④時計の秒針。⑤懐中時計。⑥野球の第二塁。⑦千里眼。

と変化し、さらに、

セカンド・ラン [Second run] 封切映畫が、次週他の映畫館にて興行上映

せらるゝこと。

セカンド・ワイフ [Second wife] ①第二夫人。めかけ。②のちぞひ。後妻。

という「第二」に関係する子見出しが加わるようになる。「大正版」で、意識見出し「秒」が登録されると同時に、「セコンド[Second]」は「第二」という意味を担って機能し始め、「秒」から「第二」へと意味の中心を移していくように見えるのである。

以上見てきたように、音訳があるところに途中で意識が入り込み、音訳の意味がずれていく例は、一見したところ、音訳という一本の流れの中に意識という流れが横から流れ込むことによって生じる変化のように見える。が、これは、意識という流れが入ったことによって起こった変化なのか、それとも、音訳自体が道筋を変えたために起こった変化なのか、それは一概に断定できない。原語本来の意味を意識するかどうかという問題も絡んでおり、それぞれの語の事情によって異なるのであろう。

2-3-2. 「大正版」から音訳を持つ原語

「大正版」から音訳を持つ語は、意識の登録時期から、「明治版」で意識が存在するところに「大正版」で音訳が入り込んできたものと、「大正版」で意識と音訳が同時に登録されたものの二つに分けられる。数量的には後者が圧倒的に多い。また、音訳の意味変化という点から見ると、意識とは別語として機能しているものと、重なりながらも意味分野を分担して機能しているものとに分けられる。

まず、別語として機能しているものの例として、「明治版」から

しうくわ・カリウム [臭化カリウム=Potassium bromide]

として登録されている [Bromide] がある。「大正版」では、

ブロマイド [Bromide] 臭化銀乳剤製の印畫紙を用ひたる不變なる粗面の寫眞。

という音訳が登場するが、両者は「昭和版」になっても混じり合うことはない(注21)。

「大正版」で意識と音訳が同時に登録されたものでは、意識「裁判所(.2)」とテニスなどの「コート(.4)」が対応する [Court]、意識「界(.1)」「原(.5)」とスポーツ用の「フィールド(.4)」が対応する [Field]、意識「国際(.2)(.3)」と国際社会主義者同盟「インターナショナル(.2)」に分けられる [International] などがある。なお、音訳「インターナショナル」は「昭和版」では、

インターナショナル [International] ①国際的。世界的。②【社】國際社會主義同盟。

となり、個別組織としての語積と国際的という語積の両方を持ち、原語本来の意味を含み込むような形で、音訳の意味が変化している。

次に、意識と音訳が重なりながらも意味分野を分担していく原語として、「明治版」から意識があるものでは、[School] [Group] などが挙げられる。[School] の意識は、1例を除き(注22)、すべて「学派(.2)」または単に「派(.2)」と訳されて、「明治版」から登録されている。これに対し、音訳「スクール」は、「大正版」から登録され「昭和版」で増加し、「ハイ・スクール [High school]」「オープン・エア・スクール [Open-air school]」など実質的な学校(.2)を意味する語として機能している。また、[Group] は科学関係の學術用語の一部として「基(.1)」「彙(.1)」といった意識を持つが、「大正版」で登録された音訳「グループ」の語積は、

グループ [Group] なかま。むれ。くみ。

となっており、(.1) <抽象的關係>から(.2) <主体>へと意味を広げていく流

れが見られる。なお、[School] [Group] とともに、意識の方がより専門語的であると言えよう。

重なりながらも意味分野を分担している原語で、「大正版」から意識と音訳が同時に登録され始めたものとしては、[Motion] [Relay] などが挙げられる。例えば、[Motion] は意識見出しとしては、

うんどう [運動] ……④ [Motion] 【理】位置の変化。
たんいつ・げんうんどう [単一弦運動 = Simple harmonic motion]
ちゅうしん・うんどう [中心運動 = Central motion]
かどう [渦動 = Vortex motion]
じゅんこう [順行] ……④ [Direct motion] (他8例あり)

などがあり、「運動」「動」「行」という意識が当てられ(.1) <抽象的關係>をあらわす語として機能している(注23)。一方、「モーション」の方は、

モーション [Motion] 動作。行動。
モーションをかける(句)動作によりて、戀愛の意を通ず。
スロー・モーション [Slow motion] ①映画にて、「スクリーン」に映寫する動作を遅緩ならしむるやう、撮影のとき「カメラ」を急速に回轉すること。②野球にて、投手の遅緩なる投球動作。

となっており、ほぼ(.3) <人間活動>を表す語として機能していることが分かる。また、[Relay] は、

けいでん・き [繼電器 = Relay]
リレー [Relay] ①「リレーレース」の競走者。②「リレー・レース」の略称
リレー・レース [Relay race]
メドレー・リレー・レース [Medley relay race] (「昭和版」より)

となっており、意識「継電器」が(.4)〈生産物〉であるのに対し、音訳「リレー」は、(.2)〈主体〉あるいは(.3)〈人間活動〉を表すと考えられる。

「大正版」から音訳を持つ原語全体では、(.3)〈人間活動〉に関する語が多くなっており、次いでやはり(.4)〈生産物〉が多い。が、その数値は時間の経過とともに平均化される傾向にある。

2-3-3. 「昭和版」で音訳を持った原語

「昭和版」で初めて音訳を持った原語は、(.1)〈抽象的關係〉と(.3)〈人間活動〉に属する語が多く、その意識は、ほとんど「明治版」あるいは「大正版」で既に登録されている。「昭和版」で意識と音訳の両方が同時に初めて登録される例は極めて稀である。これは、時の流れに伴う意識と音訳の勢力変化に呼応していると言えよう。

「昭和版」で加えられた音訳のほとんどは、「明治版」「大正版」で登録された意識見出しの構成要素の一部が音訳されて登録されるという形で現れるように見える。例えば、「大正版」で

こゆう・せい [固有性=Essential property]

しゅごう・ぶん [主成分=Essential constituents]

という意識が登録され、「昭和版」で、外来語見出し、

エッセンシャル [Essential] 本質的。眼目。

が登録された [Essential] がその例として挙げられよう。勿論、本当に一部が取り出されて音訳されたのか、あるいは音訳された語が単独で入ってきたのかはここからは判断がつかない。が、ここでは、まず「昭和版」で加わった音訳は、意味分野から眺めるとどのような特徴を持つか、ということを考えてみたいと思う。それを探るために、意識と音訳の持つ意味（この場合は原語一語からなる外来語見出しの語釈をそれにあてる）との間にずれのあるものを抜

き出して考察を進めていく。

意識と音訳の持つ意味とのずれは、大きく三つのパターンに分けられる。意識の方が対応する意味分野が広がったもの、意識と音訳の持つ意味で意味分野が異なるもの、音訳の持つ意味の方が対応する意味分野が広いもの、である。以上の中では、最後の例が最も多い。あまり多くない例の方から順に見ていく。

意識の方が対応する意味分野が広がったもの、つまり、音訳される際に対応する意味分野が狭くなったものとしては、[Revolution] [Root] などがある。[Revolution] は、「運行(.1)」「公転(.1)」と「革命(.3)」という意識に対応していたが、音訳「レボリューション」の持つ意味、言い換えれば外来語見出し「レボリューション」の語釈は「革命。社会革命。(.3)」となる。数学の「根(こん)(.1)」と植物の「根(ね)(.5)」の両方に対応していた [Root] は、外来語見出し「ルート」の語釈では「こん(根)。(1)」だけとなっている。[Revolution] では(.1)〈抽象的關係〉、[Root] では(.5)〈自然〉に属する部分がそれぞれ抜け落ちている。が、これらの例のように音訳で対応する意味分野が狭くなっていくものはわずかしがなく、特殊な例であると言える。

次に、意識と音訳の持つ意味で意味分野が異なる原語の例として、[Expression] と [Underground] を挙げる。[Expression] は、

しき [式] ……⑤ [Expression]

だいすう・しき [代数式=Algebraic expression]

ゆうり・しき [有理式=Rational expression] (他に「式」9例)

はっそう [發想=Expression]

エクスプレッション [Expression] 表現。表情。

となっており、意識がほぼ「式(.1)」であるのに対して音訳の持つ意味は、「表現。表情。」という(.3)〈人間活動〉に関する語となっている。また、[Underground] は、

ちか・ケーブル [地下ケーブル=Underground cable]

ちか・せん [地下線=Underground line]

ちか・そくりょう [地下測量=Underground surveyint]

ちか・てつどう [地下鉄道=Underground railways]

アンダー・グラウンド [Underground] 【社】当局の眼を眩ましつゝ非合法に行ふ運動。潜行運動。

となり、意識「地下(.1)(.5)」に対して音訳はやや特殊な用法の(.3)〈人間活動〉の語となっている。この二例に代表されるように、「大正版」以前に登録された意識と、「昭和版」で新しく登録された音訳を比較すると、大きく見れば、意識(.1)〈抽象的關係〉Vs音訳(.3)〈人間活動〉という棲み分けをするものが最も多くなっている。

一方、意識(.4)〈生産物〉Vs音訳(.2)〈主体〉という棲み分けも、比較的きれいになされている。[Agent]と[Battery]を例にとると、

しぜん・りょく [自然力=Natural agent] (このみ(.1))

かんげん・ざい [還元剤=Reducing agent]

こちやく・ざい [固着剤=Fixing agents]

さんか・ざい [酸化剤=Oxidizing agents]

しょくばい [触媒=Catalytic agent]

だっすい・ざい [脱水剤=Dehydration agent]

エージェント [Agent] 代理人。代理店。

ガス・でんち [瓦斯電池=Gas battery]

かん・でんち [乾電池=Dry battery]

きゅうこう・ほうだい [穹窿砲臺=Casemate battery]

バッテリー [Battery] 野球にて、投手と捕手との一組、その優劣如何は該「チーム」の強弱に影響すること甚大なり。

となっており、意識「物」に対する音訳「人」という対立を示している点で特徴的である。

音訳の語積の方が対応する意味分野が広いものは50例ほどあり、「昭和版」

で音訳を持った語の6語に1語は、音訳の方が対応する意味分野が広いことになる。また、その広がり方にも特徴があり、音訳で意味分野が広がることにより、(.3)〈人間活動〉をカバーすることになるものが最も多く、意味分野が広がる語全体の約半数を占める。他には、音訳で(.2)〈主体〉の意味が加わっていく形をとるものが10数例、(.5)〈自然〉に(.4)〈生産物〉が加わっていくものが数例、さらに、これらでは括れないものが若干例という内訳になる。

音訳で(.3)〈人間活動〉に関係する意味が加わるもの例としては、[Attraction] [Pure]などが挙げられる。それぞれ、

いんりょく [引力=Attraction]

うちゅう・いんりょく [宇宙引力=Universal attraction]

もうさいかん・いんりょく [毛細管引力=Capillary attraction]

アトラクション [Attraction] ①【理】引力。吸引力。②人目を惹くこと。

じゅんせい・かがく [純正化学=Pure chemistry]

じゅんせい・すうがく [純正数学=Pure mathematics]

ピュア [Pure] 純粹。純潔。純情。

となっている。これらは、科学、特に理工系の語として意識されていたものが、音訳では、より人間に近い部分の意味も合わせ持つようになった例と言えよう。

「昭和版」で新たに登録された音訳のもう一つの特徴は、(.2)〈主体〉としての意味を合わせ持つものが多いということである。特に、具体的な職業名に関する語、『分類語彙表』に従えば(1.241)〈専門的・技術的職業〉に属する語が多い。例えば、[Factor]と[Register]を例にとると、

いんすう [因数=Factor]

こう・いんすう [公因数=Common factor]

ゆうり・かじょう・すう(マ) [有理化乗数=Rationalizing factor]

ファクター [Factor] ①要素。②【数】因数。③【商】代理商。差配人。

きんせん・とうろくき [金銭登録器=Cash register]
じかん・とうろくき [時間登録器=Time register]
じき・かんだん・けい [自記寒暖計=Self-registering thermometer]
じき・せいう・けい [自記晴雨計=Self-registering barometer]
キャッシュ・レジスター [Cash-register (マ)] 金銭登録器。
レジスター [Register] ①書留。登記。②(「キャッシュ・レジスター」
の略)金銭登録器。③運動競技にて、記録係。

となっている。これらと、前述の意識と音訳で「物」と「人」に棲み分けていた [Agent] [Battery] などの例は、ともに、「昭和版」においてそれまで希薄であった(2) <主体>に関する意味分野が如何に補強されていくかという、その方向性を示すものと言えよう。そして、その方向性の一つとして、個々の人間に関する語の充実ということが挙げられる。これは、「2-2」で述べた音訳に限られる原語のうち「昭和版」を中心に登録されたものの特徴と一致すると同時に、意識された(2) <主体>に関する語が全て集団を表すものであったこととは対の関係になるであろう。

最後に、(5) <自然>に(4) <生産物>が加わっていく例としては、

せいう [星雨=Meteoric shower]
りゅうせい・う [流星雨=Meteoric shower]
シャワー [Shower] ①驟雨。②(Shower-bath の略)高所より如露にて、
頭上に水を浴ぶる装置のもの。灌水浴。
おんきょう・しんごう [音響信号=Sound signal]
おんば [音波=Sound wave]
がくおん [楽音=Musical sound]
きんおん [筋音=Muscle sound]
びおん [鼻音=Nasal sounds]
むせい・おん [無声音=voiceless sounds]

サウンド [Sound] ①音。音響。②(Sound picture の略)発声映畫。ト
ーキー。

などが挙げられ、どちらも略語とされている。訳語はまず術語として入って来るといふ従来の指摘を考えあわせると、より一般的な意味の部分が、先に入ってきた意識と共同で担われ、特殊な装置などを表す特別な語として音訳が使われるということも納得できよう。

以上、「昭和版」で音訳を持った語の特徴から、特に次の二点を指摘したいと思う。第一は、音訳は一語の中に複数の意味分野を抱え込んでいく傾向があるということ、第二は、音訳の意味の広がり、(2) <主体>である人間自身や(3) <人間活動>に向かっている、という点である。こうした方向へ向かう流れは、「昭和版」で突然始まったのではない。その根は、よく見れば、「大正版」にも、そして「明治版」にもあったと言えよう。

3. 単純さと複雑さの相生

訳語の流入は確かに、個別的・専門的な語から始まると言える。しかし、日本語の中での勢力を拡大するにつれて、訳語は、それぞれのメカニズムに応じて、異なる役割を果たし始める。これは、原語を視点とし、それに与えられた意識と音訳の比較をすることによって知られる。

本稿で扱った資料で見ると、意識は二つ以上いっしょになって意識見出しを構成することが多く、単独で構成することは少ない。また、意識は、(1) <抽象的關係>に属する語が多く、これは、二つ以上で意識見出しと対応することと表裏一体の関係を成そう。つまり、意識においては、ある語と、それを規定する語の組合わさった形で機能する可能性が高いと言える。これに対し、音訳は単独で外来語見出しを構成することが多く、二つ以上で構成する割合は、意識に比べはるかに少ない。しかし、一つ一つの音訳は、複数の意味を抱え込んで機能する可能性を秘めており、特に、より人間に近づく形で意味を広げていく傾向が見られる。ここに、語感や目新しさだけに終わらない、音訳としての独自性がある。

原語を視点として見た場合、意識は、字が与えられた時点、訳が与えられた時点で、日本語としての意味もおおよそ決定され、基本的にはそれを持ち続けていく(注24)。これに対して、音訳は、訳が与えられた時点での意味の決定力は弱い。最初に与えられた意味だけを担い続ける可能性は、意識の場合に比べて、はるかに小さく、文脈に乗って機能して行くに従って意味を変化させていく可能性の方が高い。その結果、ある一つの音の形は、その中に複数の意味を抱え込みながら、文脈によって初めて特定の意味を担って機能していくようになるのである。

意識は見たり読んだりすれば大体検討がつくが、音訳は予備知識がなければ検討がつかない。それは、こうした日本語としての意味を担う「時」の違い、字という形が与えられた時点である程度意味の規定が行われるかどうかということが、意識と音訳の差として表れてくるからであろう(注25)。

注

- (1) 和語訳には、語感や既存の語との関係など、漢語訳とは区別して扱うべき問題がある。が、「キッス」と「接吻」「くちづけ」というように、本章では音訳・意識のレベルで考えた。[Language of flowers (はなことば)]の「はな」も、[Entomophilous flowers (虫媒花)]の「花」も、意味として大きな差はないと考えたのである。
- (2) 漢語または和語の見出し語で原語が付されているものを意識見出しとし、外来語または外来語の部分を含むものを外来語見出しとして扱う。第2章および第3章を参照のこと。
- (3) 原則として、原語の語形が異なる場合は、すべて別の語として扱ったが、ハイフィンの有無(ex. [Beer] [Beer-])、単数形と複数形(ex. [Root] [Roots])、現在形と過去形および進行形(ex. [Cross] [Crossed] / [End] [Ending])、所有形(ex. [Geissler's])はまとめて扱った。た。但し、[Good] [Goods] のように意味の違いに影響する場合は分けて考えた。
- (4) 意識二つ以上で構成される見出し語が多いということは、原語自体の造語

力もさることながら、対応した漢語の力によるところが大きいであろう。が、本章では、漢語自体の造語力を云々することは避け、そういう性格を持つ漢語に対応させられたこと自体が意味を持つものと考え、あくまでも原語の側から見て考察を進めて行く。

- (5) 外来語見出しの語形を考える際に、特殊音素による違い(ex. 「フット」と「フート」 / [Foot]) や付加された母音の違いによるゆれ(ex. 「マネー」と「モネー」 / [Money]) はまとめて考えた。
- (6) 本稿で扱った資料中には、略語としてのローマ字(ex. ラジオのコールサイン) や、出自不明の語も若干含まれていたが、それらは考察の対象から外した。また、「の」と訳される [of] など、考察の対象とはしなかった。
- (7) 『国立国語研究所資料集6 分類語彙表』(林大氏担当国立国語研究所1964)
- (8) ある原語に対応する複数の訳に、意味分野の違いに関係するような揺れがある場合は、その都度資料にあたり、日本語としての中心的な意味を求め適宜分類した。
- (9) 森岡健二氏編『明治期専門術語集』(有精堂1985) 中に収められている明治7年成立の『薬品名彙』(山口仲美氏担当) に関する調査研究によると、「意味の通じる最小の基本単位」1,197語基中 573語基(47.9%) が漢語語基で占められている。これらは、「西洋医学薬学が怒涛のごとく押し寄せ、江戸時代を通じて培われてきた学問的蓄積の上に、西洋医学薬学の花が開」くなかで「その後の薬学の基礎となったこと」であろう。
- (10) 化学関係の語を分類する場合 (1.436) <薬剤・薬品> と (1.5110) <化学成分> のどちらに入れるべきかで迷うことが多い。基本的に、語釈や複合語などから、薬品名として用いられているらしき語を(4) <生産物> に分類したが、異論もあろう。
- (11) 注(9) の『薬品名彙』では、「外来語語基は、194も見られ、術語形成に大きな役割を果たした……(中略)……化学関係の術語は、西洋科学の生み出した概念であったため、漢語訳が不可能であったのであろう。原語に近い外来語の形で受け入れ、現代に継承されている。」と述べている。
- (12) 7語中の [Cambodia (カボチャ)] [Jacatra (ジャガタラ)] [San-to-me (サントメ)] は物の名として一般化しているため、分類先に迷ったが、

「ジャガタラ縞」「サントメ革」といった複合語をつくること、「カボチャ」の語釈に「《印度支那のCambodiaより伝来せしが故に此名あり》」と語源が示されていることなどから、地名として扱った。

(13) こうした語種の異なる語がくっついた形の見出しの場合、元となることばの一部が音訳され、残りが意識されたものか、あるいは、音訳されたもの以後で意識がくっついたものか、成立の過程は一つ一つ異なる。が、ここで挙げた例はほとんど後者の形で成立したものであろう。

(14) 第3章参照。

(15) 第3章参照。

(16) 但し、版に分類する場合の基準は異なる。第3章では、外来語見出し全体を一つの単位として、どの時点でどの分野に属する語が何語登録されたか、を基準として分類している。対して本章では、原語の一語ごとに訳を対応させ、その登録の中心がどの版にあったかを振り分けの基準としている。基準は異なるが、趨勢に変化がないとは言えるであろう。

(17) 「昭和版」の頃の実際の外来語の使用状況については、第4章参照。

(18) 各原語の意味分野を定めるにあたっては、意識と外来語見出しの語釈の両方を基準とした。両方で所属する意味分野にずれがある場合は、なるべく共通する部分を取り、全く異なる場合は、外来語見出しの語釈を優先させ、中でも音訳が一つで見出し語と対応している場合の語釈を基準とした。これは、音訳されることでどのような意味を担うのかという点に注目しようとしたためである。

(19) 『角川第二版外来語辞典』（あらかわそおべえ氏著1977）により初出文献を調べると、[Catarrh（カタル）]が最も古く1793年の宇田川槐園『内科撰要』、[Brake（ブレーキ）]が最も新しく1913年の『工業大辞典』となっている。全体としては、1860年代から70年代にかけて初出するものが多い。

(20) 昭和6年(1931)富山房発行の『大英和辞典』（市河三喜・畔柳都太郎・飯島廣三郎共著）によると、[Sponge]の解説は、

- ① (a) 海綿（動物をいふ）、(b) 海綿骸、海綿（拭浄メ用、木浴用、吸取用等に供せらる）。② 海綿と同じ用途に用ひらるる物；殊に糸瓜（ヘチマ）の繊維。③ 海綿状物。(a) 発酵させたる又は発酵するやうに酵母を混入し

たる生（ナマ）パン。(b) 海綿状又はカステラ状に製したるプディング。(c) 煉鐵炉より取り出したる鐵。(d) 海綿状になれる金属。④ 砲箒（発砲後砲腔を掃除する具）。⑤ 海綿にて拭うこと、海綿にて洗ひ流すこと、海綿を用ひて木浴すること。⑥ (a) 他人に物を吸取られる人。(b) 他人の厄介となれる人、食客、居候。⑦ 吸取る人。

となっており、特に「ゴム」と明記してある部分はない。また、[Spongeball]という見出しは同辞書には見あたらなかった。

(21) (注20)で引用した辞書によると、[Bromid]の解説は、

- ①【化】臭化物。②プロマイド写真；プロマイド感光紙。

となっており、原語において既に「プロマイド（写真）」の用法が派生していることが知られる。

(22) 「学校」と訳された「かき・がっこう[夏期学校=Summer school]」がそれである。これは「昭和版」まで継続して登録される。一方、「サンマー・スクール」という音訳は「大正版」で登場する。

(23) 『分類語彙表』では「運動」には(1.1510)(1.345)(1.3374)という三つの番号が当てられている。がここでは、具体的な複合語の例から全て(1)に属すると判断した。

(24) 勿論、意識された語も使用のされ方によって与える印象はかなり異なり、当然意味にもずれを生じる。この点に関しては、柳父章氏著『翻訳語成立事情』（岩波新書 189 1982）に詳しい。

(25) ここで敢えて「時」に注目したのは、音語が更に定着していく段階のことを視野に入れたためである。ある音の連続がある一つの意味と直接的に結びついて機能し始めれば、それはかなり漢字と似たものとなる。そうした音の連続は、造語力を持って機能していったであろうと推測されるが、そうした現象を考える際、この「時」の問題は訳語の語種の問題同様に重要な問題となってくるであろう。

結

本論では、明治末期・大正・昭和初期に刊行された辞書および昭和初期に発行された新聞を主たる資料として論を進めてきた。辞書に登録されたことが即ち日本語として慣用レベルに達したことを意味するものでもなければ、新聞で使用された語がその時点の使用語彙の全てでもない。が、辞書も新聞も、ある時点のある語彙を把握しようとする際には、かなり有効な手段となりうるものである。よって、若干の危険性をはらみながら、言い換えれば、辞書と新聞の資料としての限界を念頭に置いた上で、明治末期から昭和初期にかけての訳語語彙の変遷について、以下のような指摘をしたい。

日本語の中で繰り返し使用されることにより、外来語（音訳語）は、原語とのつながりを弱め、日本語として独自の意味を担って機能していき、意識語（主に漢語）は、一つの原語に対応する複数の訳語が、移入時期や分野・専門性の有無によって棲み分けるといった傾向が見られる。

こうして一つ一つの訳語が確定していくのであるが、辞書に登録された訳語語彙を、意味分野という観点から眺めると、外来語語彙は、人間にとって働きかけの対象、客体である〈自然〉〈生産物〉といった意味分野から、主体である〈人間（人間活動の主体）〉および〈人間活動〉へと、流入の中心を移していくことがわかった。つまり、流入の中心は客体から主体へと移り、昭和初期には、人間に関する外来語が急増しているのである。昭和初期の新聞で実際に使用された外来語語彙でも同様の傾向が指摘できる。が、新聞で使用されているが辞書には登録されていない語に注目すると、外来語語彙の流入の中心は、やがて、物事を規定する枠組みである〈抽象的關係〉に移っていくのではないかという予測が成り立つ。一方、意識語彙の流入は大正期までにほぼ終了しており、その中心は主体でも客体でもなく、それらを規定する枠組みである〈抽象的關係〉であった。

そこで、再び、一つ一つの訳語に目を移し、その内部を意味分野という観点から眺めると、意識は、ある語とそれを規定する枠組み〈抽象的關係〉に属す

る語が組合わさり、全体で一語のように機能することが多かった。意識語彙の特色である〈抽象的關係〉に属する語の充実は、その造語力と深く関係しているであろう。これに対し、音訳では、一語は一語のまま機能する場合が圧倒的に多い。が、一方で、一語の中に複数の意味分野を抱え込んでいくという傾向があり、新たに抱え込まれる意味分野としては、〈人間〉と〈人間活動〉が多かった。こうした複数の意味の抱え込みという現象は、意味ではなく音を写すという音訳の特色であり、文脈によって初めて訳語の意味が確定することと相通じるものである。

《資料編》

《資料1》東京朝日新聞（昭和7年）使用外来語一覧

凡例

1. 各語はそれぞれ、どの辞書で登録された見出し語と一致するかにより、四つのグループに分け、それぞれ《資料1-1》～《資料1-5》として示す。
2. 各資料内は五十音順に配列した。なお、濁音等はそれぞれの清音の後に配列した。
3. 各語の横の数字は、抽出調査で現れたそれぞれの語の頻度を表す。
4. 語に伴う記号は以下のことを意味する。
 - W<w> : wという意味または原語に対応する語である。
ex. タンク<水槽> タンク<戦車>
 コール<coal> コール<call>
 - X/Y : XとYはまとめて数えた。
ex. アルミニウム/アルミ
 - Z(z) : ZおよびZzの形がある。
ex. リンク(ス) ← リンク および リンクス
5. ~~~~~を付した語はスポーツ関係語である。スポーツ関係語の選定基準については第4章を参照。

《資料1-1》新聞使用語で「明治版」から登録されている語

アーチ	4	カンテラ	3	ジャケット	3	トラホーム	1
アイ	8	カーセ	2	ジャム	1	トランプ	2
アイヌ	12	カス	81	スタイル	9	トン	183
アウト	25	カラス	58	スタンプ	7	トンネル	10
アカデミー	2	カロン	2	ステーション	6	トック<船>	3
アクセント	4	キス	2	ステッキ	25	トル	302
アスファルト	2	キセル	1	ストーブ	7	ナイフ	5
アヘン	11	キャベツ	10	ストライキ	7	ナトリウム	1
アルカリ	1	キログラム	8	スパクトル	3	ナブキン	1
アルコール	10	キロメートル	17	スリッパ	1	ニコチン	4
アルバム	1	クーテター	2	ズック	1	ニス	2
アルファベット	1	クラシック	1	セカンド	3	ニッケル	5
アルミニウム/アルミ	19	クラフ	131	セメント	63	ネクタイ	10
アンペア	1	クリスマス	5	セルジ/セル	15	ノ	8
アンモニア	5	クレオソート	1	セルロイド	7	ノート	3
アンモニウム	1	クロム	3	センチメートル	1	ノット	3
イルミネーション	1	クロロフォルム	1	セント	104	ハンカチーフ/ハンカチ	11
インキ	2	クラム	30	ソース	7	ハンカチ	6
インチ	10	クリセリン	3	ソーダ	7	ハンモック	5
エーカー	3	ケース	11	ター	1	ハイアル	1
エーテル	2	コイル	1	タイプ	4	ハクテリア	1
エキス	3	コクス	5	タイプライター	2	ハター	13
エスプレント	25	コーヒー	28	タイプ	4	バック(ス)	20
エボナイト	1	コール<coal>	12	タール	5	バット<野球>	7
エレベーター	4	コスモス	3	タバコ	3	バロメーター	5
オーバー	1	コック<料理>	8	タンク<水槽>	9	パイ	14
オーバー<服>	3	コップ	12	タンニン	1	パテ	7
オクターブ	3	コルク	2	タニス	2	パノラマ	2
オハラ	25	コレラ	15	タママイ	2	パン<食物>	32
オムレツ	1	コロタイプ	1	タマモント/タマイ	11	ヒステリー	4
オリブ	5	コロナ	11	タニス	56	ビール	23
オルガン	4	コンクリート	17	チェン	7	ビスケット	3
カーキ	9	ゴム	29	チフス	9	ピアノ	70
カート	6	ゴリラ	3	チェン<オン/チェン>	6	ピストル	99
カーブ	7	ギョーテイト	1	チョーク	1	ピン<pinta>	2
カステラ	1	ギョーニス	1	チョコレート	2	ピン<pin>	3
カタル	2	ギョーニ	1	チョコキ	1	フィート	12
カブレツ	1	ギョーレン	3	チンキ	1	フライ<fry>	4
カナリア	10	チツク	1	テーブル	23	フラン	18
カノン	1	サントイッチ	2	テーブル<通貨>	12	フランネル	2
カバン	1	シカレット	1	テニス	3	ブツ	2
カメラ	12	シャツ	20	テレグラフ	2	ブッシュェル	3
カマ<今>	3	シャベル	2	テント	12	ブラス	5
カリウム/カリ	5	ジャンパン	4	トナカイ	2	アリキ	1
カルスト	1	ジョール	3	トマト	18	アリッジ	1
カロー	13	ジリング	6	トラス	4	アレキ	2
カンガルー	4	シンジケート	14	トラック<車>	39	アローカー	27

プラス	2	モーニング<服>	4
プラチナ	3	モール	2
プラットホーム/ホーム	36	モスリン	13
プロテスタント	7	モデル	9
ベル	5	モルヒネ	5
ベンチ	4	ヤード	20
ベージ	40	ヤール	6
ベーパー	1	ヨット	3
パン	9	ラジャ	5
パンキ	11	ラジウム	14
パンズ	61	ラテン	3
ホテル	114	ランブ	6
ホィット	20	ループル	2
ホーイ	36	ルビ	3
ホート	36	レース<編物>	1
ボール<ball>	18	レース<競走>	71
ホタン	11	レモン	2
ホルト<電圧>	4	レンズ	1
ポイント	51	ワット	3
ポスト	4	ワニス	3
ポリス	2		
ポンチ	1		
ポント	68		
ボンブ	7		
マイル	30		
マクネシア	1		
マクネシウム	4		
マスク	6		
マスト	4		
マッシージ	2		
マッチ<燐寸>	9		
マトロ	3		
マラリヤ	1		
マルメロ	1		
マンカ	4		
マント	1		
マンモス	1		
ミイラ	1		
ミシ	11		
ミルク	1		
ミリメートル	2		
ミルク	6		
メートル	325		
メス	7		
メタル	12		
メリヤス	10		
メリス	2		

《資料1-2》新聞使用語で「大正版」から登録されている語

アーティスト	1	カソリン	21	シチュー	2	タリヤ	1
アイロン	5	キー	2	シャン	3	タンピンク	11
アスパラガス	4	キッド	1	シルケット	1	チーク<木材>	1
アトラス	1	キネマ/シネマ	31	シロップ	1	チェック	1
アナキズム	3	キャビン	2	シシクル(ス)	32	チップ	9
アフター	2	キャビタリズム	1	シキタリス	1	チャーチ	1
アフガント	3	キャラメル	5	シアテリヤ	1	チュリップ	2
アマチュア	17	キンク	2	シアシー	2	フントラ	1
イスラム	1	ギター	5	シヤナリズム	7	テア	10
インテリゲンチヤ	3	ギルト	1	シレンマ	1	テザート	1
インバネス	1	クイン	3	スイッチ	5	テザイン	2
ウイスキー	7	クラス	34	スカート	4	テスク	1
ウーマン	3	クラスメート	1	ズル	2	テツキ	5
ウエルカム	1	クオリネット	2	ズキ	56	テニール	10
ウオッカ	1	クランク	1	スクール	7	テモクテシ	5
ウオッチ	1	クリーム	12	スケイティング	2	テモストレーション	4
エスカレーター	1	クリスチャン	2	スケート	37	テリケート	16
エスキモー	4	クロック	1	スケッチ	15	トラス<競技場>	16
エチレン	1	クロニクル	1	スター	26	トランク	16
エナメル	1	クラウスト	15	スタート	39	トロック/トロ	3
エプロン	2	クリコケン	7	スタント	32	ドラマ	42
エメラルド	1	クループ	7	スチーム	2	ナイト<夜>	1
エロキューション	1	ケアフル	1	ステージ	6	ネアブル	1
エンサイクロペディア	1	ケートル	1	ステートメント	5	ネオン	5
エンジン	5	ケーム	39	ステップ	6	ノック	13
オアシス	1	ケルマン	1	ストック	16	ハート	3
オーケストラ	41	コート	1	ストライク	1	ハモニカ	27
オートバイ	6	ゴラス	6	スパーク	1	ハンター	2
オートミール	2	コスモポリタン	1	スパイ	3	ハンマー	7
オーホエ	2	コルネット	1	スパート	43	ハン	10
オートラート	1	コレホソテンズ	1	スパス	1	ハイオリン	29
オパリスク	14	コンサート	2	スレート	1	ハケツ	1
オレンジ	2	コントラスト	1	センチメンタリズム	2	ハチ	1
オントル	1	コンパニオン	1	センチメンタル	1	ハズケット	5
カーテン	2	コアラ	1	ソサエチ	5	ハナナ	4
カーネーション	3	ゴルフ	27	ソナタ	10	ハラック	5
カット	13	チーカス	3	ソフ	3	ハランス	1
カフェ	38	チークル	5	ソアラノ	13	ハリカン	1
カラ<色>	1	チイス	1	ソング	1	ハルコニ	5
カルジウム	4	チキソホン	2	タイバースト	13	パイヤッパル	1
カルタ	2	チホタージュ	1	タイム(ス)	29	パス	31
カルテル	1	チラタ	16	タクシ	17	パルチマン	1
カレー	1	チラリ	5	タンク<戦車>	10	パレット	16
カレッジ	10	チロン	24	タンクステン	1	ピアシンス	2
カレンター	3	チーズン	33	ターク	1	ヒーロー	2
カート	3	チソー	6	ターブル(ス)	38	ヒロイン	1
カウ	1	システム	4				

ヒンターランド	2	マチ	4	レモネート	7
ヒント	5	マイナス	5	レントゲン/ル	12
ビオラ	5	マカロニ	1	ローラー	1
ビタミン	8	マダム	5	ロー	1
ビブテキ	1	マチネ	1	ロケーション	3
ビルディング	4	マツ	2	ロマン	8
ビクニック	12	マネジヤ	12	ロマンチズム	1
ビストン	1	マルク	5	ロマンチック	2
ビッチ	6	マントリン	22		
ビラミット	1	ミッジョン	3		
ファン	72	メデー	32		
ビルト	6	メト	1		
フィルム	14	メカホン	3		
フェルト	7	メモ	6		
フットボール	2	メルトン	4		
フレット	1	メロデー	6		
フルジョア/フル	35	メンバー	11		
フルジョアジ	1	モーター	12		
フロマイト	1	モーニング<朝>	2		
フル	30	モタニズム	1		
フラン	5	モット	3		
フレミアム	2	モクタイ	2		
フロクラム/フロ	38	ヤンキー	2		
フロアエッショナル/フロ	7	ヨーケルト	1		
フロレリア/フロ	61	ライオン	1		
フロレリアート	5	ライフ	1		
ヘア	1	ライフル	3		
ハット	1	ラグビー	38		
ハモクロビ	3	ラジ	206		
ハース	8	ラフ	7		
ハースト	17	ラマ	2		
ハット	18	ランチ<食事>	1		
バイント	5	ランチ<船>	3		
バシエント	3	ランニング	2		
バリカン	1	リアリズム	3		
バッキン	4	リーグ	177		
バク	37	リズム	12		
バブ	2	リノリウム	2		
バクモン	1	リューマチ	6		
バク	1	リラ	3		
ホイヤー	1	リレ	44		
ボケット	9	リンク(ス)<link>	5		
ボスター	14	リンチ	1		
ボビエラ	2	レール	12		
ボアラ	4	レコート	92		
ボマート	1	レザ	1		
ボリア	1	レポーター/レポ	7		

《資料1-3》新聞使用語で「昭和版」から登録されている語

アート	1	エビソート	4	キャンパ	6	サーベル	6
アムフェア	1	エボック	1	キヤップ	1	サイトカー	4
アトル	1	エモーション	1	キヤラリー	5	サイト	3
アクション	1	エム	4	キヤンク	38	サイン<sign>	12
アシ	3	エレクトリック	1	クートハ	1	サンデー<Sunday>	1
アシト	4	エロ	7	クォーター	1	サンアル	1
アスリート(oz)	1	エンジン	2	クッション	2	シアター	1
アタシオ	1	エンド	6	クリク	16	シート	8
アッシュ	2	オイル	2	クレーブ	1	シール	1
アッパノカット	2	オーライ	1	クレジット	11	シーン	9
アトリエ	4	オークション	3	クワイター	3	シート	2
アチキスト	1	オートシロ	4	クワシオラス	2	シック	4
アカウンター	31	オープン	8	クワフ	3	シナリオ	2
アカウンタ	37	オフィス	2	クワラフ	2	シャープ	3
アネモネ	2	オフキハバ	10	クワリン	4	ジャンプ	2
アバート	14	オペレタ	11	クワリル	5	ジャンプ	1
アルト	7	オリエンタル	4	クワルパ	2	ジャンルアリズム	3
アビニスト	1	オリシナル	1	クワロス	1	ショー<show>	1
アレクレット	1	カー	10	クワロスク/クワ	14	ジョック	5
アレクロ	7	カーニバル	3	ケーキ	1	シリズ	1
アンコール	3	カウシル	2	ケーブ	2	シンパイヤ/シンパ	19
アンタト	1	カウンター	4	ケチャップ	1	シンボル	5
アンタシテ	5	カウトル	2	コース	66	シヤナリスト	7
イスター	2	カクテル	2	コーチ	8	シヤズ	40
イズム	1	カミア	2	コート<coat>	10	シヤック<トランプ>	5
イテオロキ	14	カジノ	1	コート<court>	43	シヤンパ	3
イアソク	2	カクストロフェ	1	コーナー	3	シヤンパ	6
イミテーション	1	カバ	7	コールド	2	シヤンパ	5
インターナショナル	3	カムフラージュ	3	コスト	16	シヤニア	4
インタビュー	2	カメラマン	2	コッテージ	1	シヤルミン	2
インフレーション	2	カリスト	1	コムニケ	8	シヤーカー	6
インフレーション	75	カリカチュア	1	コムニスム	1	シヤンジャー	1
インホイス	4	カルケット	1	コムンテルン	1	スイート	3
ウイング	2	カレント	1	コレクシオン	3	スイマー	1
ウインター	1	カンパ	1	コンクール	7	スイク	1
ウエーブ	1	カーデミアン	1	コンスタント	1	スーツ	4
ウエスト	1	カール	13	コンタクター	1	スープ	7
エア	1	カッシュ	1	コンチェルト	3	スッキ	2
エージェンツ	1	カレージ	4	コンドル	8	スクエア	1
エール	2	キック	7	コンビネーション	7	スクラム	3
エキストラ	5	キャスト	2	ゴール	35	スクリーン	6
エキセントリック	1	キャッチ	4	ゴールド	4	スケール	2
エキゾチック	1	キャハレ	6	ゴシップ	1	スケジュール	7
エコイスト	1	キャビネ	1	ゴロ	3	スケルソ	2
エフォート	1	キャブテン/キャブ	4	ギージ	5	スピア	15
エッセイ	1	キャンデー	1	ギート	2	スタジアム	16
エッチング	2	キャンピング	1	ギート	43	スタジオ	14

スタンダード	2	チャーター(ト)	3	ナンセンス	15	パンチ	2
スバル<steal>	1	チャールストン	2	ナンバ	11	パンツ	1
スチール<steel>	27	チャレンジ	5	ニクロ	3	パンツマイム	2
ストア	6	チャンス	22	ニッケネム	1	パンフレット	5
ストーリー	5	チュア	1	ニョアンス	2	ヒール	1
ストップ	5	フェッパリン	1	ニョ	4	ヒット	5
ストリート	3	テアトル	1	ニョス	235	ヒル	2
ストリート	17	テセ	3	ネム	3	ヒーズ	1
ストローク	3	テマ	7	ネット	9	ヒシネス	1
ストリート	4	テキスト	32	ノマル	1	ヒアリアテーク	1
スピカー	1	テクニク	2	ノスタルジ	1	ヒロート	2
スプリング	2	ラスト	3	ハート	6	ビアニスト	1
スプリング(ス)	5	テナー	12	ハーブ	1	ビナツ	1
スボ	64	テノール	1	ハッチ	1	ビエロ	1
スボ	4	テレビジョン	31	ハッピー	2	ビクチャー	3
スボ	4	テロ	8	ハッピー	9	ビリット	1
スマート	2	テロリズム	1	ハテナク	3	ピンク	1
スタンパ	1	テノボ	9	ハクスト	3	ピント	1
スロー	6	テート	1	ハス<音程>	3	ファイナル	1
スロカン	23	テビュ	1	ハス<車>	19	ファイナンス	2
スロ	1	テプレション	4	ハチエ	1	フェル	7
セーフ	1	テモカテティック	1	ハツラ	1	ファジスト	8
セクン	1	テリカシー	1	ハット<髪>	7	ファジズム	14
セツ	65	トキー	55	ハリト	3	ファッシュ	42
セレナト(ス)	3	トスト	3	ハンク	4	ファクション	2
セロリ	3	トチ	1	ハンジョ	1	ファンタジー	1
センセーション	24	トナズト	27	ハンク	42	ファンブル	2
センチ	2	トビック(ス)	5	ハンク<ベルト>	3	フェイス	11
センチメント	1	トライ	18	ハンク<楽団>	18	フィロソフィー	1
セネラル	1	トライアル	1	ハンパイヤ	2	フォーク<fork>	1
ソシアル	1	トランパット	3	バ<平均>	2	フォックストロット	4
ソファ	3	トリオ	11	バーク	4	フライ<fly>	8
ターハン	1	トリック	1	バセト	51	フラット	1
タイ	8	トロフィー	4	バ<リリテイ>	1	フリー	8
タキート	1	トア	23	バトナ	4	フルツ	1
タクト	2	トミノ	1	バラー	2	フレッシュ	1
タクル	1	トメスティック	1	バイニア	3	フレッシュマン	1
タッチ	9	トライ	2	バウター	1	アイ	2
タフミック(ス)	3	トライア	9	バシヤマ	1	アライント	1
タビ	4	トアマチック	1	バスポート	1	アラウス/アレス	5
タビ	5	トレス	3	バック	1	アル	1
タンチ	9	トロップ	7	ババ	1	アローチ	1
チズ	8	ナーハス	1	ババイヤ	3	アロック	2
チム	74	ナイブ	3	バラシエ	2	アロズ	2
チア	1	ナイ	3	バリシアン	2	アチ	2
チエン	4	ナショナル	59	バレート	5	アライト	1
チン	1	ナチス	1	パンク	2	アリソリアル	1

《資料1-4》新聞紙用語で辞書(「明治版」「大正版」「昭和版」)に登録されていない語

プレート	6	ミラクル	1	レジバー	1
プレジデント	11	ミリオン	3	レストラン	1
プレス	3	ムート	1	レスリンク	12
プレゼント<贈物>	1	ムーブメント	1	レセプション	3
プレゼント<現在>	1	メール	2	レディ	2
プロジェクター	1	メッセージ	3	レビュー	17
プロセス	1	メッセージャー	1	レフェリー	3
プロダクション	4	マトロリス	1	レベル	6
ウモニー	6	メニュー	1	ローズ<傷物>	4
ハビター	6	メランコリー	2	ロープ	2
ハビター	5	メリノ	1	ロープ	4
ハンジーン	1	メロン	6	ローン<lawn>	4
ハンゾール	2	モダン	15	ロケット	7
ペーブメント	1	モチーフ	3	ワーク	6
ホース	2	モテラート	2	ワールト	3
ホール<hall>	37	モホ	1	ワイヤ	2
ホット	5	モトリウム	12	ワックス	1
ホーカル	1	モラル	3	ワルツ	7
ホーナス	3	モンズン	1	ワンダフル	10
ホクサー	2	モンタージュ	1		
ホクシンク	1	ユーモア	5		
ホックス	4	ユーモラス	4		
ホエム	3	ユーモリスト	3		
ポーズ<pause>	2	エオン	2		
ポーズ<pose>	9	エホム	5		
ボーチ	1	ライター<lighter>	1		
ボート	1	ライト<light>	3		
ボートレイト	3	ライン	5		
ボルカ	5	ラスト	9		
マーク	11	ラブ	1		
マーケット	2	ランナー	3		
マーチャント	1	リーター	2		
マイクフォン/マイク	18	リート<lied>	1		
マザー	1	リート<lead>	45		
マスター	5	リコンストラクション	2		
マニア	1	リザイタル	1		
マネキン	2	リスト	2		
ママ	3	リュックザック	1		
マヨネーズ	4	リンク<link>	3		
マルキススム	10	リンク	4		
マルキスト	3	ルージュ	2		
マンネリススム	1	ルーム	1		
ミス<Miss>	12	ルール	3		
ミスター	2	ルンペン	24		
ミステーク	1	レート	6		
ミセス	1	レーヨン	2		
ミュージック	4	レクタ	6		

アム(ズ)	1	ウエルター	15	ガムテン	1	コンシュラー	1
アイ<I>	1	ウエスト	16	カルゲン	1	コンセルバトワール	1
アイ<eye>	1	ウエスタン	1	キープ	7	コンタクトジャン	1
アカデミック	4	ウスター	2	キット<子供>	1	コンティニューイ	1
アカセアタンス	3	エ<et>	1	キャリー	1	コンテスト	1
アクセンチュエート	1	エイト<eight>	15	キュール	1	コンディショニング	20
アクチュアル	1	エートス	1	キロン	3	コンバインメント	5
アクト	1	エキザンシユレ	1	キワット	1	コンバニオネート	1
アクロン	2	エキシビション	3	キヤク	1	コンパルシス	1
アコーデオン	1	エキステンション	1	クインテット	3	コンボース	1
アコリ	2	エスチーム	1	クォーテリ	1	コー	1
アスレティック	2	エスパランチスト	3	クランク	1	ゴルフ	2
アタリン	7	エロス	1	クラム	1	コロス	1
アッコイ	1	エンボシ	1	クリーナ	1	チ	8
アット	1	エンバイヤ	2	クリスタル	1	チヤ	1
アトミラ	1	エンプレス	5	クリンカー	2	チヤパンス	2
アナーキー	5	オー<oh>	1	クル	24	チヤン	2
アノラック	1	オールドリアム	2	クル	1	チヤニ	2
アビール	5	オーバラント	1	クレロ	1	チヤポート	2
アプチン	1	オーブニング	1	クレジエント	1	チヤワール	2
アプロ	1	オルケイス	1	クロコタイル	1	チヤアラレット	1
アポートル	1	オフィシアル	1	クロカス	2	チヤルベージ	1
アリケル	2	オフィショ	2	クロマチカ	2	チヤロン<腰巻>	14
アルバムレイト	1	オブ	9	クロワチア	3	チヤン	3
アルビオ	2	オブ・コース	2	クット	4	チヤンキュー	3
アルハニス	1	オブローモアシナ	1	クットマン	1	チヤンタル	2
アルバシオ	1	オブレーション	1	クTRAS<草>	1	チヤント<sand>	1
アンギンアル	1	オモニ	1	クラタン	1	チヤンバ	2
アンタージャツ	1	オリオン	2	クアラルクス	1	チヤンパン	1
アント	5	オリチニ	1	クレー	1	チヤンルーム	1
アンナ<通貨>	1	オリジエ	2	クレート	1	チヤンシ	7
アンバチター	1	オリジエート	11	クアル	2	チヤン	1
アンリオ	1	カール<curl>	1	クセルシヤフ	2	チヤット<orツ>	10
イースト	1	カオス	1	クット<orツ>	1	チヤンティフィック	1
イェス	6	カスタート	1	コバルトイ	1	チヤール	1
イェアリスム	1	カリシスム	7	コボレーション	3	チヤバート	3
イェマーク	4	カップ	2	コル<合唱>	2	チヤイ	1
イェイ	3	カニトローム	1	コチン	1	チヤックス	4
インター	2	カヌー	1	コプロス	1	チヤイ	11
インターカシ	5	カアリス	1	コマシヤル	1	チヤイシ	1
インターフェア	3	カムオン	1	コメティ	3	チヤニア	2
インテリシエント	1	カムバック	5	コメティアン	1	チヤニオン	1
インテリシユアル	1	カルテット	3	コリテール	1	チヤニアスト	1
インテトネス	1	カルモチン	8	コレイン	1	チヤプレ	1
インビテション	1	カンカン	2	コロネート	2	チヤト	1
ウィア	1	カンターヒレ	1	コロチチュラ	1	チヤフト	1
ウィズ	1	カントリー	1	コン	2	チヤルトリウス	1

シャンヌ	1	スマートネス	2	テンパ ^ラ メンチア	1	ノロエテ	1
シュア	1	スマッシュ	11	テ	1	ノン	1
シュート	9	スマーズ	1	ディスクォリファイ	1	ノア	1
シュープ	1	スモーカー(ス)	1	ディッシュ	1	ノートリシク	1
ショート	2	スモーク	2	ディテクティブ	1	ノカンリアン	1
ショウト	1	スリー	5	テ-リー	4	ノ-ディ-	1
ショルター	1	スリル	1	テ-サ-イ-	1	ノ-ネスト	1
シリコシス	1	スロチー	1	デ-ジ-ジョン	1	ノ-イ<by>	2
シロップ シア	1	セ-ブ	1	デ-ッサン	5	ノ-イエル	1
シロフォン	1	セ-リング	1	デ-フェンス	1	ノ-イオリニスト	1
シソコペ-ション	1	セクルメント	2	テリカ	1	ノ-ウントレス	1
シツク	1	セテ	1	トクッティ	1	ノ-オ-ル	3
シヤ-テ-ン	1	セルテル	2	トス	1	ノ-スキュール	3
シヤ-ナリスチク	2	セルパン	1	トッパ	12	ノ-ックハント	1
シヤステイファイ	1	セルクター	1	トモロウ	1	ノ-ッジ	4
シヤッジ	3	セ-ミナル	1	トランジック	1	ノ-ナー	1
シヤブ	1	ソアル	1	トリヒ-ューン	2	ノ-アチスト	1
シヤンクル	2	ソ-ト	1	トレス	2	ノ-ライエティ	1
シヤンターレ	1	ソフィステイケート	1	トレーター	1	ノ-ライエ-ジョン	1
シヤンタルム	1	ソ-ーン	8	トレンナー	2	ノ-ルチク	1
シヤンピ-シク	1	ターゲ-アラット	1	トロイメライ	2	ノ-レ<踊り>	1
シヤス<deuce>	3	ターン	9	トク	4	ノ-ンタム	12
シヤート	2	タイカ-	1	ト	4	ノ-アチコン	1
シヤルナル	1	タイ<タイトスクラム>	5	ト-ルセ	1	ノ-アフィク	1
シヤッキー	2	タク	1	ト-ティ	5	ノ-セリ	2
シヤンス<シ-ンズ>	2	タアップ	1	ト-ム	1	ノ-ソ	1
スイートネス	1	タラップ	2	トクター	4	ノ-ターフィールド	1
スイシク	1	タワ	1	トック(ス)	1	ノ-フ	1
スカウティング	1	タン	1	トム	1	ノ-アリック	1
スカウト	1	タンジシ	1	トラスティック	1	ノ-ベリト	1
スキーシク	1	タ-イブ	2	ト-ラマチカル	1	ノ-リティ	1
スコアラ-	1	タン<タウ>	1	トリアル	9	ノ-レス	3
スターター	3	タンジシク	1	ト-リル	1	ノ-ン<鍋>	4
スタンディング	1	チェスト	1	ト-レシシク	3	ノ-ヒストリカル	2
ステート	2	チェロ	6	ト-ン	1	ノ-ヒス	6
ステン	1	チカット	1	ナタシオン	1	ノ-ヒックリ-	2
ステンレス	1	チェレンジ-セ	2	ナタル	1	ノ-ヒト-ラジシ	9
ストックシク	1	チャーター	1	ナックル	2	ノ-ヒロイ-ム	1
ストリクト	4	チロキシ	1	チアップチク	1	ノ-ヒンズ-	2
ストレッチ	1	ツ-<to>	1	ニ-ハ-ルシク	1	ノ-ヒ-<be>	2
ストップ	2	ツ-<two>	1	ヌ-ヒ-ズム	1	ノ-ヒート(ツ)	2
スネーク	3	ツナイト	1	ネカ	2	ノ-ヒキ-ン	1
スパ-ン	1	テレク-ラム	2	ネカチア	1	ノ-ヒタ	1
スパ-ンクル(ト)	1	テレハ-	2	ノア	1	ノ-ヒタ-ール	1
スピ-テ-イ	1	テレパ-ション<テレビ>	2	ノ-ス	1	ノ-ヒ-ネカ-	1
スピ-ン	1	デン	1	ノクター	2	ノ-ヒ-バ-チ	1
スプレ	1	デンア	1	ノ-リティ	1	ノ-ピアストル	1

ビーク	1	ア-オール<フォール>	1	マウンテン	2	ライトモチーフ	1
ビ-ア	1	アッシュ	2	マウント	1	ラクト	5
ビ-クル	19	ア-ディング	1	マク-ネイト	1	ラカ-	1
ビルビ-タ	4	アラクタ	1	マシ	3	ラッカー	1
ブイシク	2	アラッシュ	3	マジ-エスティック	2	ラック	3
ブイト	1	アラネル	1	マジ-ック	1	ラップ<lap>	2
ブコ-ット	1	アラランタン	1	マス	1	ラシキユラス	2
ブオン-ア-レ	1	ア-リ-ツ	1	マスカット	1	ラバ-<コ-ム>	1
ブニッシュ	3	アル<pull>	1	マスルカ	3	ラリ-	2
ブ-ト	1	アルシシク	1	マタン	1	ラルコ	5
ブ-ギ-	13	ア-ロ-ット	1	マツ<試合>	14	ランキンク	1
ブ-エル	7	ア-ロテスタンティ-ズム	2	マト-リカル	2	ランク	1
ブ-シシク	1	ア-ロテスト	2	マニ-ック	1	ランサー	4
ブ-イ<four>	18	ア-ロバ-	1	マル	1	ラ-ディ-ック<lead>	1
ブ-イ<fore>	8	ア-ク(ト)	1	マルセル	1	リード<舌>	1
ブ-イハント	4	ア-ネテ-イクチ	1	マント-チロ	1	リ-ル	1
ブ-イワ-ト	2	ア-ル	1	マント-ラ	2	リスク	1
ブ-イ<for>	1	ア-ルテ-イ-ナ	2	マント-リニスト	1	リスリン	1
ブ-イゲル	1	ア-ルナル	1	ミー	1	リク-ン	4
ブ-イ-ス	1	ア-レ-	1	ミス<マジ>	1	リトル	1
ブ-イム	2	ア-ンハ-ル	2	ミスティアス	2	リヒ-シク	1
ブ-イ-ル	6	ア-ア	3	ミックス(ト)	3	リメル	1
ブ-イ-ル	2	ア-チカ	1	ミュージハ-ル	2	リュ-ト	2
ブ-イリア	1	ア-ンビ	1	ミラヌ-	1	リ-フ	1
ブ-イテ-ヌ	1	ホ-イバ-ット	1	ム-ラン	2	リリシ-ズム	1
ブ-イック	3	ホ-エヤ-	1	ム-エ-ル	1	ル	4
ブ-イ-ル	1	ホ-ル(ス)<穴>	2	メン	2	ルビ-	2
ブ-イ<級>	10	ホ-ン	1	メンマスト	3	ルンバ-	1
ブ-イジョン	2	ホ-ラ	1	メジ-	1	レイノ-	5
ブ-イット	1	ホ-ス	3	メタノ-ル	1	レシ-オナル	1
ブル	1	ホ-スク	2	メヌ-ット	5	レタス	2
ブル-ト	14	ホ-テ-イ	2	メロト-ラマ	1	レット	1
ブルキシアル	1	ホ-ア-スレ-	1	モウジ-ヤ-	1	レホ-ン	1
ブルア	2	ホ-ハミ-ア	2	モ-ケ-ジ-	4	ロ-	2
ブルハ-ル	1	ホ-リユ-ム	2	モカ	1	ロ-ン	1
ブルク-ン	1	ホ-レ-	19	モシ-リ	1	ロ-カ-<rocker>	2
ブルゲット	2	ホ-ジ-ラル	1	モスキ-ト/モス	19	ロ-ック<rock>	1
ブルサ-(ス)	4	ホ-ル	3	モタ-ナイズ	1	ロ-ッテ	1
ブル-ス	4	ボ-リテ-ック	1	モメント	1	ロ-ビ-	1
ブルランジェ	1	ボ-レ-ア	1	モンターハ	1	ロ-フ	4
ブル-ト<刃>	1	ボ-ロネ-ス	2	ユー	1	ロ-ント	3
ブル-ア(ス)/ブ	15	ボ-ン	3	ユ-モレスク	2		
ブル-	1	マ-キ-ロクロム	1	ユ-ナイト(ort)	2		
ブル-ト	1	マ-ジ-ヤン	9	ユ-バ-ザル	3		
ブル-ム	1	マ-マレ-ト	1	ライジ-シク/ラ	3		
ブル-ント	2	マ-イン	1	ライティング<write>	1		
ブル-ト	4	マウス<mouse>	1	ライ<級>	13		

《資料2》辞書の見出し語と原語の対応関係一覧

凡例

1. M m (=「明治版」)・T t (=「大正版」)・S s (=「昭和版」) はそれぞれの版で新たに登録された訳があることを示す。
2. 大文字・小文字の別は、大文字の方でより多く登録されたことを示す。
3. 訳(主に意訳)に伴う記号は以下のことを意味する。

<x>: xという語が付加されている訳がある。

ex. Formula(<公>式) 公式←公式(Formula)
式←化学式(Chemical formula)
式←構造式(Constitutional formula)
式←実験式(Empirical formula)
式←分子式(Molecular formula)

* : 異なる訳があるが、その数は2語以内である。

ex. Neutral(中立*)
中立←中立義務(Neutral duties)
中立←中立貨物(Neutral goods)
中立←中立地(Neutral territory)
中立←中立の釣合(Neutral equilibrium)
緩衝←緩衝地帯(Neutral zone)

etc. : 異なる訳があり、一定していない。

ex. Instrument(s)(機etc.)
機←受信機(Receiving instrument)
儀←子午儀(Meridian transit instrument)
器械←光学器械(Optical instruments)
道具←図ひき道具(Drawing instruments)

4. 語末の数字の意味は以下のとおりである。

X/y-z: 登録の中心となる版(新たに登録された訳が最も多い版)で「X」語の新登録がある。三版全体での延べ訳数は「y」語あり、そのうちの「z」語が他の語と複合して用いられている。

《資料2-1》対応する訳が意識に限られる原語(292語)

【M】(2語)

Nitrite(亜硝酸) 5/5-5 Hydroxide(s)(水酸化<物>) 4/4-3

【Mt】(7語)

Carbonate(炭酸<塩>) 5/7-6 Convex(凸) 3/5-5
Nitrate(硝<酸・塩・石>) 3/6-5 Concave(凹) 2/3-3 Fever(熱) 2/4-4
Realization(実現) 2/3-3 Religion(<宗>教) 2/4-4

【Mts】(1語)

Sulphate(硫酸) 4/8-8

【mT】(38語)

Force(d)(力*) 1 9/20-20 Compound(s)(複/<化>合<成>*) 1 7/18-17
Equation(差/方程式) 1 4/15-14 Philosophy(哲学) 1 2/13-12
Oxide(s)(酸化<物>) 1 1/15-14 Negative(陰・負・背etc.) 1 0/11-9
Analysis(分析/解析) 9/10-8 State(国<家>*) 9/10-9
Thermometer(寒暖計) 8/9-8 Chloride(s)(塩化<物>) 7/12-11
Electricity(電気) 7/8-7 Preposition(命題) 7/11-10
Hydrogen(水素) 6/7-7 Peroxide(<過・二>酸化<物>) 6/7-6
Yellow(黄<色>) 6/8-8 Continental(大陸<的>*) 5/5-5
Fix(ed/ing)(固<定・着>*) 5/6-6 Judgment(<判>断<定>) 5/6-5
Mercury(水銀*) 5/6-5 Vacuum(真空<計>) 5/6-5 Ash(灰) 3/4-4
Categorical(定言的/直言*) 4/6-6 Cell(細胞/電池) 4/7-6
Formula(<公>式) 4/5-4 Mirror(鏡) 4/5-5
Projection(投影法*) 4/6-6 Carbonic(<石>炭<酸>) 3/4-4
Caustic(苛性) 3/5-4 Elastic(弾性etc.) 3/4-4
Hypothesis(<憶・仮>説) 3/4-2 Nitrogen(窒素) 3/4-3
Periodic(<週・定・周>期*) 3/4-4 Return(s)(報酬*) 3/4-4

Adaptation(応化etc.) 2/3-0 Lime(石灰) 2/3-2
Primary(第一/原) 2/3-3 Synthesis(<総>合<成>) 2/3-0
Utilitarianism(<功・実>利<教・主義>) 2/3-0

【 T 】 (233語)

<訳が一つに定まっている原語> (76語)

Angle(s/d)(角) 3 2/32-31 Method(法) 1 4/14-14 Heat(熱) 1 3/13-12
Insurance(保険) 1 3/13-12 Flower(s)(花) 1 1/11-11 Ratio(比) 9/9-8
Proportional(比例) 7/7-7 Schist(片岩) 7/7-6 Volcanic(火山) 7/7-7
Absolute(絶対) 6/6-5 Alluvial(沖積) 6/6-6 Concept(概念) 6/6-5
Decimal(少数) 6/6-5 Inorganic(無機) 6/6-6 Proportion(比例) 6/6-5
Wind(風) 6/6-6 Acetate(酢酸) 5/5-5 Blockade(封鎖) 5/5-4
Dye(s)(染料) 5/5-5 Galvanometer(電流計) 5/5-4 Month(月) 5/5-5
Organic(有機) 5/5-4 Pendulum(振り子) 5/5-4 Phosphorus(燐) 5/5-4
Sidereal(恒星) 5/5-5 Sugar(糖) 5/5-5 Sulphur(硫黄) 5/5-4
Valley(谷) 5/5-5 Volcano(火山) 5/5-4 Atomic(原子) 4/4-4
Cheque(小切手) 4/4-4 Collimation(視準) 4/4-3
Earthquake(地震) 4/4-3 Expansion(膨張) 4/4-3 Image(像) 4/4-3
Molecular(分子) 4/4-4 Plant(s)(植物) 4/4-4 Reef(s)(礁) 4/4-4
Serum(血清) 4/4-3 Soil(土) 4/4-4 Tectonic(構造) 4/4-4
Theology(神学) 4/4-3 Worship(崇拜) 4/4-4 Andesite(安山岩) 3/3-2
Axiom(公理) 3/3-2 Bone(骨) 3/3-3 Bookkeeping(簿記) 3/3-3
Buoy(浮標) 3/3-2 Chart(図) 3/3-3 Cruiser(巡洋艦) 3/3-3
Fraction(分数) 3/3-2 Function(s)(函数) 3/3-2 Glacial(氷河) 3/3-3
Gneiss(片麻岩) 3/3-2 Inference(推理) 3/3-2 Latitude(緯度) 3/3-2
Membrane(s)(膜) 3/3-3 Native(自然) 3/3-2 Nautical(航海) 3/3-3
Nerve(神経) 3/3-3 Node(交点) 3/3-2 North(北) 3/3-3
Parallax(視差) 3/3-2 Petrol(石油) 3/3-3 Petroleum(石油) 3/3-2
Pollination(受粉) 3/3-2 Premise(前提) 3/3-2 Pyroxene(輝石) 3/3-2

Quartz(石英) 3/3-2 Radiant(輻射) 3/3-3 Recurring(循環) 3/3-3
Surveying(測量) 3/3-2 Tartar(酒石) 3/3-2 Treaty(条約) 3/3-2
Trigonometry(三角法) 3/3-2 War(戦時) 3/3-3

<訳がほぼ定まっている原語> (122語)

Body(<肉>体) 1 1/11-11 Furnace(火<炉>) 1 1/11-10
Spherical(球<面・体>) 1 1/11-9 Animal(s)(動物*) 1 0/10-9
Distance(<距>離) 9/9-8 Mountain(s)(山<岳>*) 9/9-9
Chemical(化学<的>) 8/8-8 Lead(鉛<糖>) 8/8-7 Sea(海<上・成>) 8/8-8
Military(軍<事・用>*) 7/7-7 Multiple(倍数*) 7/7-5
Parallel(平行*) 7/7-6 Polar(極<線>) 7/7-6 Solid(<立>体*) 7/7-6
Surface(<表>面) 7/7-6 Tax(es)(税*) 7/7-7 Commercial(商<業>) 6/6-6
Formation(<地>層*) 6/6-6 Industry(<工・産>業) 6/6-5
Luminous(<発>光) 6/6-6 Re-(再*) 6/6-6 Segment(弓形*) 6/6-4
Transit(<経・通>過*) 6/6-6 Unit(s/ed)(単位*) 6/6-5
Breeze(<軟>風) 5/5-4 Composite(複<合・成>*) 5/5-5
Cone(<円>錐<体>*) 5/5-4 Continue(ing/d)(継続*) 5/5-5
Contract(契約<説>*) 5/5-4 Direct(直<接>*) 5/5-5
Geometry(幾何学*) 5/5-4 Goods(<財>貨<物>*) 5/5-4
Harbor(港<湾>) 5/5-4 Joint(<関>節<理>*) 5/5-4 Language(語*) 5/5-5
Light(軽<便>量) 5/5-5 Mineral(s)(鉱物<性・学>*) 5/5-4
Mixed(混<合>*) 5/5-5 Neutral(中立*) 5/5-4 Optical(光<学>*) 5/5-5
Pressure(圧<力>) 5/5-5 Protective(保<安・護>*) 5/5-5
Reflection(反<射>省) 5/5-3 Reserve(準備<金・法>) 5/5-4
Solar(太陽*) 5/5-5 Sulphide(s)(硫化<物>) 5/5-4
Variation(変<異・化>*) 5/5-4 Wall(壁*) 5/5-5
Aberration(<収・光行>差) 4/4-2 Alliance(同盟<会>) 4/4-3
Alternate(交<代・番>*) 4/4-4 Armour(ed)(装甲*) 4/4-4
Arsenic(砒<素・石>) 4/4-2 Astronomy(天文学*) 4/4-3
Basic(<塩>基性) 4/4-3 Blood(血<液>) 4/4-3 Blowpipe(<吹>管) 4/4-3

Bud(ing)(<出>芽<法>) 4/4-3 Coefficient(率*) 4/4-3
Congress(会議*) 4/4-3 Copper(銅<鉱>) 4/4-4
Discount(ed)(割引*) 4/4-2 Engineering(<工>学) 4/4-4
Fog(霧<中>) 4/4-3 Gravity(重<力>) 4/4-3 Horizon(地平<線>) 4/4-3
Internal(内<界>) 4/4-4 Legal(法*) 4/4-4
Limit(ed)(<制>極<限>*) 4/4-2 Mine(<水>雷) 4/4-4
Mooring(繫船*) 4/4-3 Moraine(堆<石>積) 4/4-3
Parasite(s)(<活物>寄生<虫>植物) 4/4-2 Planet(s)(遊星*) 4/4-2
Public(公*) 4/4-4 Refraction(屈折*) 4/4-3 Syllogism(推論式*) 4/4-3
Vertical(鉛直*) 4/4-4 Agricultural(農<業>芸) 3/3-3
Amorphous(無定形*) 3/3-1 Capacity(容量*) 3/3-2
Capillary(毛細<管>) 3/3-3 Case(裁判*) 3/3-2
Crystalline(<結>晶<質>) 3/3-2 Determination(<規>決<限>定) 3/3-2
Difference(<差><異>) 3/3-3 Diplomatic(外交*) 3/3-2
Equatorial(赤道<儀>) 3/3-2 Equilibrium(釣合*) 3/3-2
Equivalent(当量*) 3/3-2 Evangelical(福音<主義>教会) 3/3-1
Fan(s)(扇<状>地<風機>) 3/3-1 Fractional(分<數>別) 3/3-3
Fungi(菌<類>) 3/3-2 Geology(地<質>学<般>) 3/3-2
Geometrical(幾何*) 3/3-3 Good(善*) 3/3-3
Hallucination(幻<覺>) 3/3-2 History(<歴>史<観>*) 3/3-3
Hornblende(角閃<石>) 3/3-2 Hypothetical(仮言<的>) 3/3-3
Industrial(<工>産<業>) 3/3-3 Inequality(不等<式>*) 3/3-2
Integral(整*) 3/3-3 Interaction(<交>相<互>作用*) 3/3-1
Inverse(逆*) 3/3-3 Magnetism(磁<気>性) 3/3-1
Mechanical(機械<的>*) 3/3-3 Meteoric(<流>星) 3/3-3
Monometallism(単本位<制>) 3/3-2 Movable(<可>動) 3/3-3
Muscle(s)(<筋><肉>) 3/3-2 Nitric(硝*) 3/3-3 Prize(捕獲*) 3/3-3
Real(実<際>) 3/3-3 Sovereign(主權<者>) 3/3-2
Stress(<応>内<力>) 3/3-2 Temperature(<気>温<度>) 3/3-2
Theoretical(理論*) 3/3-3 Transcendental(超<越>絶<*) 3/3-2

Variable(変<数>光) 3/3-2 Velocity(速<度>) 3/3-2

<訳が異なる2系統にほぼ分けられる原語>(18語)

Deposit(預<金>/鉱床*) 9/9-8 Account(勘定/計算) 8/8-7
Mean(内項/平均) 8/8-6 Circuit(巡回/<回>電<路>*) 7/7-4
Circular(巡回/円*) 7/7-7 Period(<週>期/紀*) 7/7-6
Clay(泥/<粘>土*) 6/6-5 Erosion(浸食/水蝕) 6/6-4
Major(大/優) 5/5-5 Matter(s)(物<質>/<質>料) 5/5-3
Measure(s)(約数/度<法>衡) 5/5-5 Navigation(航海<術>/測~法) 5/5-4
Differential(微分/<較>差<別>) 4/4-3 Dip(傾<斜>差/<伏>俯<角>) 4/4-1
Flashing(閃光/<引>発<火>) 4/4-4 Fundamental(基<本>/原) 4/4-4
Minor(小/劣) 4/4-4 Vessel(s)(管/船<艦>) 4/4-4

<訳が定まらない原語>(17語)

Non-(非<不>etc.) 7/7-7 Division(割り算etc.) 4/4-1
Instrument(s)(機etc.) 4/4-4 Stem(茎etc.) 4/4-2
Accommodation(空etc.) 3/3-3 Atmospheric(大気etc.) 3/3-3
Colony(s)(植民地etc.) 3/3-1 Conjugate(弧etc.) 3/3-2
Contact(混線etc.) 3/3-2 Deviation(航路変更etc.) 3/3-0
Draft(減量etc.) 3/3-2 Freezing(寒etc.) 3/3-3
Glaze(d)(釉薬etc.) 3/3-2 Limestone(鍾乳etc.) 3/3-2
Polarization(偏光etc.) 3/3-1 Range(距離etc.) 3/3-3
Sulphurous(硫黄etc.) 3/3-3

【mTs】(2語)

Acid(s)(酸<性>) 4 7/53-52 Ray(s)(<放射>線*) 1 0/13-13

【Ts】(9語)

Magnetic(磁<気>性*) 1 3/15-15 Anhydride(無水) 8/9-9
Economy(経済<学>) 7/8-7 Meridian(子午<線>*) 7/8-6

Aerial (<架・航>空<気>) 5/6-6 Solution (<溶>液) 5/6-5

Submarine (潜行etc.) 4/5-4 Wage(s) (賃金) 3/4-3

Conation (動向etc.) 2/3-0

《資料2-2》対応する訳が音訳に限られる原語(208語)

【M】(14語)

America(アメリカ) 4/4-4 Barium(バリウム) 4/4-3 Blik(フリキ) 4/4-3

Jacatra(ジャカトラ) 4/4-4 Kalium(カリウム) 4/4-3 Mince(ミンチ) 4/4-3

Mogol(モール) 4/4-3 Veludo(ビロト) 4/4-3 Amalgam(アマルガム) 3/3-2

Antimony(アンチモン) 3/3-2 Magnesium(マグネシウム) 3/3-3 Pik(ピク) 3/3-2

Pound(ポンド) 3/3-2 Troy(トロイ) 3/3-3

【Mt】(38語)

Gum(ゴム) 15/29-27 Potassium(カリウム) 10/17-17 Pump(ポンプ) 10/13-12

Calcium(カルシウム) 8/11-10 Alcohol(アルコール) 7/10-9 Carta(カルタ) 6/11-10

Lens(レンズ) 6/7-6 Sarasa(ササ) 6/8-7 Amania(アマ) 5/6-5

Grofgrein(ゴフグレン) 5/7-3 Olive(オリブ) 5/6-4 Pao(パオ) 5/9-9

Roman(ローマ) 5/6-6 San-Tome(サントメ) 5/7-6 Vidro(ビロト) 5/6-5

Ammonium(アンモニウム) 4/6-5 Collar(カラ) 4/6-5 Natrium(ナトリウム) 4/6-5

Raxa(ラシャ) 4/6-5 Alkali(アルカリ) 3/4-3 Botao(ボタオ) 3/6-5

Iodide(s)(ヨド) 3/6-5 Lemonade(レムネ) 3/4-2 Jabon(シャボン) 3/6-5

Manganese(マンガン) 3/5-4 Page(ページ) 3/4-3 Quina(キナ) 3/5-4

Bacillus(バチルス) 2/3-2 Benzene(ベンゼン) 2/3-2 Cambodia(カホチカ) 2/4-1

Chapeau(シャップ) 2/3-2 Comma(コンマ) 2/3-2 Cossack(コサック) 2/3-2

Coulomb('s)(クーロン) 2/3-1 Halogen(ハロゲン) 2/3-2 Match(マッチ) 2/3-2

Spectrum(スペクトル) 2/3-2 Ton(トン) 2/3-2

【Ms】(3語)

Aniline(アニリン) 3/4-3 Beef(ビフ) 3/5-4 No(ノ) 3/6-5

【Mts】(16語)

Tabaco(タバコ) 19/29-28 Capa(カッパ) 12/16-15

Sodium(ソーダ/ナトリウム) 10/13-12 Soda(ソーダ) 9/15-14

Khsier (キセル) 7/11-10 Aluminium (アルミニウム) 4/6-3 Tar (タール) 4/7-6
Dollar (ドル) 3/6-5 Energy (エネルギー) 3/6-2 Beer (ビール) 2/5-4
Cutlet (カツレツ) 2/4-3 Serge (セルジ) 2/4-1 Shirt(s) (シャツ) 2/5-4
Tent (テント) 2/4-3 Ink (インキ) 1/3-2 Merino(s) (メリノ) 1/3-1

【mT】(20語)

Tincture (チンキ) 6/10-9 Extract (エキス) 5/6-5 Gibao (ジバオ) 5/6-5
Canequin (カナキン) 4/6-5 Coffee (コーヒー) 4/6-4 Cashmere (カシュミア) 3/4-3
Cholera (コレラ) 3/5-4 Christao (クリスタオ) 3/4-3 Cobalt (コバルト) 3/4-3
Cork (コルク) 3/4-3 Diphtheria (ジフテリア) 3/4-3 Flannel (フランネル) 3/5-3
Ham (ハム) 2/3-2 Nickel (ニッケル) 3/4-3 Typhus (チフス) 3/5-4
Creosote (ing) (クレオソート) 2/3-2 Latin (ラテン) 2/3-2
Litmus (リトマス) 2/3-2 Paraffin (パラフィン) 2/3-2
Turpentine (テレピンチ) 2/3-2

【T】(5語)

Chrome (クロム) 4/4-4 Lymph (リンパ) 4/4-3 Oblate (オブラート) 3/3-2
Tungsten (タンクステン) 3/3-2 Turbine (タービン) 3/3-2

【mTs】(6語)

Christmas (クリスマス) 5/9-7 Pest (ペスト) 5/7-6 Panama (パナマ) 4/5-4
Call(ed) (コール) 2/5-4 Ether (エーテル) 2/4-3 Tennis (テニス) 2/4-3

【Ts】(4語)

Barrack (バラック) 6/7-6 Cresol (クレソール) 3/4-2 Copy(ing) (コピー) 2/3-2
Osmium (オスミウム) 2/3-2

【mS】(9語)

Camera (カメラ) 5/6-5 Champion (チャンピオン) 5/6-4 Back (バック) 3/4-3
Case (ケース) 3/4-3 Chocolate (チョコレート) 3/4-3 Watch (ウォッチ) 3/4-3

Ginger (ジンジャー) 2/3-2 Pass (パス) 2/3-2 Pin (ピン) 2/3-2

【mtS】(5語)

Card (カード) 5/8-7 Hall (ホール) 4/8-7 Cement (セメント) 2/4-3
Cloth (クロス) 2/5-4 Stamp (スタンプ) 2/4-3

【tS】(31語)

Love (ラブ) 11/13-12 Film (フィルム) 5/6-5 Bed (ベッド) 4/5-4
Billiard (ビリヤード) 4/5-4 Home (ホーム) 4/6-5
Proletariat (プロレタリアット) 4/5-3 Taxi (タクシー) 4/5-4 Wine (ワイン) 4/5-4
Cake (ケーキ) 3/5-3 Comic (コミック) 3/6-5 Fan (ファン) 3/4-3
Heart(ed) (ハート) 3/4-3 Kinema (キネマ) 3/5-4 Neon (ネオン) 3/4-2
Pocket (ポケット) 3/6-5 Sick (シック) 3/4-3 Song (ソング) 3/4-3
Stage (ステージ) 3/4-3 Sweet (スイート) 3/4-3 Bourgeois (ブルジョア) 2/3-2
Button (ボタン) 2/3-3 Cleaning (クリーニング) 2/3-2 Concert (コンサート) 2/3-3
Cut (カット) 2/3-2 Gasoline (ガソリン) 2/3-2 Golf (ゴルフ) 2/3-2
Guide (ガイド) 2/4-3 Knock (ノック) 2/3-2 Pageant (ページェント) 2/3-2
Sheet (シート) 2/3-1 Woman (ウーマン) 2/3-2

【S】(57語)

Girl (ガール) 21/21-19 Room (ルーム) 15/15-14 Up (アップ) 13/13-13
Hit (ヒット) 8/8-7 Play (プレー) 8/8-8 Jazz (ジャズ) 7/7-6 Kick (キック) 7/7-6
Agitation (アジテーション) 5/5-3 Sky (スカイ) 5/5-4 All (オール) 4/4-4
Camp (キャンプ) 4/4-3 Camping (キャンピング) 4/4-3 Face (フェイス) 4/4-3
Go(ing) (ゴー) 4/4-4 Name (ネーム) 4/4-3 Night (ナイト) 4/4-3
Scene (シーン) 4/4-3 Service (サービス) 4/4-3 Stroke (ストローク) 4/4-3
Address (アドレス) 3/3-1 Baby (ベイビー) 3/3-2 Band (バンド) 3/3-2
Batter (バッター) 3/3-2 Batting (バッティング) 3/3-2 Breast (ブレスト) 3/3-2
Catch (キャッチ) 3/3-2 Chicken (チキン) 3/3-2 Crepe (クレプ) 3/3-2
Cup (カップ) 3/3-3 Date (デート) 3/3-2 Dissolve (ディゾルブ) 3/3-2

Easy(イージー) 3/3-2 Erotic(エロチック) 3/3-1 Fashion(ファッション) 3/3-2
 Goal(ゴール) 3/3-2 Hot(ホット) 3/3-2 Iris(アイリス) 3/3-2
 Lumpen(ルンペン) 3/3-2 Mail(メール) 3/3-2 Mannequin(マネキン) 3/3-2
 Mother(マザー) 3/3-2 Nouveau(ヌーヴォー) 3/3-2 Packing(パッキング) 3/3-2
 Picture(ピクチャー) 3/3-2 Sacrifice(サクリファイス) 3/3-2 Safe(セーフ) 3/3-2
 Score(スコア) 3/3-2 Sex(セックス) 3/3-2 Smoking(スモキング) 3/3-2
 Sport(スポーツ) 3/3-2 Story(ストーリー) 3/3-2 Street(ストリート) 3/3-2
 Team(チーム) 3/3-2 Terrorism(テロリズム) 3/1-1 Topic(s)(トピック) 3/3-2
 Vocal(ボカル) 3/3-2 Wife(ワイフ) 3/3-2

《資料2-3》対応する訳として意識と音訳の両方を持つ原語(500語)
 ※音訳の登録時期により分類し、それぞれの訳の内訳数は省略した。

I: 「明治版」で外来語見出しが登録されていた原語(75語)

I-1: 音訳【M】(10語)

Alphabet(字*アルファベット) Barometer(晴雨計/バロメーター) Bell(鐘/ベル)
 Brake(制動機*ブレーキ) Coil(線輪/コイル) Flint(鉛*フリント)
 Lava(溶岩/ラバ) Lemon(枸橼/レモン) Nitro(火薬/ニトロ)
 Telegraph(電信*テレグラフ)

I-2: 音訳【Mt / mT】(13語)

Arc(弧/アーク) Bacteria(細菌*バクテリア) Broker(仲買人/ブローカー)
 Brush(刷子/ブラッシュ) Catarrh(風邪/カタル) Chain(連鎖*チェイン)
 Diamond(金剛石/ダイヤモンド) Dock(船渠*ドック) Milk(乳/ミルク)
 Note(s)(紙幣*ノート) Shawl(肩掛/ショール) Stove(暖炉*ストーブ)
 Type(基型*タイプ)

I-3: 音訳【M(t)s / mTs / m(t)S】(52語)

Asphalt(地瀝青/アスファルト) Ball(球/ボール) Base(基*ベース)
 Bill(手形*ビル) Boat(艇*ボート) Book(簿*ブック) Boy(少年/ボーイ)
 Chalk(墨/チョーク) Coal(炭*コール) Coke(骸炭*コーク) Common(公*コモン)
 Concrete(具象*コンクリート) Condense(d/ing)(圧縮*コンデンス)
 Cream(酒石英/クリーム) Football(蹴球/フットボール) Fork(叉/フォーク)
 Gas(気体*ガス) Glass(鏡*グラス) High(高*ハイ) Ice(氷*アイス)
 Jacket(衣/ジャケット) Lamp(燈*ランプ) Light(ing)(光*ライト)
 Machine(s)(器*マシン) Mask(除け/マスク) Meter(-re)(計*メーター)
 Money(貨幣*マネー) Moon('s)(月/ムーン) Mortar(膠泥/モルタル)
 Opera(双眼鏡/オペラ) Organ(機関*オルガン) Out(解雇*アウト)
 Paper(紙*ペーパー) Pen(筆/ペン) Piano(裾野/ピアノ) Pipe(管/パイプ)

Point(点*/ポイント) Potential(位置*/ポテンシャル) Race(競走*/レース)
Rice(米/ライス) Sack(背広/ザック) Science(学*/サイエンス)
Second(第二*/セカンド) Sense(感覚*/センス) Sponge(海綿/スポンジ)
Station(所/ステーション) Stick(棒状/スティック) Strike(同盟*/ストライキ)
Style(式/スタイル) Table(s)(卓*/テーブル) Tank(水槽/タンク)
Water(ing)(水*/ウォーター)

II: 「大正版」から外来語見出しが登録され始めた原語(128語)

II-1: 音訳【 T 】(44語)

Cable(電線*/ケーブル) Calendar(暦/カレンダー) Cantharis(芫菁/カンタリス)
Capital(資本/キャピタル) Church(es)(教会*/チャーチ) City(都市*/シティ)
Class(階級/クラス) Classicism(擬古主義*/クラシシズム)
Conductor(導体/コンダクトル) Cyanide(s)(青酸/シアン化)
Egoism(自己主義*/エゴイズム) Emerald(青/エメラルド)
Episcopal(監督/エピスコパル) Flame(焰/フレイム) Gauge(軌*/ゲージ)
Ground(地*/グラウンド) Group(団*/グループ) Horn(笛*/ホルン)
Humanism(人道主義*/ヒューマニズム) Key(調*/キー) Leather(革/レザー)
Loan(s)(借*/ローン) Memorandum(覚書/メモランダム)
Nationalism(国家主義*/ナショナリズム) Nationality(国籍*/ナショナルイティ)
Object(客観*/オブジェクト) Orthodox(正統派/オर्थドックス) Pitch(漆青/ピッチ)
Policy(政策*/ポリシー) Probability(公算*/プロバビリティー)
Propeller(推進器*/プロペラー) Rail(軌道*/レール)
Rationalism(唯理論*/ラショナルイズム) Skate(ing)(氷滑り/スケート)
Slate(板岩/スレート) Socialism(社会主義*/ソシアリズム) Space(空間/スペース)
Subject(主観*/サブジェクト) Suction(吸上/サクション) Technical(工業*/テクニカル)
Term(s)(語*/ターム) Territory(領域*/テリトリー) Who('s)(者/フー)
Wood(木/ウッド)

II-2: 音訳【 Ts / tS 】(84語)

Age(時代*/エイジ) Bag(袋/バック) Bargain(売買/バーゲイン) Belt(帯/ベルト)
Black(黒*/ブラック) Blue(青/ブルー) Bromide(臭化*/ブロマイド)
Building(造船/ビルディング) Camphor(樟腦/カンフル) Car(車/カー)
Carbon(炭素/カーボン) Change(変化/チェンジ) Colour(s)(色*/カラー)
Court(s)(裁判所*/コート) Cross(ed/ing)(十字*/クロス)
Crystal(結晶*/クリスタル) Day(日/デー) Dark(黒/ダーク) Dead(死*/デッド)
Deck(甲板*/デッキ) Demonstration(示威運動*/デモンストラーション)
Desk(卓上*/デスク) Double(s)(複*/ダブル) Drama(劇*/ドラマ)
Emanation(流出/エマネーション) Enamel(led)(琺瑯/エナメル) Engine(機関*/エンジン)
Field(界*/フィールド) Fuse(化溶片*/フュース) Game(s)(競技/ゲーム)
Garden(園*/ガーデン) Green(緑/グリーン) Hair(毛*/ヘア) Hammer(槌/ハンマー)
Hand(手*/ハンド) Hat(帽/ハット) Head(角*/ヘッド) House(住宅/ハウス)
Independent(s)(自/インテペンデント) International(国際*/インターナショナル)
Iron(鉄*/アイロン) Lake(深紅/レイキ) League(同盟*/リーグ) Life(救命*/ライフ)
List(表/リスト) Man(人/マン) Motion(運動*/モーション) Motor(発動機*/モーター)
Over(跨線*/オーバー) Port(港*/ポート) Press(圧機*/プレス)
Psychology(心理学*/サイコロジー) Pulley(滑車/プーリー) Radio(無線/ラジオ)
Railway(s)(鉄道/レールウェイ) Realism(実在論*/リアリズム)
Record(ing)(現波/レコード) Relay(継電器/リレー) Roller(転ばし*/ローラー)
Romanticism(浪漫主義*/ロマンチズム) Run(ning)(継続*/ラン) Sand(砂*/サント)
School(s)(学派*/スクール) Section(方眼*/セクション) Ship(ping)(艦*/シップ)
Show(陳列/ショー) Side(s/d/ing)(辺*/サイド) Sign(標*/サイン)
Signal(信号*/シグナル) Silk(絹糸/シルク) Simple(単*/シンプル)
Society(社会*/ソサィティ) Speech(演説*/スピーチ) Speed(速力*/スピード)
Spirit(霊*/スピリット) Stand(台/スタント) Star(s)(星*/スター)
Store(店/ストア) Summer(夏*/サマー) System(系*/システム) Time(s)(時*/タイム)
Test(ing)(試験*/テスト) Valve(弁*/バルブ) White(白/ホワイト)

III: 外来語見出しの登録が「昭和版」で始まった語: 音訳【 S 】(297語)

Abnormal(変態/アブノーマル) Abstract(抽象*/アブストラクト) Act(条例*/アクト)

Action(運動*/アクション) Agent(剤*/エージェント) Air(空気*/エア)
Altruism(愛他主義*/アルトルイズム) Anachronism(時代錯誤*/アナクロニズム)
Analogy(相似*/アナロジー) Animism(靈魂説*/アニミズム)
Apartment(蜂窩/アパートメント) Aristocracy(貴族政治*/アリストクラシー)
Art(芸術*/アート) Artificial(人為*/アーティフィシャル)
Asceticism(禁欲主義*/アスケティズム) Atmosphere(気*/アトモスフィア)
Attraction(引力/アトラクション) Automatic(自動/オートマチック)
Automobile(自動車/カー) Balloon(気球/バルーン) Bank(銀行*/バンク)
Bath(浴/バス) Battery(電池*/バッテリー) Beauty(美/ビューティー)
Bird('s)(鳥/バード) Block(石*/ブロック) Box(箱/ボックス)
Business(事業/ビジネス) Candy(砂糖/キャンディー) Cap(帽*/キャップ)
Cash(金銭*/キャッシュ) Centre(-er)(心*/センター) Chemistry(化学/ケミストリー)
Child(児童/チャイルド) Circle(s)(圏*/サークル) Climbing(攀縁/クライミング)
Close(d)(閉*/クローズ) Cold(寒*/コールド) Communication(交通*/コミュニケーション)
Company(会社/カンパニー) Compass(羅針*/コンパス)
Composition(合成*/コンポジション) Conclusion(結論*/コンクリュージョン)
Consciousness(意識*/コンシャスネス) Constant(常数*/コンスタント)
Constitution(憲法/コンスティテューション) Construction(建築*/コンストラクション)
Control(管理*/コントロール) Counter(取り/カウンター) Credit(信用/クレジット)
Crime(犯/クライム) Crimson(深紅/クリムソン) Crisis(恐慌/クライシス)
Cube(立方/キューブ) Currency(通貨*/カレンシー) Current(流*/カレント)
Curve(曲線*/カーブ) Cycle(s)(循環*/サイクル) Cylinder(筒*/シリンダー)
Decorative(装飾/デコラチーフ) Defence(防御/ディフェンス) Degree(次*/デグリー)
Democracy(民主主義*/デモクラシー) Detector(器/テテクター)
Determinism(決定論*/デターミニズム) Diplomacy(外交/ディプロマシー)
Diving(潜水*/ダイビング) Doctrine(主義/ドクトリン) Door(鞆摺/ドア)
Drawing(画*/ドローイング) Dress(衣*/ドレス) Dry(乾*/ドライ)
Duty(s)(税*/デューティー) Earth('s)(地*/アース) Education(教育/エデュケーション)
Effect(効果*/エフェクティブ) Electric(電*/エレクトリック) Electron(電子/エレクトロン)
Element(元素/エレメント) Energism(精力主義*/エナジズム) Epoch(期/エポック)

Error(誤差*/エラー) Essential(固*/エッセンシャル) Etching(腐食剤*/エッチング)
Ethics(倫理/エシックス) Evening(燕尾服/イブニング)
Evolution(進化*/エボリューション) Exchange(為替*/エクスチェンジ)
Experiment(試験*/エクスパリメント) Expression(式*/エクスプレッション)
Eye(s)(眼*/アイ) Factor(因数*/ファクター) Faith(信仰/フェイス)
Fatalism(運命論*/フェータリズム) Feeling(感情*/フィーリング)
Figure(s)(形*/フィギュア) Finance(財政/ファイナンス) Finger(指/フィンガー)
Fire(ing)(火*/ファイヤー) First(第一*/ファースト) Focus(焦点/フォーカス)
Fountain(万年*/フアウンテン) Free(自由*/フリー) Fruit(s)(果/フルーツ)
General(一般*/ゼネラル) Generation(世代/ゼネレーション) Gold(金*/ゴールド)
Golden(黄金/ゴールド) Gun(砲*/ガン) Happiness(幸福/ハピネス)
Hard(硬/ハード) Heater(加熱器/ヒーター) Heavy(重/ヘビー)
Hedonism(快樂説*/ヘドニズム) Heel(ing)(傾/ヒール) Help(s)(助*/ヘルプ)
History(史*/ヒストリー) Horse(馬/ホース) Hour(s)(時*/アワー)
Idea(s)(観念*/アイデア) Impression(印象*/インプレッション)
Impressionism(印象主義*/インプレッショニズム) Impulse(衝動*/インパルス)
Induction(感応*/インダクション) Inner(内/インナー) Intellect(知性*/インテレクト)
Intellectual(知識*/インテレクトチュアル) Irrational(無理/イラショナル)
Jack(きりん/ジャック) Labour(労働*/レーバ-) Lake(湖*/レイク) Last(下/ラスト)
Law(s)(法*/ロー) Leaf(葉*/リーフ) Letter(s)(状*/レター)
Level(ing)(水準*/レベル) Line(s)(線*/ライン) Literature(文学/リテラチャー)
Lunar(月*/ルナ) Mark(標*/マーク) Market(市*/マーケット)
Marriage(結婚/マリッジ) Maximum(最高*/マキシム) Mechanism(器*/メカニズム)
Mind(精神*/マインド) Minimum(最少*/ミニマム) Modern(近代*/モダン)
Moral(s)(道德*/モラル) Motive(動*/モチーフ) Movement(s)(運動/ムーブメント)
Mutual(相互/ミューチュアル) Mystery(s)(神秘/ミステリー)
Mysticism(神秘主義*/ミスティシズム) Nation(s)(国*/ネーション)
National(国民*/ナショナル) Natural(自然*/ナチュラル) Nature(自然/ネチャー)
Nebula(星雲/ネビュラ) Needle(針/ニードル) Neo-(新/ネオ) Net(純/ネット)
Net(網/ネット) New(新/ニュー) News(新聞/ニュース) Nihilism(虚無主義/ニヒリズム)

Normal(規定*/ノーマル) Number(数/ナンバ-) Office(s)(周旋/オフィス)
Oil(s)(油/オイル) Open(柵欄/オープン) Order(指図*/オーダー)
Organization(機構*/オルガニゼーション) Original(原*/オリジナル)
Outside(外/アウトサイド) Pantheism(汎神論*/パンスエイズム) Peril(禍/ペリル)
Personality(人格/パーソナリティ) Part(s)(配分/パート) Party(政党*/パーティ)
Pencil(鉛筆*/ペンシル) Pessary(避妊ピル/ペッサリー)
Phenomenon(現象*/フェノメノン) Physical(物理*/フィジカル)
Pilot('s)(水先*/パイロット) Plane(面*/プレーン) Plate(板/プレート)
Pole(極*/ポール) Positive(正*/ポジティブ)
Positivism(実験論*/ポジティビズム) Power(s)(力*/パワー)
Powder(粉*/パウダー) Practical(実践*/プラクティカル) Price(価*/プライス)
Principal(主/プリンシパル) Principle(原理*/プリンシプル)
Print(ing)(版*/プリント) Private(私*/プライベート) Process(版*/プロセス)
Profit(利潤*/プロフィット) Pure(純正/ピュア) Quality(性質*/クオリティ)
Quantity(s)(量*/クオンティティ) Quarter(弦*/クォーター) Radical(根*/ラジカル)
Rational(有理*/ラショナル) Reaction(反応*/リアクション)
Receiver(受話機/レシーバー) Red(赤*/レッド) Reduction(還元*/リダクション)
Register(ing)(登録器*/レジスター) Review(式/レビュー)
Revolution(革命*/レボリューション) Right(権*/ライト) Ring(環*/リング)
Roast(ing)(焙焼/ロースト) Rock(岩*/ロック) Root(s)(根/ルート)
Rose(s)(薔薇/ローズ) Rule(法律*/ルール) Safety(安全*/セーフティ)
Salt(s)(塩/ソルト) Scale(s)(尺*/スケール) Selection(淘汰/セレクション)
Self-(自*/セルフ) Sensation(s)(感覚*/センセーション)
Sensualism(感覚論*/センシュアリスム) Series(級数*/シリーズ) Set(組*/セット)
Shell(弾*/シェル) Shock(s)(震/ショック) Shower(雨/シャワー)
Sight(眼*/サイト) Silver(銀*/シルバ-) Single(s)(単独*/シングル)
Soap(石鹼/ソープ) Social(社会*/ソシアル) Sociology(社会学/ソシオロジー)
Sound(s/ing)(音*/サウンド) Special(特別*/スペシャル)
Speculation(思弁*/スペキュレーション) Spot(点*/スポット)
Spring(ばね*/スプリング) Square(平方*/スクエアー) Standard(標準*/スタンダード)

Steam(蒸気*/スチーム) Steel(鋼*/スチール) Step(段階*/ステップ)
Stop(s)(止*/ストップ) Straight(直*/ストレート) Stuff(石/スタッフ)
Substance(s)(体*/サブスタンス) Suggestion(暗示/サジェッション)
Symmetry(対称*/シンメトリー) Telephone(電話*/テレホン)
Telescope(望遠鏡*/テレスコープ) Temperament(質*/テンペラメント)
Tender(貨*/テナター) Tension(張力/テンション) Terrace(段丘*/テラス)
Terror(恐怖/テロル) Theatre(劇*/シアター) Theory(説*/セオリー)
Third(第三*/サード) Three(三/スリー) Throw(ing)(投げ/スロー)
Total(全/トータル) Touch(試/タッチ) Trade(貿易*/トレード) Tone(音/トーン)
Train(列車/トレン) Transformer(変圧器*/トランスフォーマー) Tree(木/ツリー)
Triangle(三角形*/トライアングル) Tube(s)(管*/チューブ) Two(二/ツー)
Ultra(外/ウルトラ) Underground(地下/アンダーグラウンド) Union(組合*/ユニオン)
Universal(宇宙*/ユニバーサル) Universalism(宇宙神教*/ユニバーサリスム)
Utility(効用*/ユーティリティ) Value(価値*/バリュー) View(s)(図/ビュー)
Wave(波*/ウェーブ) Wedding(式/ウェッジング) Weight(s)(量*/ウェイト)
Will(意志/ウィル) Winter(冬/ウィンター) Wire(線*/ワイヤ)
Wireless(無線/ワイヤレス) Word(s)(単語/ワード) Work(s)(工事/ワーク)
World(世界*/ワールド) Yarn(s)(糸/ヤーン) Year(年/イヤ) Zinc(亜鉛*/シンク)
Zone(s)(帯*/ゾーン)

